

伊甘土地区画整理事業に伴う

# 古市遺跡発掘調査概報

1995年3月

浜田市教育委員会

## 序

平成5・6年度の2年次にわたる古市遺跡の発掘調査も本年度において終了し、ここに発掘調査の概報書を発刊することができました。

浜田市には石見国分寺跡、同国分尼寺跡を始め、その所在地は確定していませんが石見国府も存在しており、古代における石見地域の中心部であります。当教育委員会でも、これらの文化財の解明を行うため石見国分寺跡、下府廃寺跡と発掘調査を実施し、いずれも貴重な調査結果を得ております。

古市遺跡は伊甘土地区画整理事業の実施に伴いその存在が確認され、平成3年の個人宅地建設に伴う一部調査、平成5・6年度の2年次にわたり発掘調査が行われ、遺跡の様相が次第に明らかになってきました。大量の輸入陶磁器の発見は中国、あるいは当時の外交の窓口の博多との交流を示しており、舶来品を求めた人々の姿、古くからの交易拠点としての浜田を伺うことができます。人形などの豊富な木器類、まじないの行われた井戸跡は中世の人々の生活や思想を生の資料により知ることができます。また、古代の瓦なども見つかり、石見国府との関連も伺えます。全国的に貴重な遺跡の発見であり、浜田市の歴史と文化の深さを再認識する上で非常に意義のあるものとなりました。

これらの資料を後世まで伝えることが大きな課題であり、祖先の苦みを知ることにより、「ふるさと浜田」を再発見し文化の香り豊かな浜田を築くことができるものと信じております。

本書の資料が幅広く活用されることにより、文化財保護思想の普及、歴史研究への一助となることを願っております。

おわりに、調査を指導していただいた島根大学の田中義昭、井上寛司両教授並び、桑原韶一先生をはじめとする諸先生方、島根県教育委員会及び関係諸機関に厚く感謝申し上げます。また、あらゆる面から御協力下さいました地元関係者の皆様に対し、深甚なる謝意を表する次第であります。

平成7年3月

浜田市教育委員会

教育長 古原 忠雄



## 例 言

1. 本書は浜田市教育委員会が平成5・6年度に実施した伊甘土地区画整理事業に伴う古市遺跡の発掘調査概報である。

2. 調査は次のような組織で行った。

調査主体	浜田市教育委員会教育長 古原忠雄	平成5年度
調査指導	山中敏史（奈良国立文化財研究所）	平成6年度
	山本信夫（太宰府市教育委員会）	平成5・6年度
	桑原韶一（島根県文化財保護指導員）	平成5・6年度
	田中義昭（島根大学法文学部教授）	平成5・6年度
	井上寛司（島根大学法文学部教授）	平成5・6年度
	村上 勇（広島県立美術館主任学芸員）	平成6年度
	島根県教育委員会 文化課	平成5・6年度
調査員	柳原博英（浜田市教育委員会生涯学習課文化振興係主事）	原 裕司（同）
事務局	浜田市教育委員会生涯学習課	
	生涯学習課長 吉田 澄（平成5年度）	
	宮本延寿（平成6年度）	
	文化振興係長 浅田 勇	
	主事補 佐々木淳也	

3. 調査にあたり協力および従事していただいた方々は次のとおりである。

調査協力

大谷晃二（島根県立八雲立風土記の丘資料館）佐伯徳哉（島根県古代文化センター）、野々村安浩（同）、西尾克己（島根県埋蔵文化財調査センター）、林健亮（同）、広江耕史（同）、守岡正司（同）、岩崎仁志（山口県埋蔵文化財センター）、重松麻里子（太宰府市教育委員会）、篠原芳秀（広島県埋蔵文化財調査センター）、中村博明（島根県警察本部刑事部科学捜査研究所）藤原隆（浜田高校）、小林修司

調査参加者

安部孝幸、岩本一男、岩本春義、岩本孫市、大田温、大屋順子、柏村保雄  
勝部智明、川戸哲哉、木下誠、久米基、黒木欣綱、郭博恵、小寺正吉  
佐々木一長、佐々木義重郎、佐々木茶智枝、佐々木悟、佐々木千尋  
佐々木春雄、佐々木正美、佐々木真実、山藤力、山藤積、重田典子  
其原弘幸、高原静恵、椿幸子、中晴美、中田貴子、中田洋子、中村忠男  
西谷晴美、半場利定、平野有子、増野晋次、三浦文雄、三浦宜典、水口晶郎  
豊光子、吉田良作、吉田安男、和田幸進、吉田真澄

4. 遺跡に関する論考として次のとおり玉稿をいただいた。

島根大学理学部地質学教室 中村唯史  
島根県文化財保護指導員 桑原韶一  
奈良教育大学教授 三辻利一

5. 掘団の方位は国土調査法による第III座標系の軸方向である。

6. 調査区周辺の地形図作成及び基準点設置は出雲グリーン株式会社、地形図への遺構図合成及び空中写真的撮影はワールド航測コンサルタント株式会社へそれぞれ委託して実施した。

7. 遺構番号は以下の略記号を用い、統けて数字番号を第1遺構面は「10」、第2遺構面は「20」をそれぞれ頭につけて表示した。

P（柱穴類）・SB（建物）・SD（溝）・SE（井戸）・SG（池）  
SK（土壤）・SX（その他、石組など）

8. 出土遺物、実測図及び写真是浜田市教育委員会に保管してある。

9. 本書の執筆編集は原の協力を得て柳原が行った。

# 目 次

## 序

## 例言

I.はじめに.....	1
II.位置と歴史的環境.....	2
III.調査の概要.....	4
IV.遺構と遺物.....	11
1.第1遺構面.....	11
2.第2遺構面.....	31
3.遺物包含層・その他の遺物.....	64
V.まとめ.....	77
VI.付論	
古市遺跡の地質的環境.....	83
島根大学理学部地質学教室 中村唯史	
伊甘郷の歴史的背景.....	85
島根県文化財保護指導員 桑原韶一	
古市遺跡出土土器の螢光X線分析.....	89
奈良教育大学教授 三辻利一	

付図 古市遺跡I・II区第2遺構面平面図

## 挿 図 目 次

- |      |                           |      |                                   |
|------|---------------------------|------|-----------------------------------|
| 第1図  | 古市遺跡周辺図                   | 第20図 | SE2003実測図                         |
| 第2図  | 調査区設定図                    | 第21図 | SE2003出土土器実測図                     |
| 第3図  | I 区南壁土層断面図                | 第22図 | SE2004実測図                         |
| 第4図  | I・II区第1遺構面実測図             | 第23図 | SE2006・2007出土土器類<br>実測図           |
| 第5図  | III・IV区第1遺構面実測図           | 第24図 | SE2007実測図                         |
| 第6図  | I 区第1遺構面実測図               | 第25図 | SE2010出土遺物実測図                     |
| 第7図  | I 区第1遺構面出土遺物<br>実測図（1）    | 第26図 | SG2001出土平瓦実測図                     |
| 第8図  | SD1002・1004・1005<br>土層断面図 | 第27図 | SK2001・2002・2007・2008<br>出土土器類実測図 |
| 第9図  | SG1001土層断面図               | 第28図 | SK2009・2012出土土器<br>実測図            |
| 第10図 | I 区第1遺構面出土遺物<br>実測図（2）    | 第29図 | 柱穴類出土土器類実測図                       |
| 第11図 | SD1007・SX1002実測図          | 第30図 | 遺物包含層出土遺物実測図<br>（1）               |
| 第12図 | I・II区第2遺構面<br>主要遺構位置図     | 第31図 | 遺物包含層出土遺物実測図<br>（2）               |
| 第13図 | III・IV・V区第2遺構面<br>実測図     | 第32図 | 錢貨拓影図                             |
| 第14図 | SB2022実測図                 | 第33図 | 貿易陶磁実測図（1）                        |
| 第15図 | SD2002土層断面図               | 第34図 | 貿易陶磁実測図（2）                        |
| 第16図 | SD2002出土土器類実測図            | 第35図 | 第1遺構面SG・SD変遷<br>模式図               |
| 第17図 | SD2002出土木製品実測図<br>（1）     | 第36図 | 第2遺構面主要遺構編年図                      |
| 第18図 | SD2002出土木製品実測図<br>（2）     |      |                                   |
| 第19図 | SE2002出土土器実測図             |      |                                   |

## 図 版 目 次

図版 1	I 区南壁土層堆積状況	図版27	SE2004
図版 2	下府平野全景（西より）	図版28	SE2006
図版 3	古市遺跡全景（南より）	図版29	SE2007
図版 4	古市遺跡全景（北より）	図版30	SE2008全景
図版 5	古市遺跡全景（北西より）	図版31	SE2008鉄鏑埋設状況
図版 6	I・II区全景	図版32	SE2008鉄鏑除去後
図版 7	III・IV区全景	図版33	SE2009
図版 8	V区全景	図版34	SE2010全景
図版 9	I区第1遺構面全景	図版35	SE2010底面
図版10	I区第1遺構面出土遺物 (1)	図版36	SE2010出土遺物
図版11	I区第1遺構面出土遺物 (2)	図版37	SG2001
図版12	SE1001検出状況	図版38	SE2012
図版13	SE1001井側内堆積状況	図版39	SK2001・2002・2007・2008 出土土器類
図版14	SE1002	図版40	SK2008
図版15	SD1007（南西より）	図版41	SK2012
図版16	SK1001・SX1001（東より）	図版42	SK2009・2012出土土器
図版17	第1遺構面出土木簡	図版43	P2092遺物出土状況
図版18	SD2002（南より）	図版44	P201310遺物出土状況
図版19	SD2002出土土器類	図版45	柱穴類出土土器類
図版20	SD2002出土木製品（1）	図版46	遺物包含層出土遺物（1）
図版21	SD2002出土木製品（2）	図版47	遺物包含層出土遺物（2）
図版22	SE2001	図版48	貿易陶磁（1）
図版23	SE2002井側内堆積状況	図版49	貿易陶磁（2）
図版24	SE2002全景		
図版25	SE2002出土遺物		
図版26	SE2003		

# I. はじめに

古市遺跡は島根県浜田市上府町に位置しており、那賀郡金城町を源とする二級河川下府川が大きく平野北部へ屈曲する地点の南側の微高地上に位置する。この仕切構南側一帯は「市尻」、「市」といった地名を残しており、かつての石見國府推定地調査の際にもその他の国府推定地としてあげられていた。（註1）

平成3年にこの地域に昭和63年災害に端を発する伊甘地区画整理事業が提示された。これを受けて、浜田市教育委員会は同年に区画整理事業地内の試掘調査を行い、柱穴、溝などの遺構と土師器、輸入陶磁器などの遺物を確認した。これに伴い、小字名をとつて「古市遺跡」とした。

同年に事業地に隣接して個人宅地の建設計画が持ち上がり、市教委が250m<sup>2</sup>の調査を行った。その結果、掘立柱建物1棟、土壙2、輸入陶磁器、土師器、須恵器、縁釉陶器、瓦などを確認した。（註2）

平成4年に島根県教育委員会文化課、県都市計画課、浜田市教育委員会、市駅前区画整理事務所で古市遺跡の発掘調査と地区画整理事業の進め方について協議を行い、平成5・6年度継続事業として、古市遺跡発掘調査事業を実施することになった。

発掘調査は平成5年6月16日より平成7年3月20日まで実施した。調査費は平成5年度20,584,000円、平成6年度23,024,132円である。

平成5年度は平成3年度調査区の西側一帯の2,464m<sup>2</sup>の調査を行い、ほぼ遺跡の北辺を確認した。遺構は11世紀後半から16世紀まで存続することが判明した。また、遺構検出面が二時期に分かれ、予想をはるかに上回る遺構、遺物が出土した。夏の豪雨も伴い調査は困難であった。平成6年度は平成5年度調査区の井戸の調査と平成3年度調査区の東側1,030m<sup>2</sup>の調査を実施した。区画と考えられる大溝を確認し、遺跡の東端を確認した。さらに溝の括りを把握するために北側の補足調査を行い、遺跡の北辺を確認した。大量の輸入陶磁器を伴う大規模な中世の町跡であり、遺跡の北、東、西側をほぼ確認できた。遺物の出土状況から遺跡の中心は調査対象地外の南側の地域になると考えられる。古代の瓦・須恵器が多く見つかり、古代の遺構が南側の山際にまず展開し、中世にかけてさらに北側に集落が拡大したことが確認できた。

## 註

- (1) 島根県教育委員会「石見國府推定地調査報告Ⅲ」昭和55年
- (2) 浜田市教育委員会「古市遺跡発掘調査概報」平成4年

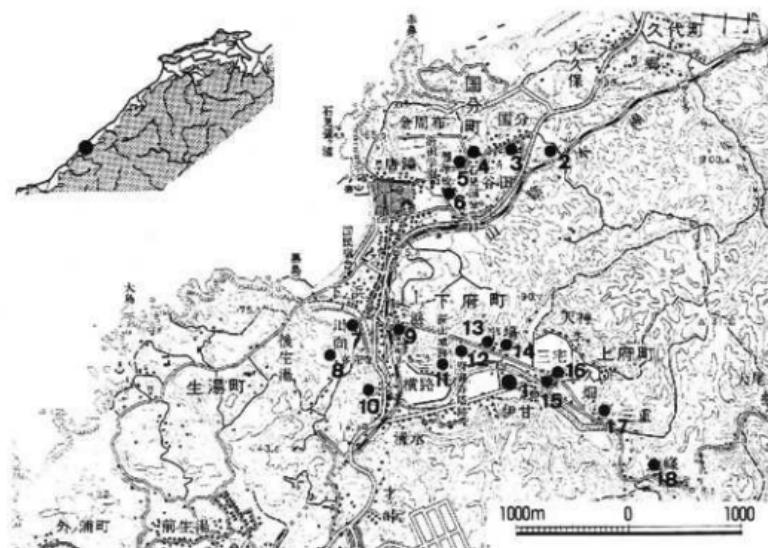
## Ⅱ. 位置と歴史的環境

古市遺跡は島根県浜田市上府町52番地他に所在し、石見地方と呼ばれる島根県西部地域のほぼ中央に位置する。この地域は山々が海岸付近までせまっており、河川河口部には沖積平野が広がる。遺跡は下府平野の中央に位置し、下府川が大きく平野北部に屈曲する地点の南側の現標高5~6mの微高地に立地する。遺跡南側には丘陵が迫っており、遺跡東側の北東方向に延びる小尾根が切り通されて現在の下府川が流れている。

この地域の遺跡は数としては少ないが、石見国分寺・同国分尼寺などが所在することから古代の石見国の中心と考えられる。古代から中世にかけては「那賀郡伊甘郷」に属す。現在、旧石器・縄文時代の遺跡は知られていない。

### 弥生時代

顕著な遺構は確認されておらず、伊甘神社脇遺跡(註1)・、下府庵寺跡(註2)・古市遺跡(註3)・上府遺跡(註4)などで遺物が確認されているのみである。しかし、川向遺跡で環状石斧(註5)、上条遺跡(註6)では扁平紐式袈裟棒文銅鐸が2個体発見されており、確実に弥生文化が展開していたことが伺える。



第1図 古市遺跡周辺図

- |             |               |            |          |
|-------------|---------------|------------|----------|
| 1. 古市遺跡     | 6. 浜田ろう学校敷地古墳 | 11. 笠山城跡   | 16. 上府遺跡 |
| 2. 真古田窯跡    | 7. 川向遺跡       | 12. 下府庵寺跡  | 17. 新延遺跡 |
| 3. 石見国分尼寺跡  | 8. 多陀寺遺跡      | 13. 半場口古墳群 | 18. 上条遺跡 |
| 4. 石見国分寺跡   | 9. 伊甘神社脇遺跡    | 14. 片山古墳   |          |
| 5. 石見国分寺瓦窯跡 | 10. 中ノ古墳      | 15. 宮宅山遺跡  |          |

## 古墳時代

前期・中期古墳は確認されていない。中ノ古墳は墳丘は不明であるが、片袖の横穴式石室が一部残る。半場口古墳群は箱式石棺の1号墳、横穴式石室の奥壁のみが残る2号墳で構成され、いずれも墳丘は不明である。片山古墳は外護列石を廻らす二段築成の方墳で、全長6.4m、幅約1.7mの無袖形の横穴式石室が開口している（註7）。集落跡は確認されていないが、伊甘神社脇遺跡で手捏ね土器を含む5世紀末～6世紀の祭祀土壙が見つかっている（註8）。

## 歴史時代

石見国府は3次の推定地調査（註9）が行われたが、所在地は確定されていない。奈古田窯跡は7～8世紀頃の須恵器窯で、中心部分は烟により破壊されていると考えられる（註10）。白鳳時代末には金堂と塔のみの法起寺式に近い伽藍配置の下府廃寺が建立される（註11）。石見国分寺は現在の金蔵寺境内にあり、塔跡の一部などが調査され、白鳳期の銅造誕生駈迦仏立像が出土している（註12）。国分寺塔跡から約100m南西側には、石見国分寺瓦窯跡が位置している（註13）。石見国分尼寺は現在の国分寺の境内に位置し、石見国分寺と同文の軒瓦や白鳳期の銅造誕生駈迦仏立像が出土している（註14）。

中世では古市遺跡（註15）・伊甘神社脇遺跡（註16）・上府遺跡（註17）・下府廃寺跡（註18）などで遺構、遺物が確認されている。笠山城跡も含め、広い範囲で中世遺跡が分布している。益田氏との関連が深く、伊甘山安国寺、伝御神本（益田）氏三代の墓、白口大明神、上府八幡宮がある。また、明治23年の地籍図を見ると、現在の上府町三宅の平野には縱長の条理の跡が見られる（註19）。

## 註

- (1) 島根県教育委員会『石見国府推定地調査報告Ⅱ』昭和54年
- (2) 浜田市教育委員会『下府廃寺跡』平成5年
- (3) 浜田市教育委員会『古市遺跡発掘調査概報』平成4年
- (4) 島根県教育委員会『石見国府推定地調査報告Ⅲ』昭和55年
- (5) 『浜田市誌 下巻』昭和48年
- (6) 直良信夫「石見上府村発見銅鐸の出土状態」『考古学雑誌22-2』昭和7年
- (7) 前掲註2
- (8) 前掲註1
- (9) 島根県教育委員会『石見国府推定地調査報告Ⅰ』昭和53年 前掲註1・4
- (10) 川原和人「石見の須恵器窯跡」「さんいん古代史の周辺（下）」昭和55年
- (11) 前掲註2
- (12) 浜田市教育委員会『石見国分寺跡第Ⅰ期調査概報』平成元年
- (13) 内田律雄「石見国分寺瓦窯跡」「島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅲ」昭和61年
- (14) 国府町文化財審議会『国府町の文化財』昭和38年
- (15) 前掲註3
- (16) 前掲註1
- (17) 前掲註4
- (18) 前掲註2
- (19) 前掲註4

### III. 調査の概要

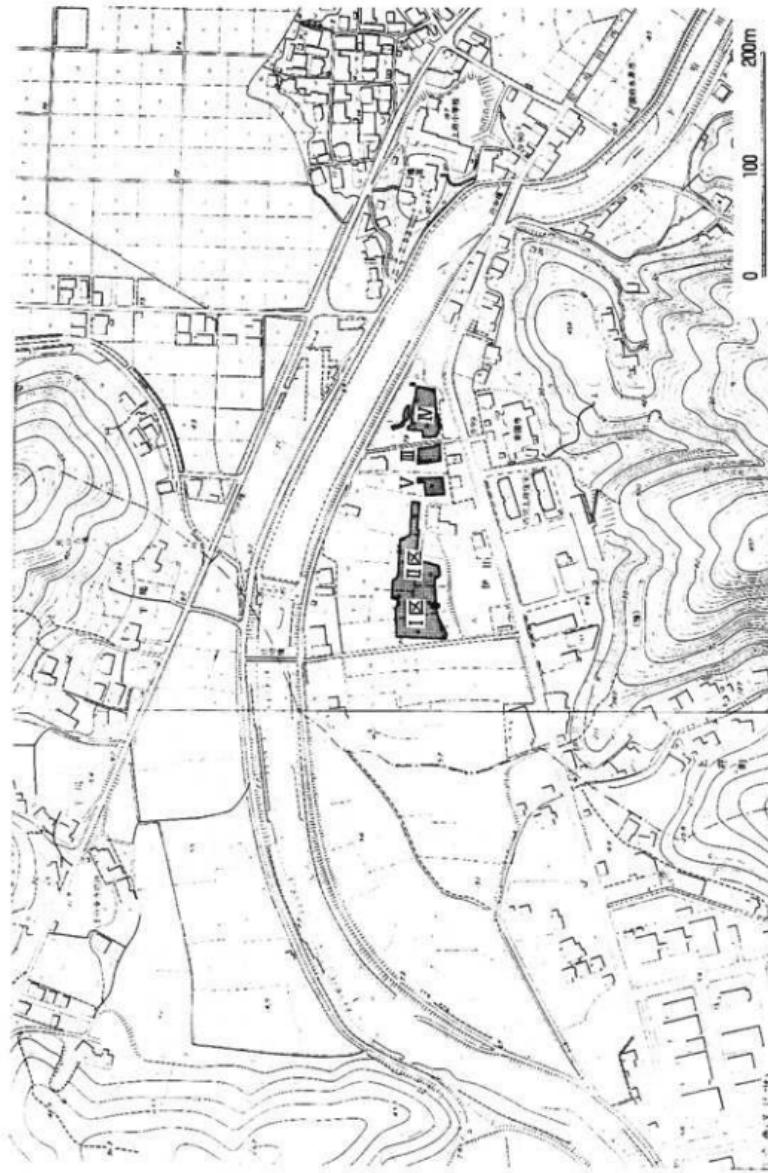
平成3年度に実施した試掘調査と個人宅地に係る調査（V区）により、標高4～5mに中世の遺物を含む黒色系粘質土とその下に柱穴、溝などを確認した。これの結果を受け、遺構が存在する可能性の高い場所にそれぞれ調査区を設定した。平成5年度は、西側の広い範囲に第Ⅰ区を設定し、東側を拡張する形でⅡ区を設定した。平成6年度はV区を挟んだ東にⅢ区、さらに道路をはさんで東にⅣ区を設定した。Ⅰ区は水田面の土を重機により除去し、遺物を含む黒灰色粘質土上面より人力による調査を行った。しかし、黒灰色粘質土上面で柱痕、井戸跡を検出し、遺構面が二面あることが判明した。水田床土直下で検出できる遺構と緑灰粘質土上面で検出できる遺構の二期があり、前者を第1遺構面、後者を第2遺構面と呼称することとした。そしてⅡ区は水田の床土途中まで掘削を行い、以下を人力による調査を行った。

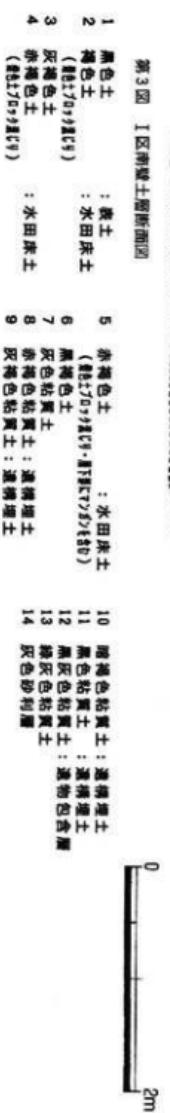
遺跡の基本土層（第3図）は、まず灰色砂利層あるいは砂礫層が堆積し、遺構面の地盤が形成される。この地盤は弥生土器の細片が含まれており、形成時期の下限と考えられる。この基盤層と一部混在しながら緑灰粘質土が面的に広がり遺構面を形成している。この土層はⅠ区の北側、Ⅳ区の東側では漸次粒子が荒くなり砂質に変化する。この変化は下府川との関係によると推定でき、地盤が変化する地点には溝が掘削されており、意識的に区画を行っている。V区、Ⅲ区の北側とⅣ区の南東側は様相が異なっており、前述の砂利、砂礫層上に赤褐色砂質土が堆積し、遺構面を形成していた。

これらの上には黒灰色粘質土（第3図・12層）が面的に広がっており、遺物を大量に含んでいた。この層は調査区全体に広がっているが、層の北端、東端を一部で確認した。第2遺構面の遺構の埋土もほとんどが同系の黒色土であり、一部に見られる薄い小礫層などによらないと分層が困難であり、正確な遺構掘込面が判別できないもののが多かった。第1遺構面はこの黒灰色粘質土を切って作られている。黒灰色粘質土の上には灰色粘質土が一部堆積しているが、大半は直上に水田の床土と考えられる赤褐色土が堆積しており、水田による削平を受けている。

Ⅰ・Ⅱ区の第1遺構面として、池（SG1001）とそれにつながる三小期の水路（SD1002、SD1004）と区画溝（SD1001、1003）に囲まれた建物群（SB1001、SB1002）と井戸跡（SE1001：木組方形縦板組横棟型、SE1002：石組）を確認した。これらはⅠ区に集中しており、上部が削平されていることを考慮しても、この時期の遺跡の一つの中心部であったと推定できる。Ⅱ区にも少數の柱穴が検出された。土層の観察により、SD1002・SG1001→SB1001、SB1002・SD1001、1003・SD1004・SD1006・SG1001→SD1005・SD1006・SG1001という変遷が考えられる。二小期には区画溝と池に囲まれた建物が存在する。区画溝からは刀形、木簡などの木製品が大量にみつかり、陶磁器から15世紀から16世紀頃である。また、調査区北辺に東西方向の河川跡と考えられる砂層が確認され、一時の下府川の支流もしくは南端と推定される。

第2図 調査区設定図

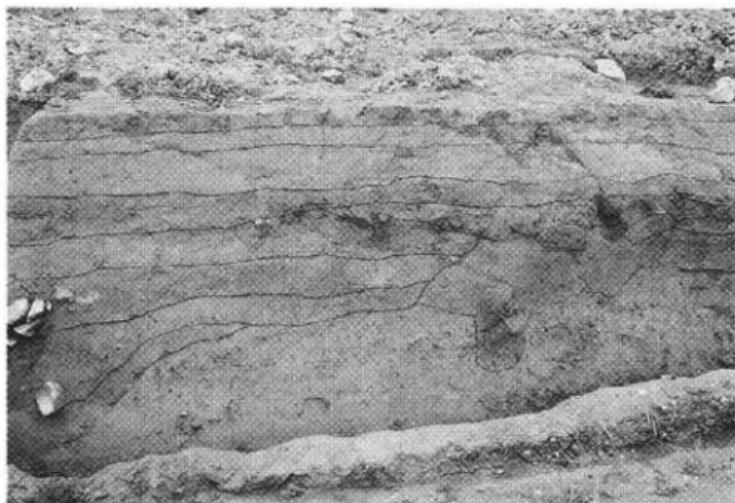




I・II区の第2遺構面は遺構・遺物とともに最も多く、全体に柱穴、井戸跡などの遺構が広がっている。北辺は一部第1遺構面の河川跡により削平されている。また、東西方向の溝(SD 2001)を確認し、以北は柱穴数が激減しており、ほぼ遺跡の北端と考えられる。柱穴は1,742基以上確認した。

III区、IV区は調査指導委員の指導により、IV区西半分の調査をから行い、IV区東半分とIII区の調査に入った。同様に2時期の遺構面が確認されたが、第1遺構面では南北方向の溝(SD 1007)と石匂い(SX 1001)と土壙(SK 1001)のみであり、検出面が高いため削平を受けたと考えられる。

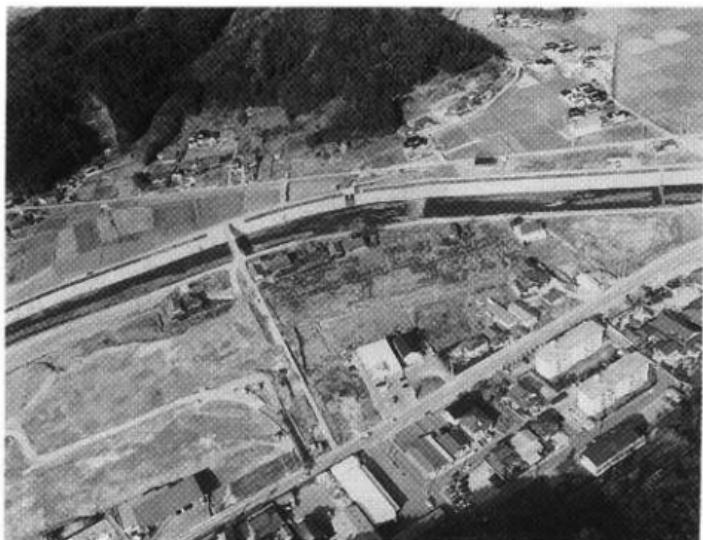
第2遺構面では柱穴群、井戸2基(SE 2011、SE 2012: 石組)、池状遺構(SG 2001)、南北方向の大溝(SD 2002)を確認した。遺物包含層である黒灰色粘質土は終息し、以東には土器の細片のみで遺構はまったく確認できない。地盤も砂地に変り、河川の影響を受けており、遺跡の東端といえる。また、SD 2002の広がりを把握するため北側で確認調査を行った。その結果、SD 2002の幅が広がっていた。遺物包含層である黒灰色粘質土は終息し、河川と推定される砂礫の堆積が確認できた。これらにより、遺跡の北端が確認できた。



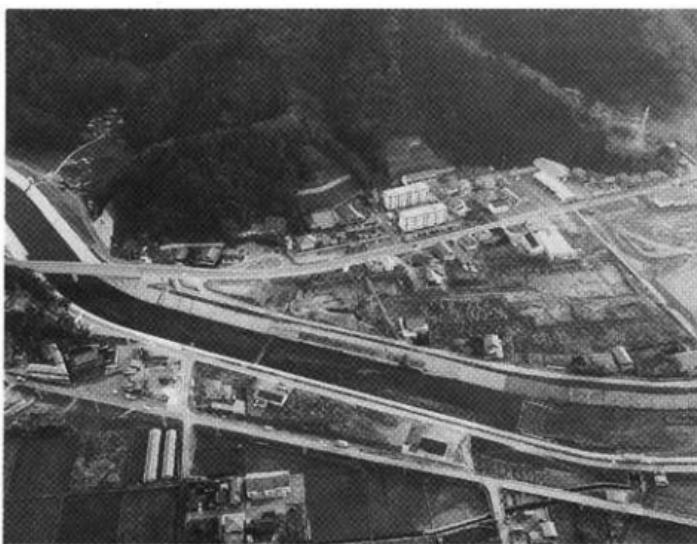
図版1 I区南壁土層堆積状況



図版2 下府平野全景（西より）



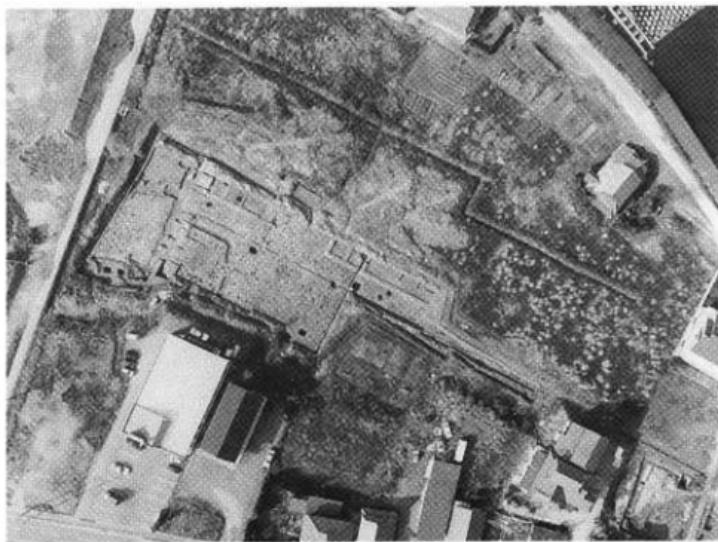
図版3 古市遺跡全景（南より）



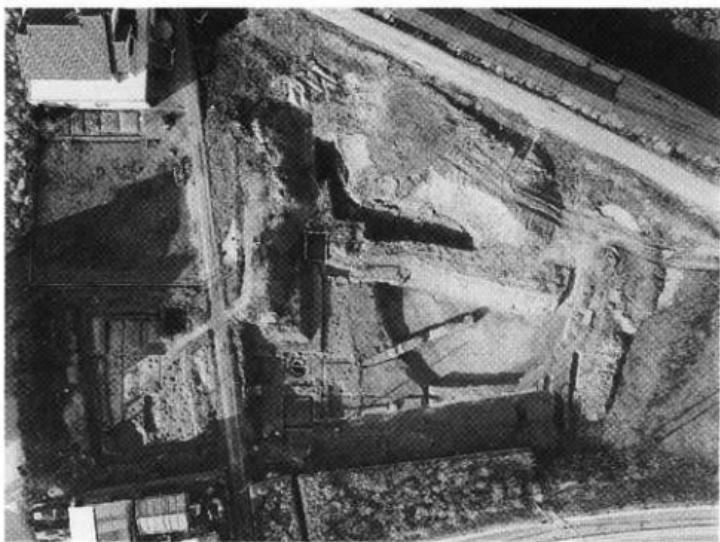
図版4 古市遺跡全景（北より）



図版5 古市遺跡全景（北西より）



図版6 I・II区全景



图版7 III・IV区全景



图版8 V区全景

## IV. 遺構と遺物

### 1. 第1遺構面

第1遺構面はV区を除き、すべての調査区で検出された。I・II区では池と用水を行った水路、区画溝に囲まれた建物2棟（SB1001・1002・SD1001・1002・1003・1004・1005・1006、SG1001）、井戸2（SE1001・1002）、柱穴51がみつかり、III・IV区では石圓い1（SX1001）、礎石状の集石1（SX1002）、土壌1（SK1001）、東西方向の溝1（SD1007）を確認した。特に遺構検出の高さが低いI区では多くの遺構が検出され、II・III・IV区はほとんどの遺構が水田による削平を受け、一部の遺構が残ったと考えられる。

#### SB1001（第4図・第6図）

I区中央で検出された掘立柱建物跡である。SB1002との前後関係は不明である。検出状況で2間（4m）×2間（5.3m）である。柱穴の径は13cm～23cmを測り、深さも14cm～51cmとまちまちである。柱痕が残っており、径10cm～30cmの樹皮が残った材木の端のみを切り落し、尖らせて使用している。

#### SB1002（第4図・第6図）

I区中央で検出された掘立柱建物跡である。SB1001との前後関係は不明である。検出状況で身舎は梁行2間（4.5m）×桁行3間（5.5m）を測り、東西両端に庇が付く。身舎は柱穴径10cm～30cmとばらつきがあるが、径20cmのものが最も多い。深さは11cm～30cmを測り、柱痕は径7cm～15cmのSB1001と同様の加工をしている。縁は柱穴径2.5cm～27cmとばらつきがあるが、径14cmのものが多く、身舎と比べて柱穴径が小さい。柱痕は径9cm～12cmを測る。

#### SD1001（第4図・第6図）

I区中央に位置する溝である。東西に13.4m延び、屈曲して南へ6m延びる。西端は北西方向、南端は南東方向へ若干曲げており、深さ6.3mの二段溝である。SD1003・1004と組み合って区画状の溝になる。土層は下から黒色粘質土、褐色粘質土と水平堆積をしている。いずれの土層も植物質を非常に多く含んでいた。

出土遺物（第7図・1～11）は土師器、木器など大量に出土したが、大多数の土器類は溝自体が遺物を多量に含む黒灰色粘質土を切って作っているため、混入物と考えられる。しかし、木器類は破損しているものが少なく、新しい様相の陶磁器類と併せて溝の埋没時期の資料と判断される。(2)(3)のみ上層の褐色粘質土より出土、後は下層の黒色粘質土からの出土である。(1)は瓦質の擂鉢で内外面ともに灰色である。口唇部は内面に折り曲げて肥厚させ、片口を作り出す。内面は横方向のハケ目の上をナデ調整し、5条の単位で櫛目が施されている。いわゆる防長型擂鉢である。(2)は白磁の酒杯である。釉は乳白色を呈し、内面見込みの釉を輪状にカキ取っている。(3)は漆器碗の底部である。外面は黒漆、内面には赤漆を塗る。(4)は漆器碗で、内外面共に黒漆を塗る。(5)は漆器碗の破片である。

内外面共に黒漆を塗る。なお、外面に赤漆と考えられる斑点が一部に見られる。(6)は鉄製の刀子である。(7)は刀形木製品である。刃部は大きく反り、柄部は上と下に段を付け、抜き身の刀の状態を正確に模している。(8)は隔丸の折敷である。側板が結合した状態で検出したが紐は残っていなかった。矢印状の刻印がある。(9)は糸巻の横木である。(10)は曲物の側板である。底板は無く、結合痕も確認できなかった。返し縫い部は欠損しており、樺紐を内側から外面に通して1列に8段縫じている。外面ケビキと下端部に一部垂直方向の内側ケビキが見られる。(11)は胎土に白、黒色粒子を少量含み、全面に灰青色の釉がやや雜にかかる。李朝のものであろう。

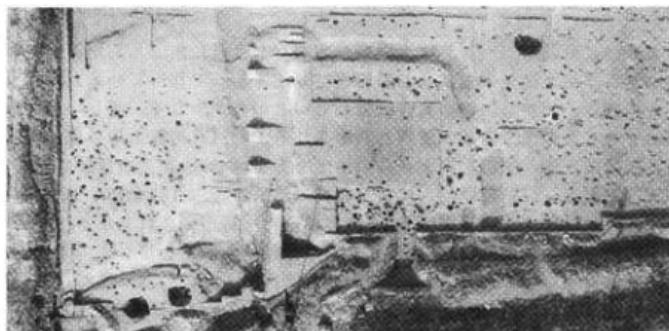
#### SD1003 (第6図)

SD1001の南端から約2m南に作られた溝である。北端は北東方向へ曲げている。南端は調査区外まで延びている。調査した範囲で長さ7.2m、幅3mを測る。深さ6.5mの二段堀で、床はほぼ水平である。土層は下から黒褐色粘質土、黒色粘質土、褐色粘質土と水平堆積している。堆積状況がSD1001と似ており、同様に独立した区画溝と考えられる。

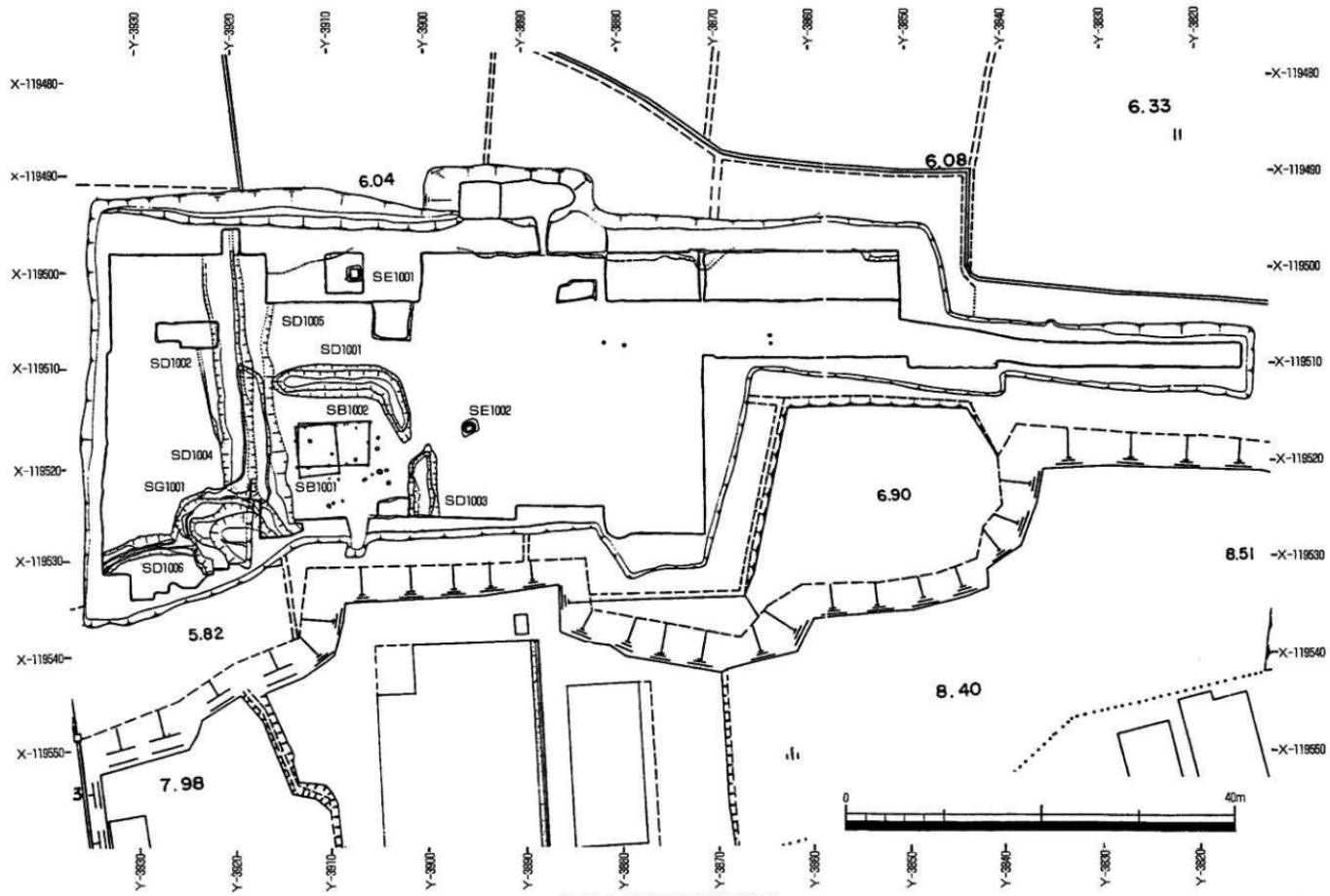
出土遺物(第7図・12、13)はSD1001と比べると少なかった。(12)は漆器皿である。内面に赤漆、外面体部に黒漆を塗る。(13)は染付である。体部はやや内湾し、基筒底である。胎土は灰白色、釉は緑味を帯びた浅黄色で外面上半部、内面にかかる。内外面に濃緑色で横線、紋様を描く。

#### SD1002 (第6図・第8図)

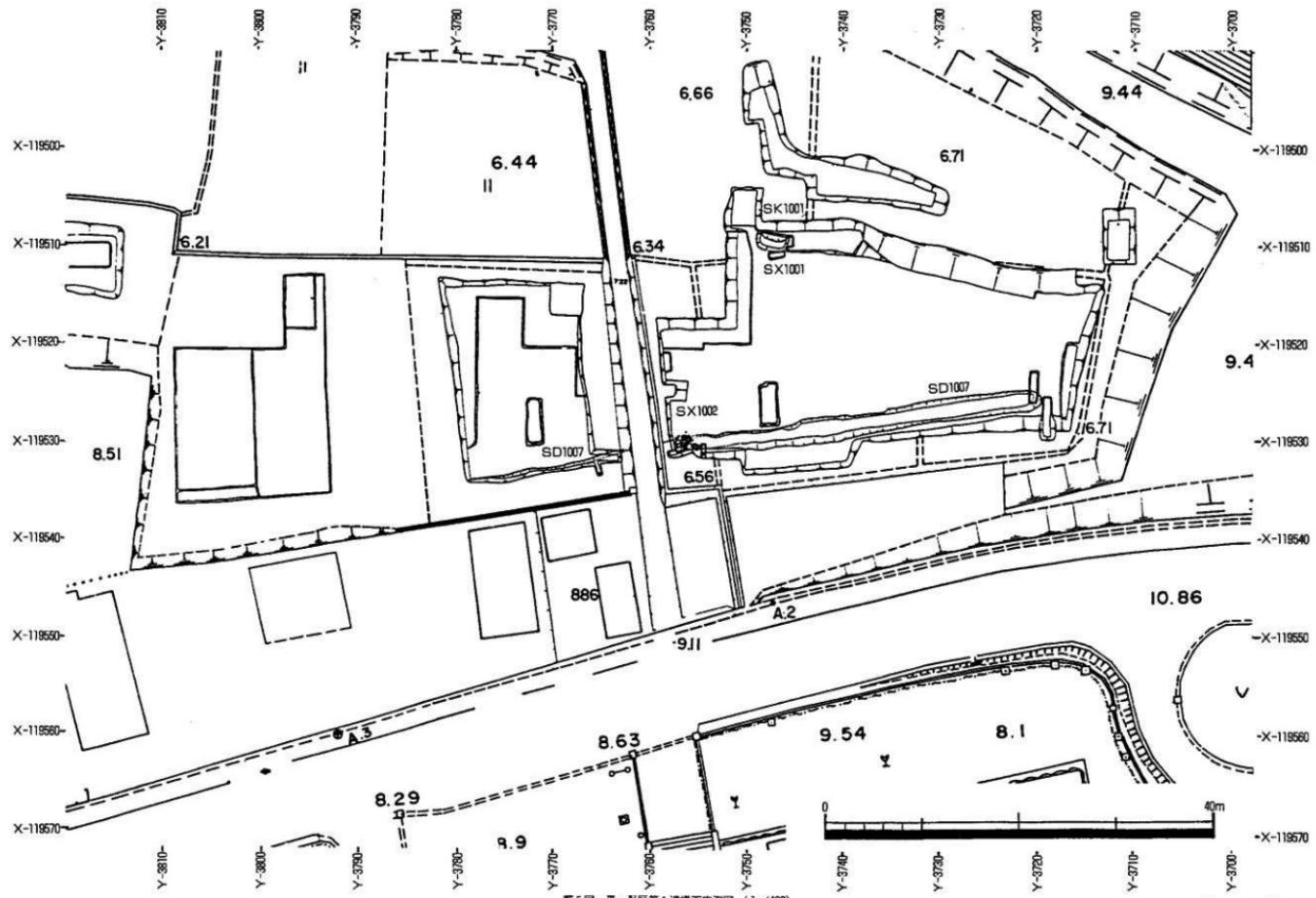
I区西側に位置する南北方向の溝である。南側はSG1001に接続するが、北端は調査区外へ続いている。幅3.5m~4m・長さ24m、検出状況で深さ約0.7mを測る。床面は北へ傾斜している。埋土は主に黒色粘質土で植物質を含む。層間に多くの帯状の砂が観察でき、絶えず水流があったと考えられる。床面では第2遺構面の柱穴が検出できた。なお、北側は東西方向の河川状の砂層の堆積により切られている。この堆積土内には噴砂と見られる砂の搅乱層が観察された。し



図版9 I区第1遺構面全景



第4図 I・II区第1構造曲実測図 (1/400)



第5図 III・IV区第1道横面実測図 (1/400)

かし、噴砂は上層を突き破っておらず、明確な時期は不明である。近世以降の地震によるものと考えられる。

出土遺物（第10図・1）は第2遺構面の遺物包含層を切って作られたため、土師器、陶磁器などはほとんどが混在と考えられる。（1）は漆器碗の底部片で器壁は薄手である。内面は赤漆、体部外面には黒漆上に赤漆で絵を描いている。

#### SD 1004（第6図・第8図）

SD 1002がほぼ埋没した段階にやや東寄りに作られた区画溝である。幅2.9m・長さ12mを測り、深さは検出状況で約0.35mである。北端はやや西側に曲がって終息する。南側はSG 1001に接続している。埋土は砂ブロックを含む褐色粘質土で、床面に砂帯が堆積している。溝の北端は途切れているため、池の水があふれだした場合に流水があったと考えられる。

#### 出土遺物（第10図・2～5）

（2）は青磁である。胎土は黒色粒子を微量に含む灰白色で、全面に厚さ1mm程度淡灰緑色の釉がかかる。外面に上から太い沈線、細い沈線、簡略化された線描きの蓮弁文を施す。沈線部は特に釉が厚くかかっている。（3）は備前焼の擂鉢である。胎土は赤褐色で1mm大の白色、黒色粒子を含む。口縁部は上方へ延び、口縁外面下部にナデにより段を付ける。内面には6条単位の擂目を有し、かなり磨滅しており、黒煤が付着する。（4）は完形の漆器碗である。内、外全面に黒漆を塗り外面に部分的に赤漆が見られる。土圧により卵形に変形している。（5）は隅丸の折敷である。側板が接合した状態で検出したが、結合の紐は残っていなかった。

#### SD 1005（第6図・第8図）

SD 1004がほぼ埋没した段階に上部を流れた溝である。北端は調査区外へ続き、南端はSG 1001に接続している。長さ24m・幅約8m、検出状況での深さ約0.3mを測る。砂ブロックを含む褐色粘質土の上に溝の南側を中心に砂礫層が堆積している。やや蛇行しており、堆積状況と併せて自然流路状のものと考えられる。

#### SD 1006（第6図・第9図）

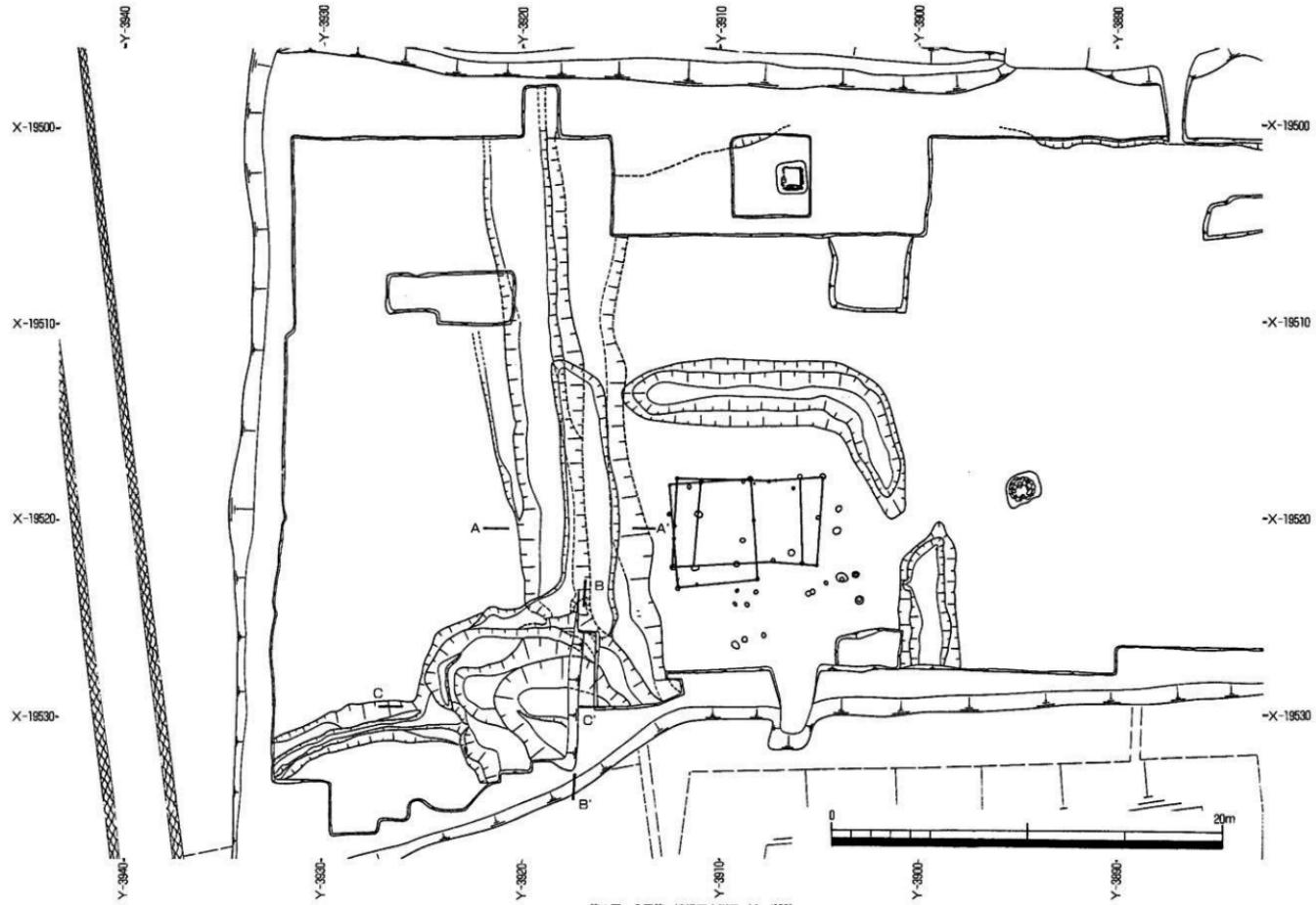
SG 1001の西側に接続する東西方向の溝である。幅約2m、検出状況での深さ0.7mの二段掘りでやや北側へ弧状に屈曲する。埋土は褐色粘質土の上に溝幅より広く砂礫層が堆積する。SD 1004並行期にしっかりととした形を持って作られ、SD 1005段階では溢れだして幅広く流れている。

#### SG 1001（第6図・第9図）

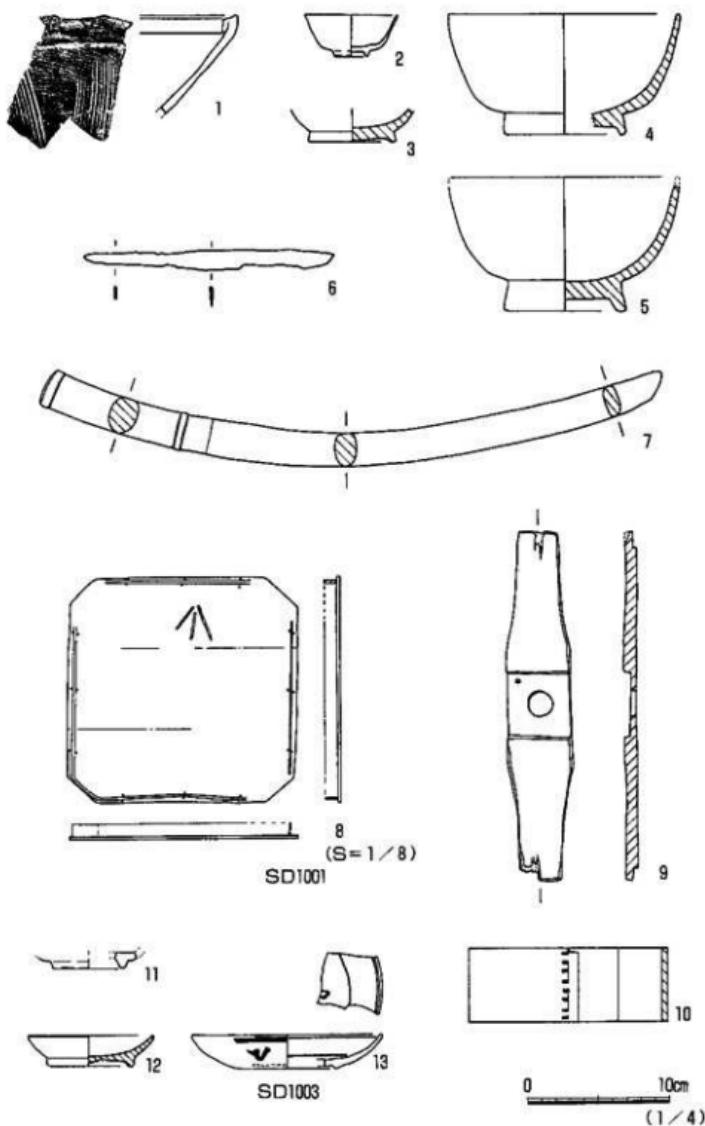
I区西側に所在する池である。調査区内では池の南端を確認することはできなかった。池は最大幅で測ると東西12.5m・南北7.5m、最深部で深さ2mを測り、東西方向に広がる梢円形を呈す。池には西側と北側に溝が接続しており、大きく三時期に分けられる。池内には粘質土が堆積しており、植物質を含んでいる。各層には砂帯が顕著に認められ、用水池と考えられる。

まず、SG 1001と南北方向のSD 1002が存在する。両者の接続部を幅約1.5mにくびれさせ、床面には突起状の施設を作りだしている。これは北方向への流水を制御するためと考えられる。

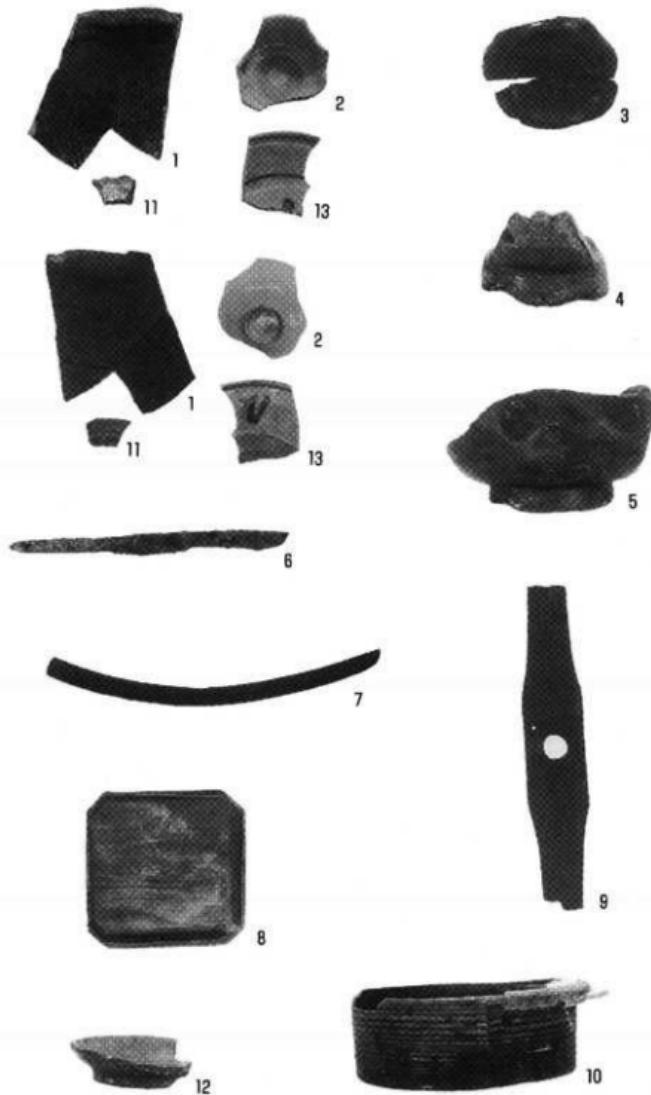




第6図 I区第1橋構面実測図 (1/200)



第7図 I区第1層構面出土遺物実測図(1)

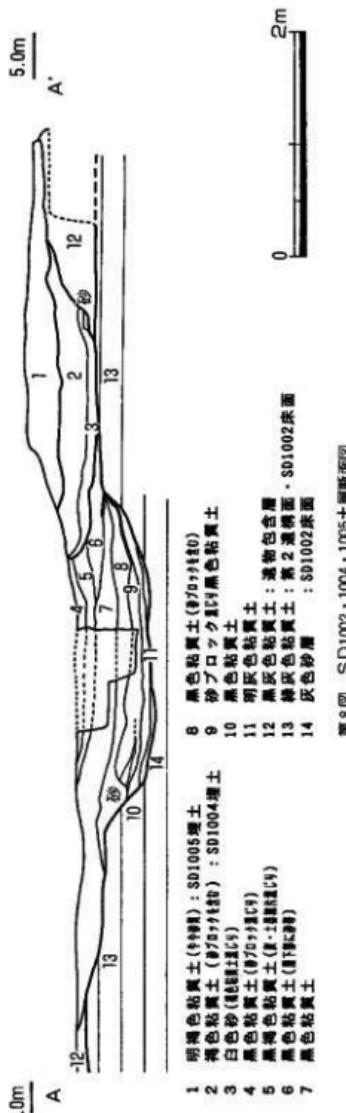


图版10 I区第1堆积面出土遗物(1)

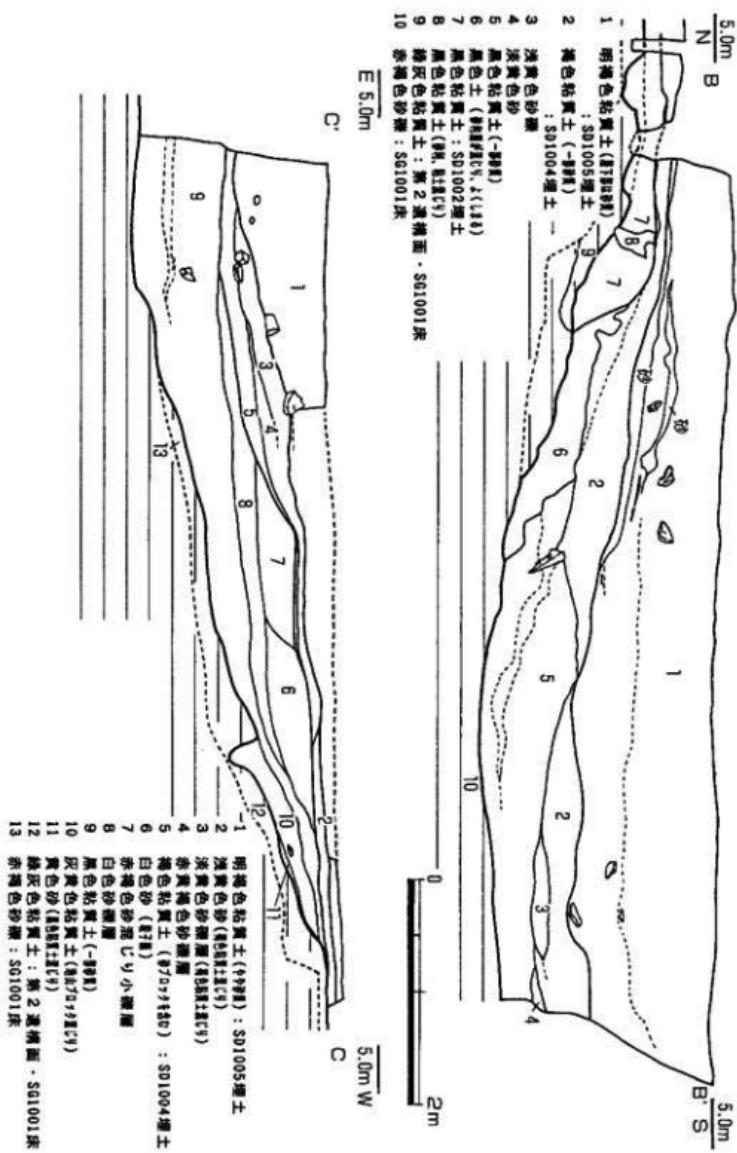
そして、SD1002の埋土である黒色粘質土が切られてSD1004の埋土である褐色粘質土が堆積しており、池の底さらいと考えられる。この時SD1006が作られたと考えられる。また、東側に前述のSD1001・1004、SB1001・1002が作られ、池と東西方向の溝、区画溝に囲まれた建物が併存する。SD1004はやや北西方向に曲がりながら途絶えるため、この時期の主な水流はSD1006を流れていたのであろう。

SD1004がほぼ埋没するとその上をSD1005が流れる。この時期にも底さらいを行ったと考えられる。しかしSD1005は端が不明確でやや蛇行しているため、この時期にはほとんど管理が行われず自然流路状のものである。SD1006を覆う広い範囲で砂礫層が堆積していた。

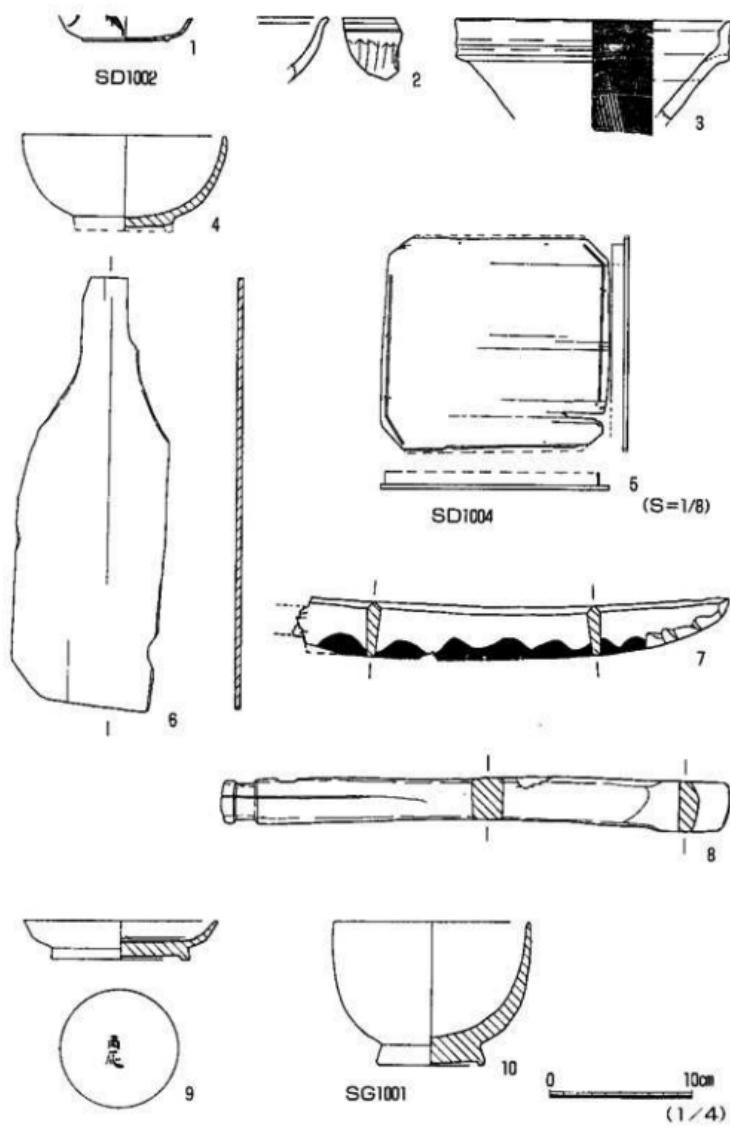
出土遺物（第10図・6～10）は、混入物が多いが、一部新しい様相を持つものがあった。（6）はSD1002並行期、後はSD1004並行期の遺物である。（6）は羽子板状の木製品である。隅を落した付近に皮紐の結合痕が残っており、隅丸の折敷の底板を転用したと考えられる。一部にケビキ状の線刻が残る。（7）は刀形木製品である。茎部は欠損しており、刃部は先端部に細加工が見られ、茎にかけては墨で刃縁を模式的に表現しており、9ヶ所打ち欠いた跡がある。（8）は柄状の木製品である。柄状部のややくびれ部よりに釘状の鉄製品が残る。（9）は漆器皿である。内外面に黒漆を塗ったのち内面と外面体部に赤漆を塗っている。高台内面中央に赤漆で2文字記してある。最初の文字は「丙」であろう。（10）は完形の漆器椀である。内外面に黒漆が塗られている。外面に一部赤漆が点状に認められた。土圧によりやや変形している。



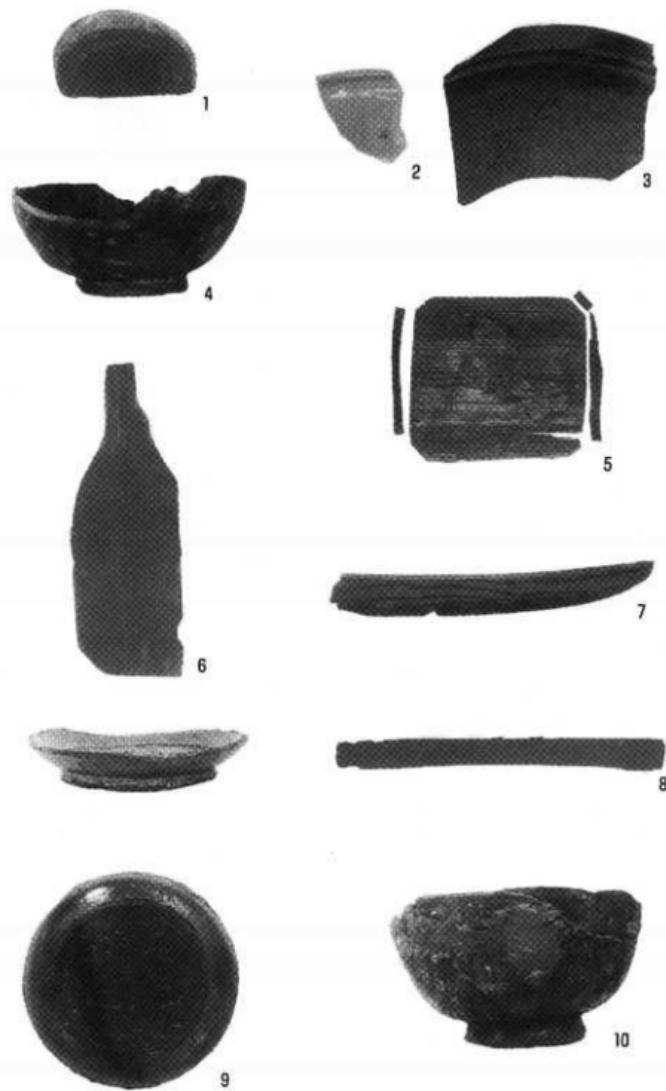
第8図 SD1002-1004・1005土層断面図



第9図 SG1001土壌断面図



第10図 I区第1遺構面出土遺物実測図 (2)



图版11 I区第1造構面出土遺物(2)

## SE1001

I区中央北側に位置する木組方形縦板組隔柱横棧型井戸である。一辺1.6m、深さ0.9mの隔丸正方形状の堀形を掘り、一辺1mの方形井側を据えている。隔柱は一辺約10cmの正方形状で、下部を段を付けたり尖らせて床面の黄褐色砂層に約20cm据えている。横棧は二段残っており、下段は5cm×7cm長さ120cmの角材を用いている。北西と北東の隔柱はいずれも10cm近く横棧よりも大きく切り込み状の柄穴を開け、上下に木製の楔を打ち込んで横棧を固定する。なお、上段の横棧は直径約3cmの自然木の先端のみを約4cm尖らせたものを使用している。

井側内には廃棄時に自然石を積めこんで埋めている。石は30cm程のものから最大30cm×90cmの大型の石もあり、大型の石は上部に多く認められた。遺物は堀形、埋土それぞれから陶磁器、土師器の細片が見つかったが、いずれも混入物である。

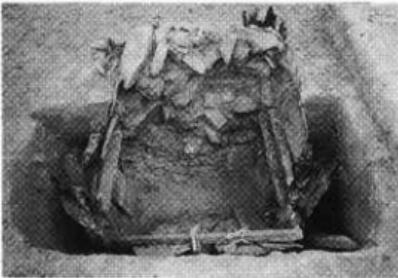
## SE1002

I区東側中央に位置する石組み井戸である。最大径2.1m、深さ1.1mの北東、南西方向の突き出した不正円形の堀形に10cm～40cm大の自然石を用いて上端径0.6m、下端径0.4mの円形井側を作っている。裏込石も同様の石を用いていた。井側は床面の黄褐色砂層から50cm程上まではやや雑で壁面も内傾しているが、以上はほぼ垂直に整った形で組んでいる。井戸底から約50cm上面に幅4cm～7cmの二重巻の円形曲物を石組みにあわせて置いていた。この位置は先述の石組井側の壁が垂直に近くなる位置である。

井側内には黒色粘質土が堆積しており、井側の石材と同じ自然石が円形曲物より下部に落ち込んでいた。遺物は埋土、堀形共に細片の土師器が認められた。



図版12 SE1001検出状況



図版13 SE1001井側内堆積状況



図版14 SE1002

## SD1007・SX1002

(第11図)

III・IV区の南端際で検出した東西方向の溝である。III区では北側の端を、道路を挟んだIV区では両端を確認した。ほぼ一直線に並ぶことから、同一の溝と判断した。溝の東端は面的に検出できなかったため、断ち割り調査を行い、丸まって終息していると判断した。東側は砂礫層面に作られている。幅2.8m～3.7m・長さ60m以上を測る。深さはIV区西端付近で0.7m、東端付近で0.5mを測り、東側が若干浅い。埋土はほとんどが灰色粘質土が堆積しており、瓦1、青磁1が出土した。青磁(第11図)は緑色を呈し、外面に簡略化した雷文を有する。



図版15 SD1007(南西より)

また、IV区南西隅のSD1007の上に礎石状の集石(SX1002)を確認した。幅80cm～90cmの大型の方形の石を2個掘え、周辺にやや小振りな石を置いている。この集石は壠形が検出されず、SD1007がほぼ埋没した段階で置かれたものである。これらを礎石と推定し、道路を挟んだ西側、III区の南東隅を拡張して調査を行ったが、同様の集石は確認できなかった。

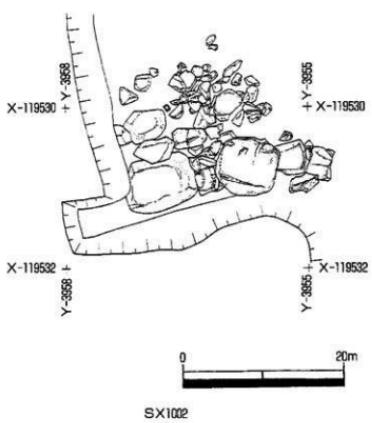
## SK1001・SX1001(第11図)

IV区北西部で確認した。SX1001は長辺1.8m・短辺0.85m・深さ0.27mの隅丸方形の壠形壁・床面全体に径1.5cm大の自然石を貼った石圓いである。石圓い内は少量の炭の細片を含む黒色粘質土が堆積しており、床面に薄く面的に炭層の堆積が認められた。遺物は少量の陶磁器破片が見つかった。遺構の性格としては、墓、貯蔵施設などが考えられる。

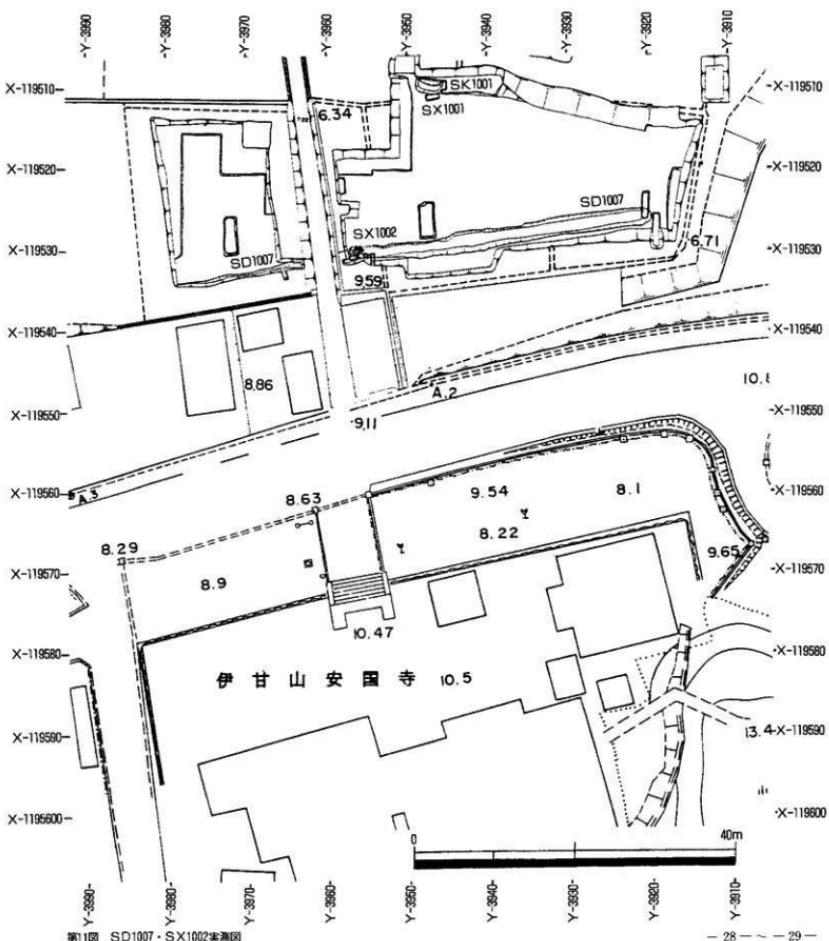
SK1001はSX1001の北辺を切って作られた土壙である。北端は確認できなかったが長辺3.3m・短辺1.6m以上・深さ0.38mの隅丸方形を呈す。土壙壠形の南壁には2cm～24cmの大の自然石を不規則に列状に並べている。この石列の北端に径3cm～5cmの自然木の先端のみを尖らせた杭列を1.5cm～3cmの間隔で12本検出した。土層は下から浅黄色砂、黒灰色粘質土、暗灰色土、浅黄褐色土と水平堆積している。床面の浅黄色砂は石列の下に入っている、川砂に似た細砂であることから、池のような土壙であろう。さらに南壁の石列と杭列は護岸のための施設と考えられる。少量の土師器、陶磁器片が見つかった。



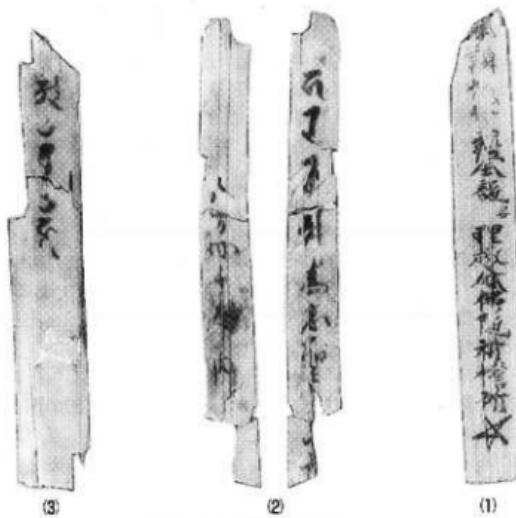
図版16 SK1001・SX1001(東より)



SD1007出土遺物 (1/2)



第11図 SD1007・SX1002実測図



図版17 第1遺構面出土木簡

#### 第1遺構面出土の木簡

(1)はSD1001の上層出土である。長さ32cm・幅3cm・厚さ0.5cmを測る。上端が欠損しているが、「…奉講口口全經”理趣分佛陀祈誓所☆」とある。理趣經などを佛陀祈誓所に講じるといった意味であろう。(2)もSD1001の上層出土である。両端が欠損しており、長さ46cm・幅5.5cm・厚さ0.5cmを測る。表に「口々々々為念聖…」、裏に「八万四千本内」とある。五輪の梵字を記した塔婆と考えられる。(3)はSG1001の北側の溝との接合部付近で見つかった呪符である。両端が欠損している。長さ31.5cm・幅5cm・厚さ0.5cmを測る。「…  
為念聖 ☆(結び)」とあり、最後の五行の星印は朱書きで、それぞれの角に小さく梵字の墨書きが見られる。

## 2. 第2遺構面

第2遺構面は古市遺跡の最も繁栄した時期である。遺構の総数は柱穴類（P）1742、溝（SD）3、井戸（SE）13、池状遺構（SG）1、土壙（SK）15、石組（SX）1である。

遺構は特にI・II区の南側に集中しており、調査区外の南の山側が中心と考えられる。一方、北側はやや希薄になり、SD2001を境に遺構はほとんど分布しなくなる。東側ではSD2002を境に遺構が全く見られない。いずれも下府川に近いため、それぞれ当時の町の北限、東限と考えられる。遺物の分布状況もほぼ同じ傾向を示している。

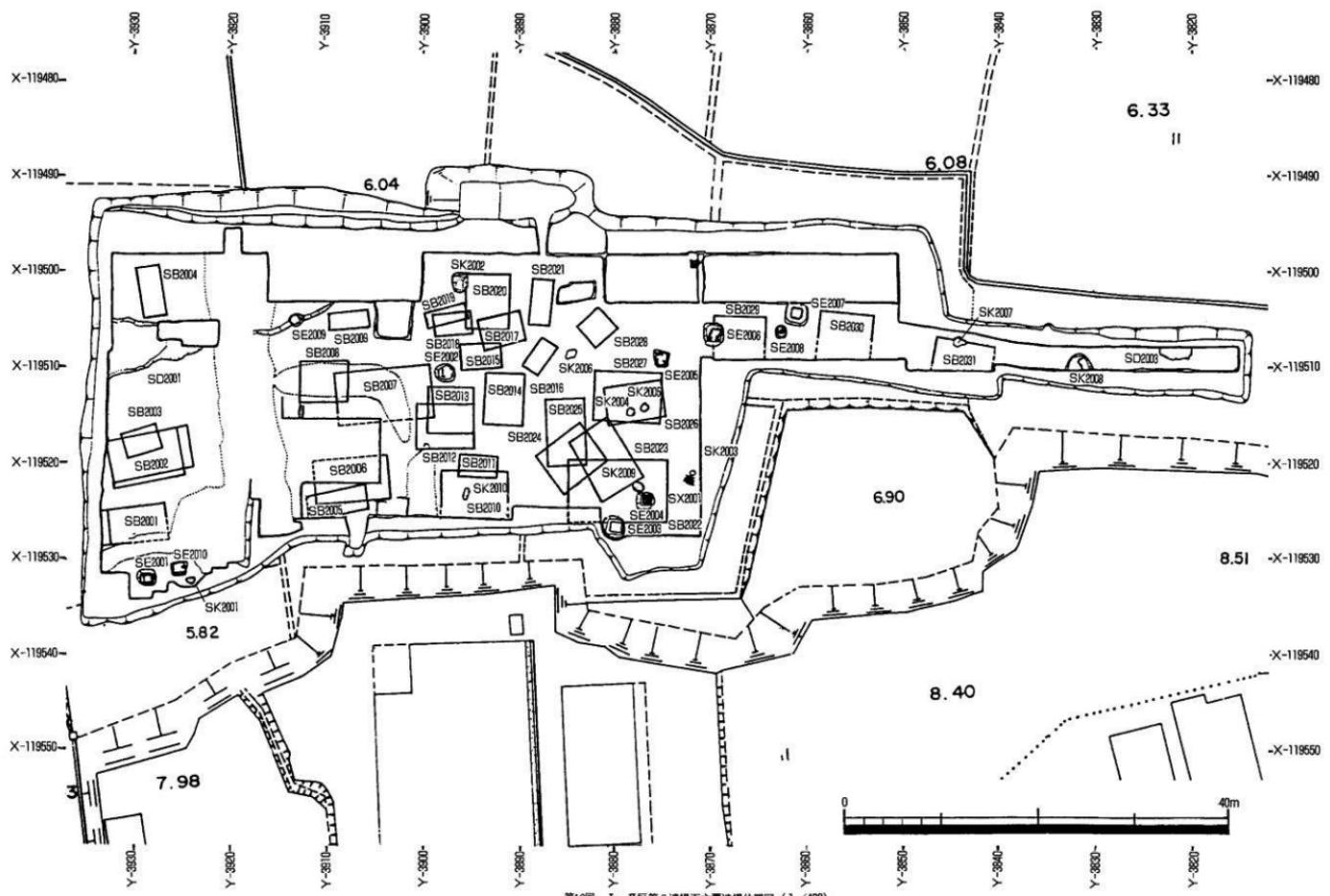
### SB2001～SB2037（第12図・第13図）

第2遺構面では柱穴が1,742基検出された。その内で合計37棟の掘立柱建物跡を復元した。I・II区で31棟、III区2棟、IV区3棟、V区1棟である。検出した柱穴の分布密度、數からすると復元できなかつた建物も多い。また、建物の主軸方向が不明確のものも多數あった。主軸方位の傾きを見ると、20°以上振るものが6棟、11°～20° 振るもの7棟、5°～10° 振るもの12棟、1°～4° 振るもの8棟、0° のもの4棟である。庇の付く建物は3棟でV区の1棟とI区の西側の2棟である。いずれも棟方向は1°～8° 以内に収まる。建物の主軸を振らない真北基準の建物はII区南側に集中しており、2間×3間以上の大型と考えられるものが多い。一方、SB2004はSD2001を隔てた北側にあり、周囲に柱穴は少ない。III、IV区は復元できた建物が少ないがI・II区と同様に真北に近い建物は大型になると考えられるものが多い。

柱穴内からの出土遺物は、完形に近いものを置いたものが一部あるが、大多数の柱穴は遺物が少なく、細片が多い。そのため、真北に近い建物と大きく棟方向を振った建物の時期は区分できなかつた。しかし、II区のSB2015、SB2016、V区のSB2037の柱穴からは灰白色系の土師器が出土しており、建物群の中でも古い時期であろう。

### SB2022（第14図）

II区中央南側に位置する掘立柱建物である。建物の一部はSE2003、SE2004で切られている。棟の方向はW-0°-Eである。桁行4間（10.2m）、梁行3間（6.3m）以上を測る大型のものである。柱穴は最も東側の南北列と東西列が最も大きく径40cm～45cm・深さ40cm～60cmを測り、垂直に近いしっかりした壺形をもっている。柱穴底に根石を据えているものもある。西側は径20cm・深さ40cm程の小さいものが多い。また、一部の柱穴には径約10cmを測る柱痕が残っていた。柱穴からは白磁皿VI類、土師器坏などが検出された。



第12图 I·II区第2道構面主要道構位置圖 (1/400)

X-119500

Y-3800

X-119510

Y-3800

X-119520

Y-3700

X-119530

Y-3800

6.44

Y-3700

Y-3700

Y-3700

6.66

Y-3700

6.71

Y-3700

9.44

X-119500

X-119510

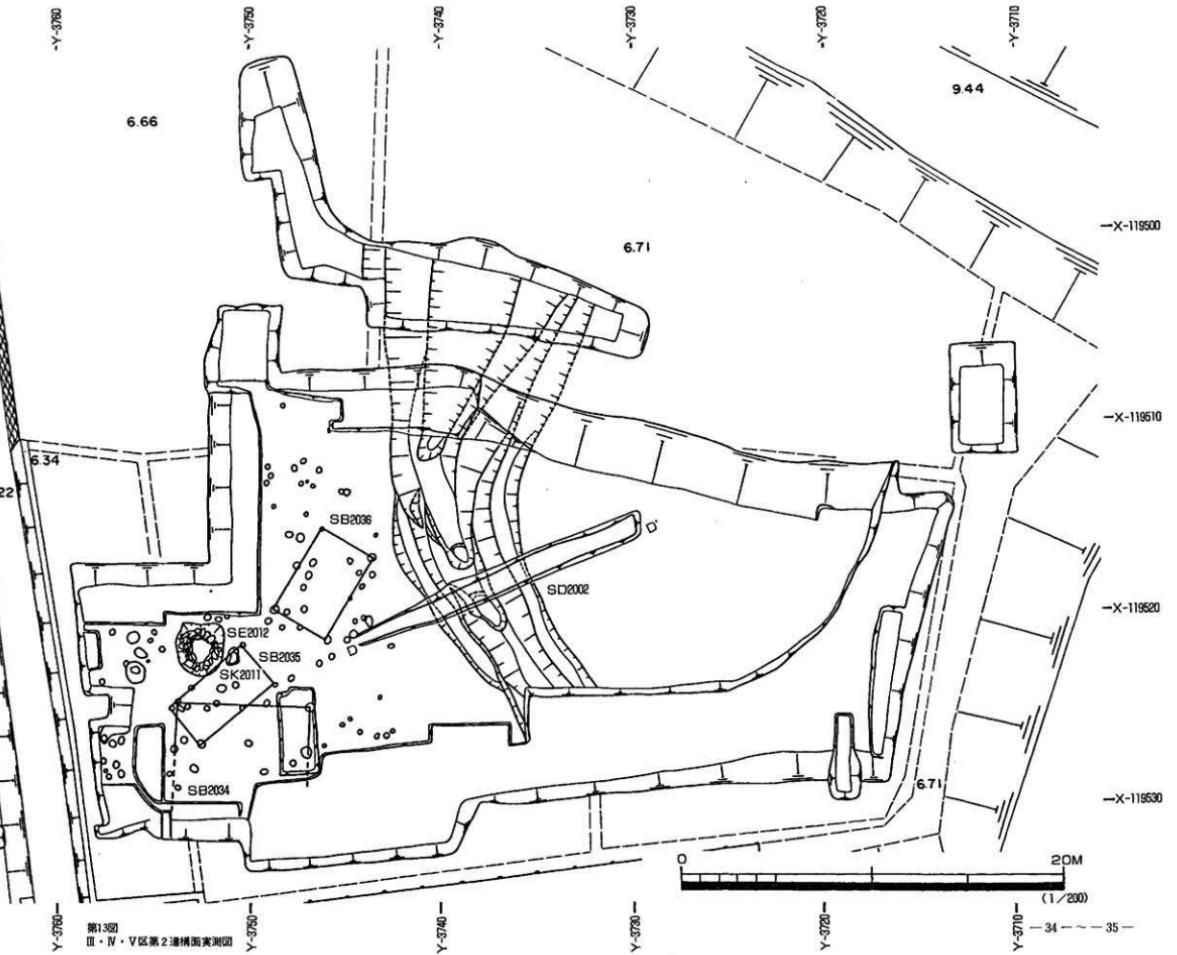
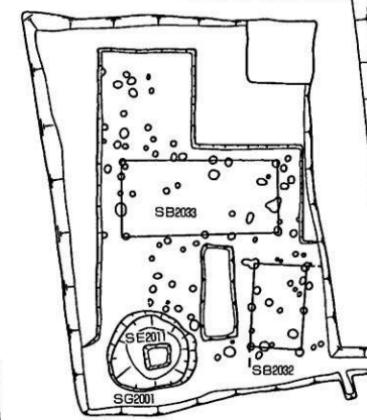
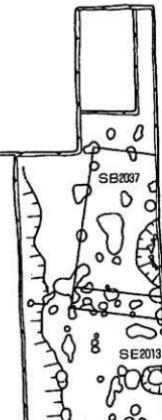
X-119520

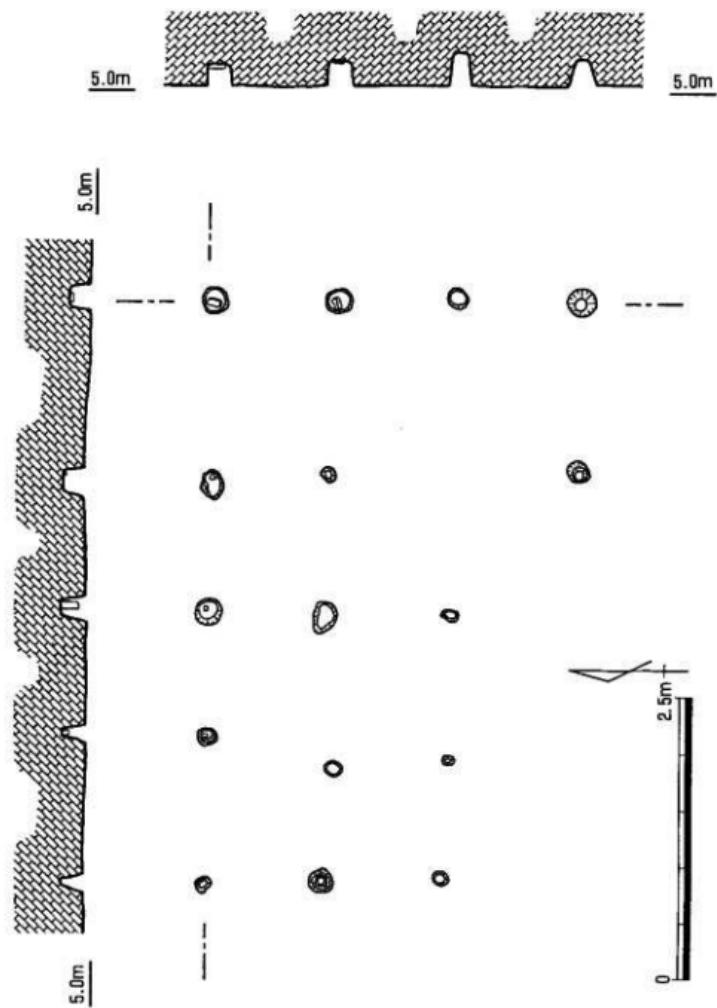
X-119530

20M

(1/200)

— 34 — 35 —





古市遺跡建物跡一覽表

遺構面	調査区	遺構番号	桁行×梁行	主軸方位
1 0	I・II	1 0 0 1	2 ( 3 ) × 2 ( 3 )	N - 5° - W
		1 0 0 2	3 - 2 × 3	W - 0° - E
2 0	I・II	2 0 0 1	4 - 1 × 2	E - 6° - N
		2 0 0 2	( 3 ) - 1 × 2 - 1	E - 11° - N
		2 0 0 3	2 × 2	E - 11° - N
		2 0 0 4	2 × 1	N - 8° - W
		2 0 0 5	( 3 ) × ( 1 )	E - 11° - N
		2 0 0 6	( 3 ) × ( 2 )	E - 5° - N
		2 0 0 7	5 × 2	E - 5° - N
		2 0 0 8	2 × ( 1 )	E - 1° - N
		2 0 0 9	2 × 1	E - 5° - N
		2 0 1 0	3 × ( 1 )	E - 0° - W
		2 0 1 1	2 × 1	W - 10° - N
		2 0 1 2	3 × 2	E - 0° - W
		2 0 1 3	2 × 2	E - 0° - W
		2 0 1 4	3 × 2	N - 2° - E
		2 0 1 5	2 × 1	E - 5° - N
		2 0 1 6	2 × 1	N - 35° - E
		2 0 1 7	2 × 1	E - 13° - N
		2 0 1 8	2 × 1	E - 12° - N
		2 0 1 9	2 × 1	E - 13° - N
		2 0 2 0	3 × 2	N - 2° - E
		2 0 2 1	2 × 1	N - 7° - E
		2 0 2 2	( 4 ) × ( 3 )	W - 0° - E
		2 0 2 3	3 × 2	N - 30° - W
		2 0 2 4	2 × 2	E - 36° - N
		2 0 2 5	3 × 2	N - 3° - W
		2 0 2 6	2 × 2	E - 8° - N
		2 0 2 7	3 × 2	W - 3° - N
		2 0 2 8	2 × ( 1 )	E - 42° - N
		2 0 2 9	2 × ( 1 )	W - 2° - N
		2 0 3 0	2 × ( 1 )	W - 6° - N
		2 0 3 1	3 × ( 1 )	W - 10° - N
III		2 0 3 2	( 2 ) × ( 1 )	N - 4° - E
		2 0 3 3	3 × 2	E - 1° - N
IV		2 0 3 4	3 × ( 1 )	W - 2° - N
		2 0 3 5	2 × 1	E - 41° - N
		2 0 3 6	2 × 1	N - 32° - E
V		2 0 3 7	3 - 1 × ( 2 )	N - 8° - E

### SD2001 (第12図)

I区北側に走る東西方向の溝である。幅約5m・深さ約0.3mである。試掘坑とSD1002を挟んだ東側に同様の浅い溝が検出され、同一のものと考えられる。西側には、厚さ5cm程の砂層が帯状に2層堆積していた。床面は緑灰色砂質土で、地山面が粘質土から砂質に変化する場所である。この溝の北側には柱穴がほとんど見られないことと併せて、簡単な町の北側の区画と考えられる。遺物は土師器、白磁、少量の青磁が出土した。

### SD2002 (第13図・第15図)

IV区東側に存在する南北方向の溝である。幅が広がりながら弧状に曲がる。北・南端は確認できなかったが北側はおそらく下府川に接続するのである。調査区内の北端の幅約12m、中央部の幅5.2m、南端の幅4.2m、深さ約1mを測る。

溝の埋土は小礫が見られ、若干の水流があったと考えられる。溝の底から上約30cmの主に黒色系粘質土からなる層は比較的時間差が少なく、溝が機能した最終段階の堆積と考えられる。土器類、木器類が混在した状況で大量に出土した。

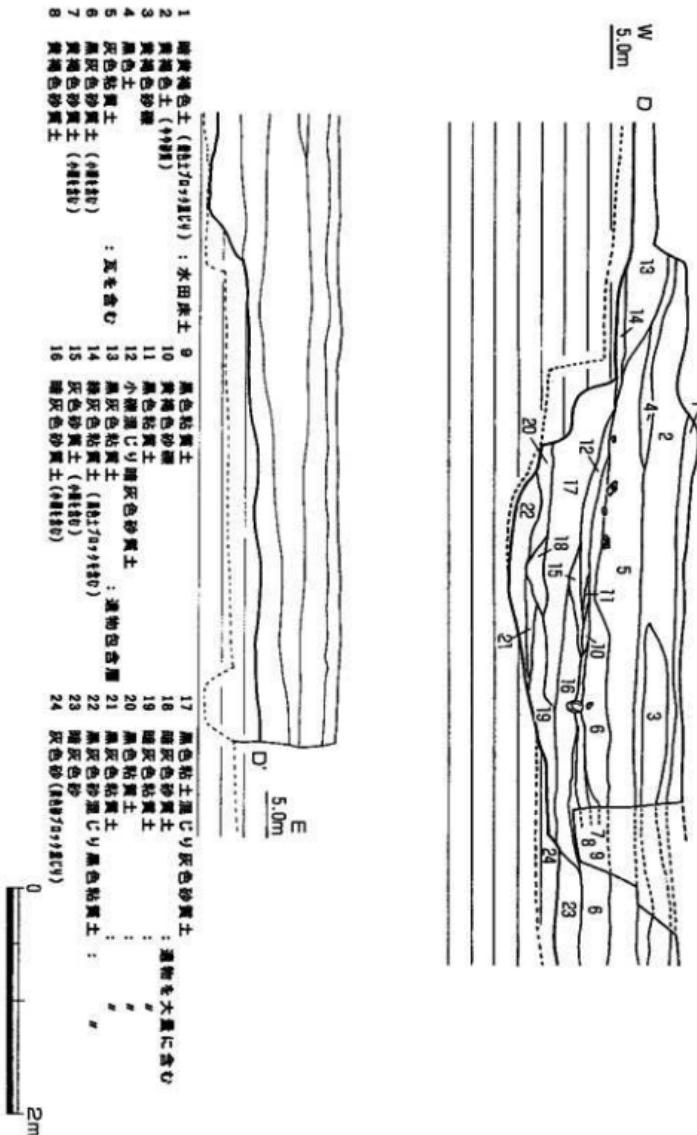
溝の上部に堆積した灰色粘質土にはI・II区ではほとんど見られない離れ砂の付く瓦片がかなり含まれていた。その上には礫層と黄褐色土が堆積している。これらの層はSD2002より東にのみ分布している。また、これらを切って第1遺構面のSD1007が造られている。第2遺構面の衰退後は窪地状になり、河川の氾濫などにより灰色粘質土や礫が堆積したと考えられる。

#### 土器類 (第16図)

破片での土器組成は土師器が1692点(94.5%)、須恵器18点(1%)、白磁30点(1.7%)、青磁34点(1.9%)、陶器9点(0.6%)、その他6点(0.3%)である。貿易陶磁については太宰府の分類を用いる。(1)、(2)、(3)は龍泉窯系青磁碗である。(1)は完形の碗I2b類である。釉はやや青みを帯びた黄緑色で、内面に草花文を有する。(2)は碗I5c類である。釉は淡緑色で外面に錦通弁文を有し、内底見込みに花文様がスタンプされる。(3)は小碗I2類である。青みを帯びた緑色の良質な釉がかかる。口縁部に輪花を有し、体部内面に片彫りの線が入る。(4)は青白磁皿である。胎土は白色で精良、釉は乳白色で文様部は青白色に発色する。全体の器壁は薄く、口縁は口禿げで銅の複輪が施される。(5)は青白磁の小碗で、胎土は灰白色で釉は青白色である。口縁は口禿げである。(6)～(9)は土師器壊である。赤味を帯びた淡黄褐色を呈し、いずれも底部は回転糸切りで切り離す。(6)～(8)は底径が大きく、やや器高が低い。内、外面上にはロクロナデ痕が残る。このタイプが大多數を占めるが、体部がやや丸味を帯び、内外面上に仕上げのナデを施して丁寧に仕上げるもの(8)もある。(10)、(11)は土師器皿である。器壁が厚く、底部は回



図版18 SD2002 (南より)



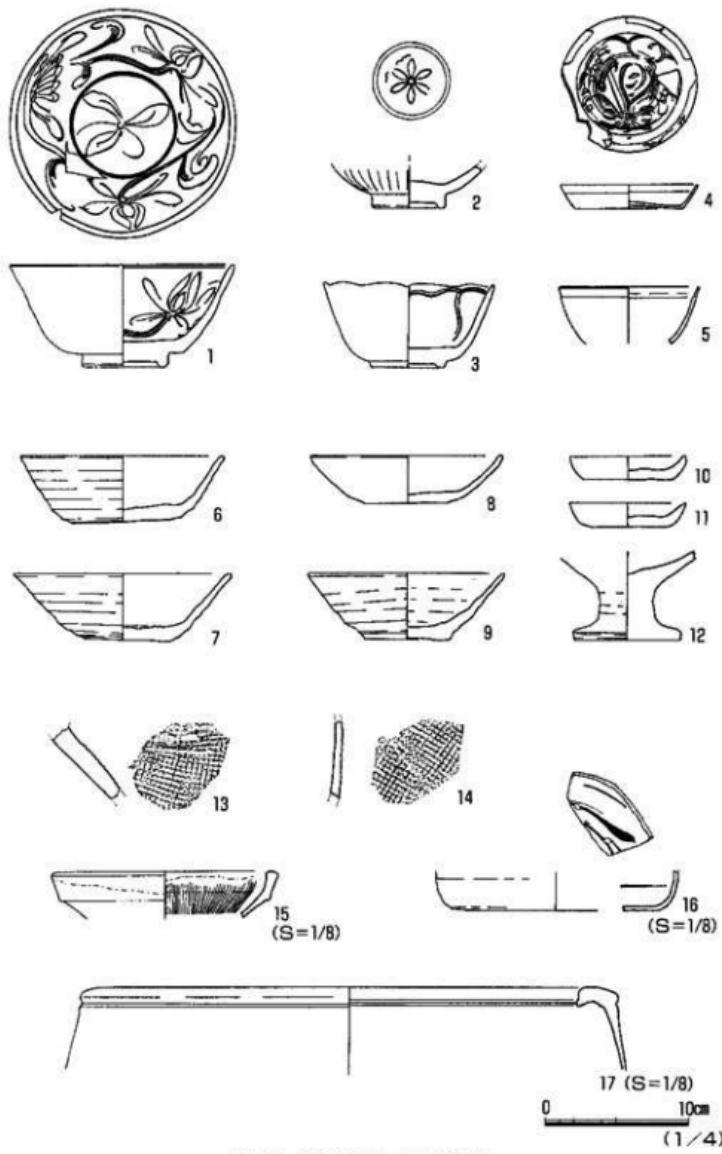
第15図 SD 2002土壤断面図

転糸切りである。(12)は台付き皿である。(13)、(14)は甕の破片である。胎土は灰色で焼成はやや軟質である。色調は(13)が暗青色、(14)は暗灰色を呈す。いずれも外面の格子目が一辺3mm、内面は同心円状のタタキをナデ消している。(15)～(17)は中国陶器である。(15)は鉢II 1a類である。復元口径は31.8cmである。胎土は暗赤褐色でやや粗く、砂粒を含む。釉は茶褐色と黒色のまだら状に発色し、口縁上端部の内外面にかかる。口縁は帯状に肥厚させており、内面には8条単位で横目を縫入れる。(16)は盤の底部である。復元底部径は29cmである。胎土は紫灰色で白色粒子を若干含む。内面全体に緑褐色釉がかかり、暗緑褐色の釉で施文する。外面は露胎である。(17)は甕II類である。復元口径は78cmである。胎土は暗赤褐色で少量の白色粒子を含む。濃緑色の釉を全体に流し、口縁部と肩部上端に凹線を入れる。外面は平行叩き目を横ナデで消し、内面は青海波状の叩き目を横ナデにより消している。内面に施釉された器壁の薄い同一個体破片があり、体部片と考えられる。

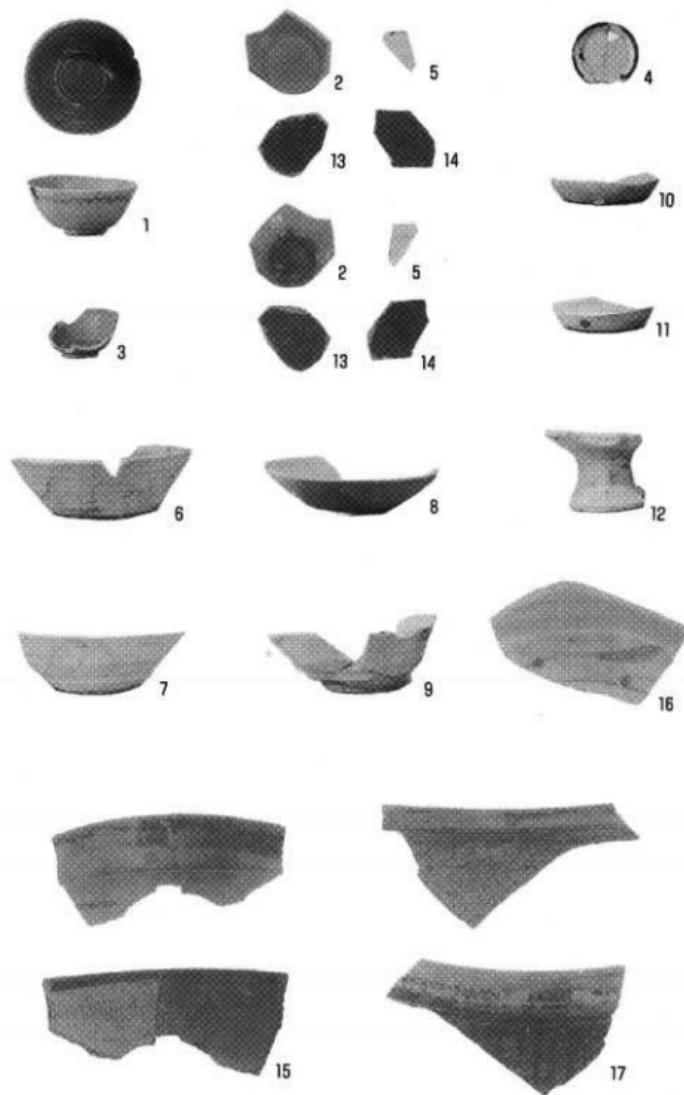
#### 木製品（第17図・第18図）

(第17図・1)は漆器椀である。内外面に黒漆を塗る。(2)は白木作りの椀である。1と比べて器高が低い。(3)は完形の鞘である。二枚の板材の間に角材を挟んで隙間を作り、皮紐で締じている。10cm程度の刀身のものを収めたのであろう。(4)は折敷の底板である。繊皮が一部残る。(5)～(7)は連齒下駄である。約15個体見つかった。(5)は台部は小判型で小振りである。歯部は摩耗している。同一の個体が1点存在し、セットになると考えられる。(6)は台部が橢円形を呈し、足裏による磨滅痕が残る。歯部は台部から垂直におり。(7)は台部が曲線的な長円形を呈し、歯部は台部よりやや横に張り出す。後緒穴に鼻緒止めの楔が残る。(8)は差歛下駄である。数は連齒下駄より少なく、2個体程度である。台部が全体的に丸みをもち、台部より横に張り出した歯部を差し込む。

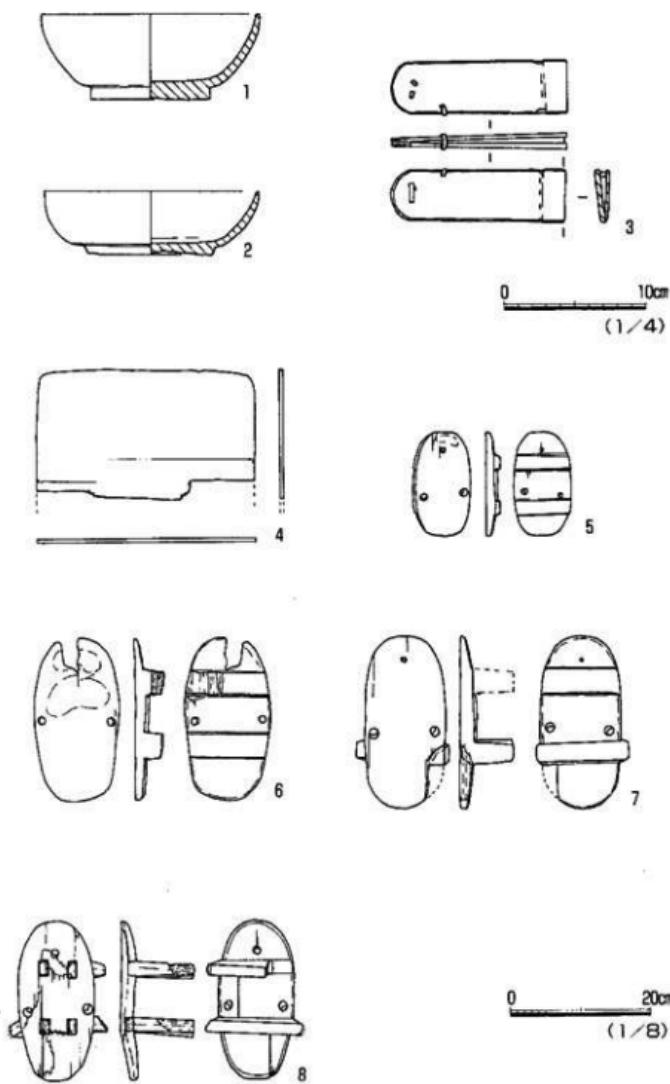
(第18図・1～3)は杓子状木製品である。いずれも板材を加工しており、形状は様々なものがある。(4)は箸状木製品である。(5)～(7)は刀形木製品である。(5)、(6)は刃部から茎部にかけて模している。なお、赤外線による観察で5の刃部の根元に「す」の墨書きが確認された。(8)は人形である。板材を整形しており、下端部は欠損している。鳥帽子を付けた人間の側面形を模している。(9)は下端部が欠損しているが、形代の可能性がある。



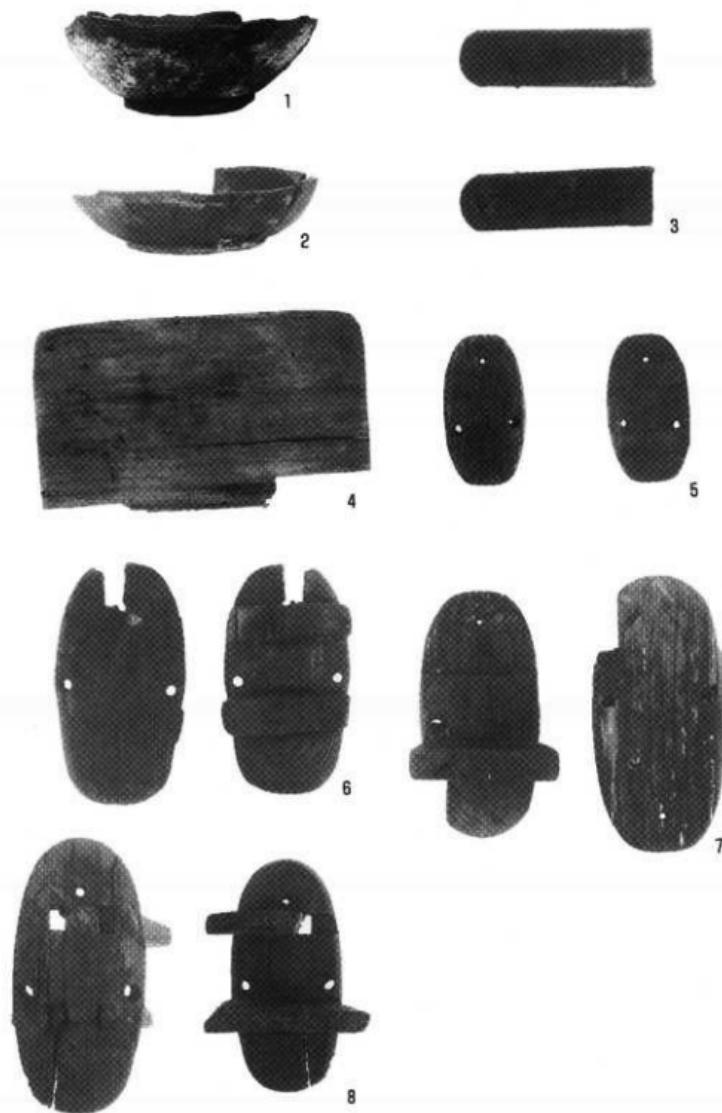
第16図 SD 2002出土土器類実測図



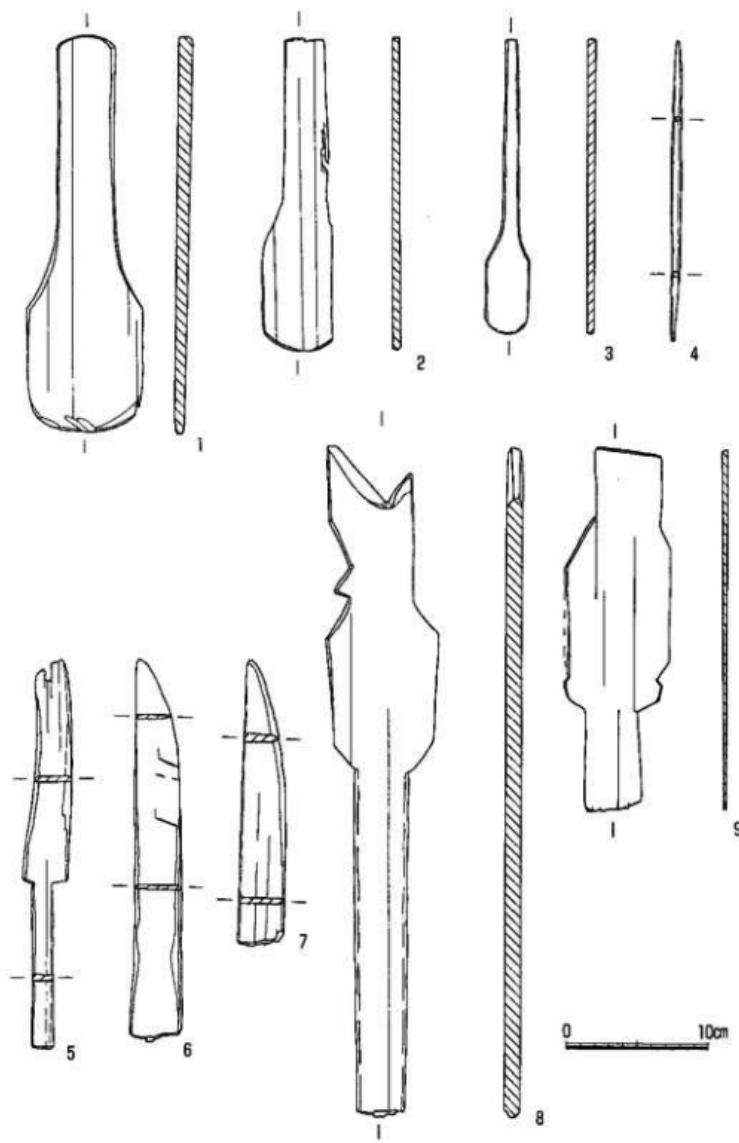
圖版19 SD2002出土土器類



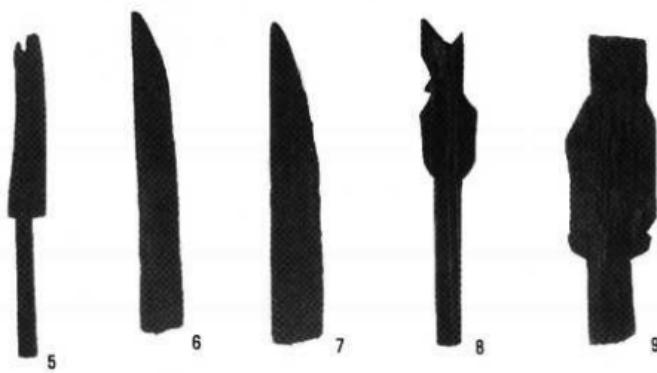
第17図 SD2002出土木製品実測図（1）



圖版20 SD2002出土木製品（1）



第18图 SD2002出土木制品实测图 (2)



図版21 SD2002出土木製品（2）

## SE2001

I区南側に位置する木組方型縦板組横棟支柱型井戸である。最大径2m・深さ1.4mの東西に張った梢円形の堀形中央に一辺0.95mの方形井側を据える。井側は最下層の黄色砂層上に横棟を目違い柄組みし、その上に支柱を相欠き柄組みにして立っている。北辺と南辺の横棟が井戸内に落ち込んでいた。さらに横棟の外側に幅11~13cm・厚さ1cmの縦板と添板、内側に幅8~10cmの縦板を並べている。内側の縦板は井筒の機能も兼ねていたのであろう。

なお、各縦板・添板は土圧により内傾していた。井戸堀形から土師器、白磁碗IV、白磁皿、中國陶器盤が出土した。井側内部には黒色粘質土、多量の拳大の自然石を含む黒色粘質土が堆積しており、土師器、白磁碗IV・V・VI類、陶器盤などが出土した。

## SE2002

I区東側中央に位置する木組方形縦板組隅柱横棟型井戸である。最大径2.15m・深さ1.25mの南北に張った梢円形の堀形中央に一辺0.8mの方形井側を据える。隅柱は南東部のみ残っていた。井側内から横棟が3本見つかった。西壁の縦板は幅35cm・厚さ7cmと幅46cm・厚さ6cmの2枚の大型の板を並べる。堀形は黒色粘質土と地山ブロック混じり黒色粘質土を互層状にして埋めている。井側内は最下層に黒灰色砂質土、黒色粘質土がそれぞれ10cm程水平堆積しており、後は井側内に1.5cm~4.5cm大の自然石を上部までぎっしり積めて埋めていた。石の間から土師器、青磁の細片が出土した。堀形から白磁、龍泉窯系青磁破片、土師器が出土した。土師器（第19図）は全形が判るものは無かった。(2)は井戸の埋土、その他は堀形の出土である。いずれも淡黄色系である。(2)は体部がゆるやかに立ち上がる。端部はやや外反し、面取りされている。(3)、(5)は壺の底、(4)



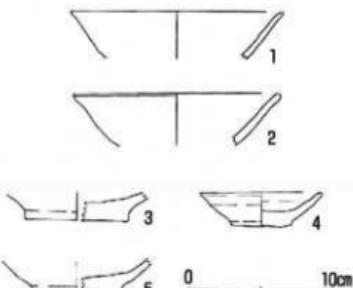
図版22 SE2001



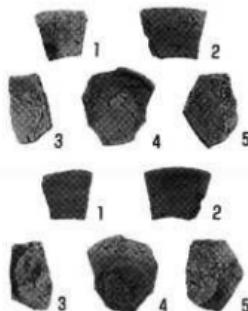
図版23 SE2002井側内堆積状況



図版24 SE2002全景



第19図 SE2002出土土器実測図

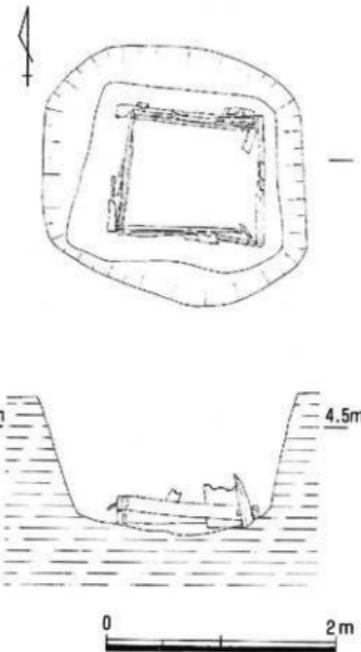


図版25 SE2002出土遺物

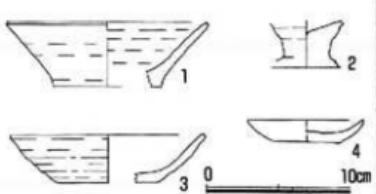
は皿である。いずれも底部に回転糸切り痕が残る。

#### SE2003（第20図）

II区中央南端にある木組方形縦板組の井戸である。一辺約2.3m・深さ約1.2mの隅丸方形の堀形の中央に東西1.17m・南北0.95mの方形井戸を据える。堀形の底の黄色砂礫層上に長さ102cm～120cm・幅13cm・厚さ4cmの角材の両端を凸柄にしたものと東西辺、凹の柄のものを南北辺に置いて二段に組み上げている。上段は東西の角材が短いが南北辺を揃えているため上段の北辺は10cm南へ入っている。この井籠組の外側に幅15cm～30cmの縦板が残っていた。この井籠組は井戸側の支持と淨水という二つの機能を持っていると考えられる。堀形の埋土は礫、砂利の混じる黒色粘質土、灰色粘質土である。井戸側の埋土は下から礫混じり黒灰色粘質土、炭・粘土・廃材・円礫の混じる黒色粘質土が堆積していた。中から土師器、白磁IX類、青磁などの細片が見つかった。埋土の上部には40cmの大形の自然の角石が二個認められた。土師器（第21図）は細片がほとんどで、全体を知り得るものは少なかった。い



第20図 SE2003実測図



第21図 SE2003出土器実測図

それも井戸埋土出土である。すべて底部に回転糸切り痕が残る。(1)は赤褐色で底部径が大きく、体部はやや外反しながら直線的に立ち上がり、口縁端部が面取りされる。(2)は台付皿である。(3)の椀は器高が低く、器壁がやや厚い。外面には幅広のロクロ痕が残る。

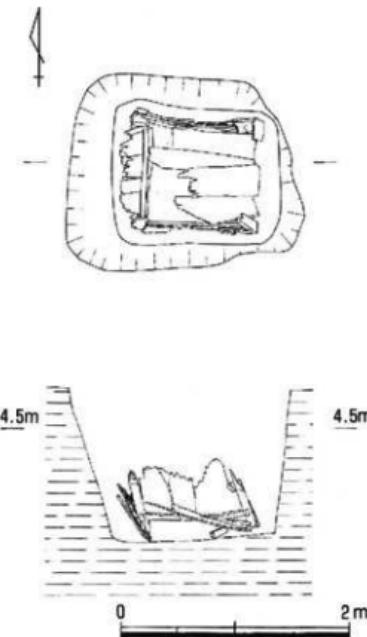
#### SE2004(第22図)

SE2003の北東に位置する木組方形縦板組隔柱横棟組井戸である。一辺約2m・深さ1.4mの東西がやや不定形の方形の堀形の中央に一辺0.9mの方形井側を据える。なお、井戸側は東壁が壊れて倒れた状態であった。隔柱は下部6cm程を台形状にして床の砂利層に据えている。横棟は一段のみ残っていた。縦板は幅20cm・厚さ1.5cmの方形、添板は幅8cm・厚さ1cmで下部の両角を丸めている。縦板は厚く方形の板、添板は薄く下部を丸めた板とそれぞれ使いわけている。堀形の埋土は灰色砂礫層である。井側内の埋土は底から砂礫層、黒色土と堆積していた。最上層には5cm~25cm大の自然石を含む黒色土が堀形全体に堆積しており、土師器椀・皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗・皿、褐釉四耳壺などの破片が出土した。

東壁が倒れることと併せて井戸



図版26 SE2003



第22図 SE2004実測図

側上部と東壁が崩れた後に自然石を含む黒色土で穴全体を埋めたと判断できる。

#### SE 2005

II区中央に位置する木組方形縦板組の井戸である。南北辺1.6m・東西1.2m・深さ0.9mのやや北西隅の張り出した方形の堀形中央の黄色砂層面に一辺0.9mの方形井側を据える。井側材は25cm程の高さで残っており、一部に縦板と隅柱が残っていた。井側内から白磁、中国陶器が出土した。

#### SE 2006

SE 2005の北東側に位置する木組方形縦板隅柱横棧型井戸である東西方向1.6m・南北方向2.3m・深さ1.1mの方形の堀形の中央の黄色砂層面に一辺1.1mの方形井側を据えている。

台形状に加工した隅柱に二段の横棧を渡す。なお、南壁と東壁及び北壁の一  
部は壊れて井側内に倒れていた。これらの壁の堀形の土が井側内に落ち込んでお  
り、その上に10cm~20cm大の自然石を含む黒色土を堆積していた。この埋土から、  
土師器、白磁碗V・VI・VII類・壺皿類、同安窯系青磁碗・皿が出土した。この井  
戸も井側壁が崩壊したあと、自然石を含む黒色土で埋めたと考えられる。

出土遺物(第23図・1~6)はいずれも井側埋土からの出土である。(1)、(2)は  
いずれも同安窯系青磁碗I 1b類である。いずれも釉は黄色味の強い胎色ガラス  
色である。外面に櫛目を有し、内面上位に沈線を入れる。(3)は同安窯系青磁皿  
I 1b類である。体部は外反し、内面に櫛によるジグザグ紋様を入れる。(4)、(5)  
は土師器皿である。(4)は淡黄褐色を呈し、器高が低い。(5)は淡灰黄褐色を呈し、  
底部は厚く、回転糸切りである。(6)は土師器碗である。淡黄褐色を呈し、内面  
は赤味を帯びる。底径が大きく、器高が低い。底部は回転糸切りで、内外面共に  
ナデ調整される。

#### SE 2007(第24図)

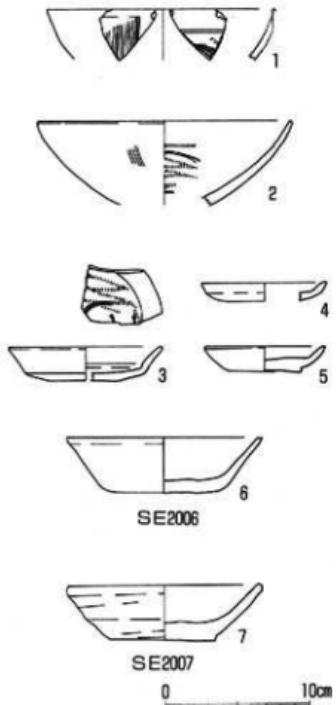
SE 2006の北東側に位置する木組方形縦板組の井戸である。一辺2.1m・  
深さ1mの方形の堀形の中央の黄灰色砂層面に一辺0.95mの方形井側を据える。  
長辺105cm・短辺40cm・厚さ4cmの板材を4枚用い、東西壁板材の短辺に幅3cmの  
段を作り、南北壁板材を挟んで方形に組み立てており、SE 2003と同様に井  
戸側の支持と淨水の機能をもっていたと考えられる。この井籠組の外側に幅72cm・  
厚さ7cmの大型の縦板を並べている。縦板は下両隅を丸めており、板の両隅あた



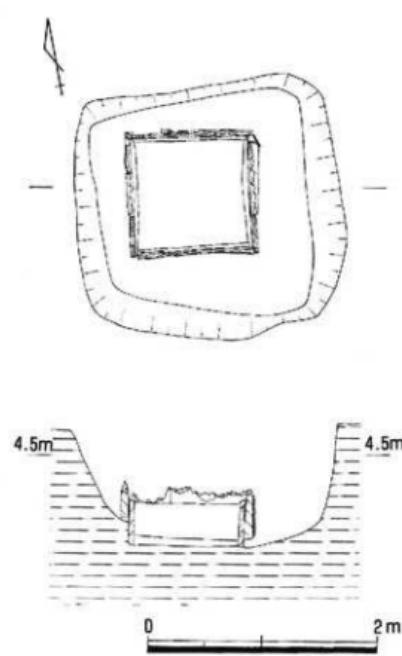
図版27 SE2004



図版28 SE2006

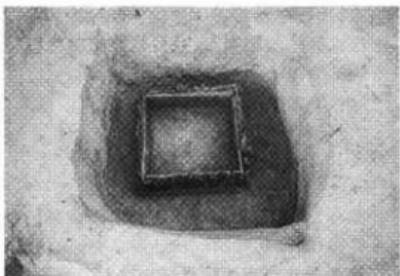


第23図 SE2006・2007出土土器類実測図



第24図 SE2007実測図

厚さ7cmの大型の縦板を並べている。縦板は下両隅を丸めており、板の両隅あたりに4cm角の穴を開けている。これは井戸枠を固定するための機能を果たしておらず、鼻縁部であろう。井戸枠北西隅の縦板は下に高さ11cmの角石を置いていた。井側内の底に厚さ10cmの砂利層があり、浄水のためと考えられる。砂利層の直上に40cm大の大型の自然石が乗っていた。この上に木製品、獸骨（頭部）を含む黒灰色土（灰色土ブロック混じり）、10cm大の自然石を含む黒色土が堆積していた。これ



図版29 SE2007

らの埋土から土師器、白磁碗IV・皿III類・水注、同安窯系青磁皿などが出土地している。(第23図・7)は土師器碗である。淡黄褐色を呈し、底径が大きく器高が低い。底部は回転糸切りで板状圧痕を有す。体部は若干ナデ痕が残り、内面は丁寧にナデ調整される。

#### SE 2008

SE 2007 のすぐ南西に位置する木組方形縦板隅柱横棟型井戸である。東西1.2m・南北1.4m・深さ1.3mの隅丸長方形の堀形底の灰白色砂層に一辺約0.75mの方形井戸側を据えている。隅柱2本と縦板が一部残っているのみであった。井戸を埋める際、横棟を7本程入れ、竹筒を置き上から鉄鍋を伏せた一辺30cmの折敷を置いている。竹筒は径4cm・長さ30cmのものを一度縦に割り、皮紐で再び縛っている。鉄鍋は径32cm・深さ12cmを測り、内面は焦げ目が付いているため使用されたものと判断できる。また、内面には毛髪様のものが付着しており、光学顕微鏡及び元素分析により、ヒトの頭毛で、血液型A型と判定された。その他の遺物は土師器、白磁碗IV類の細片が全部で4点見つかったのみで混入物と考えられる。

これらの埋土は地山ブロック混じりの黒色土一層であった。井戸内へ材を投棄し、鍋・折敷を安置し、井戸を埋めた行為は一時期に行なわれたと考えられる。さらに上に15cm大の自然石・礫が混じる黒色土が堆積しており、すべて一連の祭祀と考えられる。

#### SE 2009

I区中央北側に位置する木組の井戸である。径約1.6m・深さ0.7mの梢円形の堀形内に隅柱一本と板材が3枚残っていた。堀形の底は黄色砂利層である。遺物は見つからなかった。井戸の埋土は黒色粘質土で上部に自然石を含んでいた。



図版30 SE2008全景



図版31 SE2008鉄鍋埋設状況



図版32 SE2008鉄鍋除去後

### S E 2 0 0 1

S E 2 0 0 1 の東隣に位置する木組方形縦板隅柱の井戸である。東西辺約1.8m・南北辺約1.4m・深さ0.95mの方形堀形底の黄色砂層面に東西辺1.1m・南北1.05mの方形井側を据えている。幅9cm~13cmの縦板と5cm×4cmの隅柱が高さ20cm~40cm程、南東隅柱以外が残っていた。東側壁の縦板は井側内に倒れていた。

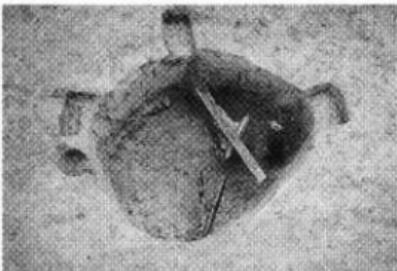
井側の底に種子、土師器、白磁、木椀を置き、上に石を置いている。ほぼ完形（第25図・1）のものと底部破片（第25図・2）の白磁椀V類2個体と土師器皿、木皿（第25図・7）である。また植物の種が約14個体見つかった。内5個は上に全面に赤色顔料を塗った完形土師器の皿（第25図・5）を伏せていた。土師器壊の底（第25図・4）は淡黄色を呈し、穿孔される。これらの上に10cm~30cm大の自然石を9個置いている。（第25図・3）は井側埋土より見つかった。赤褐色を呈す。底部が厚く、外面にロクロナデ痕が残る。この他に、白磁の細片、木皿（第25図・8）が見つかった。井側の埋土上層には自然石が混じる黒色土が堆積していた。

### S E 2 0 1 1 · S G 2 0 0 1

III区西南隅の池状遺構（SG 2 0 0 1）とその下部の井戸跡（S E 2 0 1 1）である。

S G 2 0 0 1 は径約4m・深さ約1mの不正円錐を呈す。壁面は内えぐり状になっており、貯水に伴って削られたのであろう。床面は灰色砂層である。下から、緑灰色礫混じり砂層、礫混じり黑色土、礫混じり暗赤褐色土と水平堆積している。遺物は土師器、白磁の細片が出土した。また、埋土の上層から瓦（第26図）が出土した。すぐ北側の包含層出土の個体と接合する。軒平瓦で淡褐色を呈し、胎土は精良である。焼成はやや軟質である。離れ砂を多用しており、叩きや布目圧痕が見えない。瓦当面には唐草文が展開し、文様凸部に離れ砂が付着する。

S E 2 0 1 1 は S G 2 0 0 1 の床面で検出した。一辺1.3mの隅丸正方形の堀



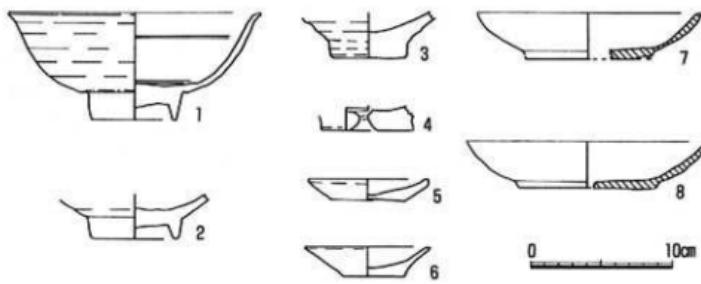
図版33 S E 2009



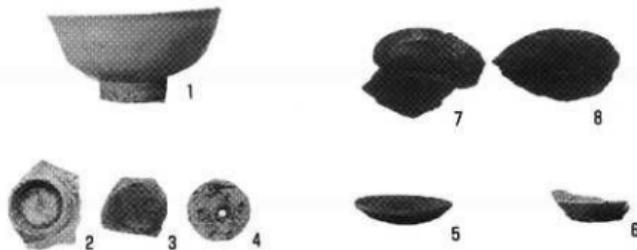
図版34 S E 2010全景



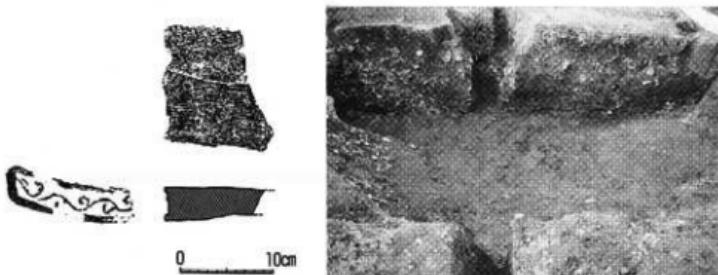
図版35 S E 2010底面



第25図 SE 2010出土遺物実測図



図版36 SE 2010出土遺物



第26図 SG 2001出土平瓦実測図

図版37 SG 2001

形の中に自然石、板材、土師器、白磁などの細片を含む黒色粘質土が堆積していた。平面形、床面が灰色砂層であることとあわせて井戸跡と考えられる。上部は SG 2001 によって埋されたのである。

### S E 2 0 1 2

IV区西側の円形の石組井戸である。南北2.9m・東西2.35m・深さ1.2mの楕円形の堀形底の浅黄色砂層上から20cmから60cm大の自然石を積み上げて上端径約1.6m・下端径約1mの円形井側を作る。壁面は目地を合わせず、裏込石もあり使用していない。井側内には下から黒灰色粘質土（下部に植物遺体を含む）、暗灰色粘質土、浅黄色粘質土、暗褐色土とほぼ水平堆積しており、井側の石が一部落ち込んでいた。井側埋土から土師器、白磁の小片が見つかった。



図版38 SE2012

### S E 2 0 1 3

V区東壁の円形の井戸である。西側半分のみ確認された。南北径3.4m深さ約0.9mの楕円形の堀形底の緑灰色砂礫層より約10cm上に径約1.5mの円形の石組が一段残っていた。

### S K 2 0 0 1 (第27図・1~9)

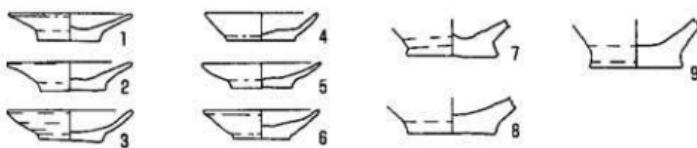
I区南側で確認した。東西径約1m・南北径約0.75m・深さ約0.15mの楕円形を呈す。埋土は炭化物を非常に多く含む黒色粘質土である。遺物は土師器がほとんどであった。(1)~(6)は皿、(7)~(9)は壺の底部である。いずれも灰褐色から淡赤褐色を呈すが、(8)は内面が淡黒褐色である。皿・壺共に底部を厚く作り、回転糸切り痕が残る。(7)は底部に板状圧痕が残る。

### S K 2 0 0 2 (第27図・10~18)

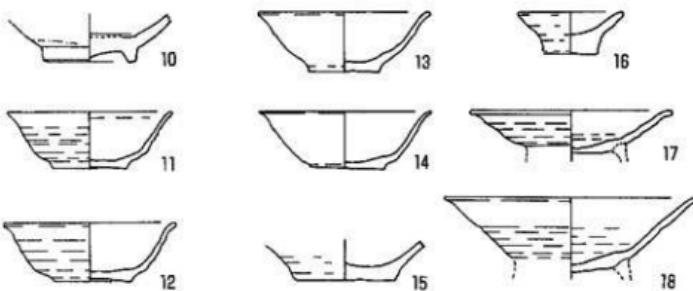
II区北側で確認した。南北約2.1m・東西約1.6mの隅丸方形を呈す。遺物は灰白色系の土師器がほとんどで少量の須恵器、白磁も見つかった。(10)は見込み内面の釉をかきとる白磁碗VII類の底部である。(11)~(14)は灰白色系の土師器壺である。やや黄色味を帯びたものが多い。すべて底部に回転糸切り痕が残り、体部はやや丸みをもって立ち上がり口縁端部を外反せる。体部にロクロ痕を頗著に残すもの(11、12)と丁寧なヨコナデを施すもの(13、14)がある。(15)は底径の大きい赤褐色の土師器壺で回転糸切り痕が残る。赤褐色の土師器はこれのみである。16は灰白色を呈し、底部を厚く造る。口径が小さく、器高が高い。高台付壺には口径が小さく、浅いもの(17)と口径が大きく、深いもの(18)がある。

### S K 2 0 0 7 (第27図・19~24)

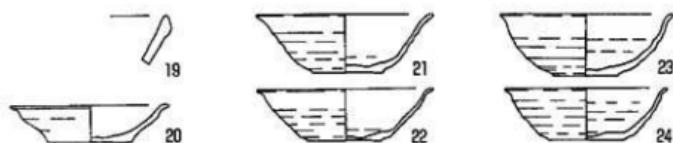
II区東側で確認した。遺構掘込み面がはっきりしなかつたが、復元径約0.4mの円形の土壤と考えられる。遺物比較的大きな土師器の破片がまとまって出土した。灰白色を呈するものが大多数を占める。いずれも底部は回転糸切りである。



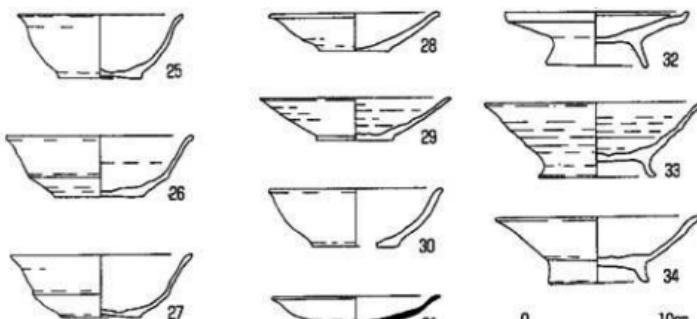
SK2001



SK2002

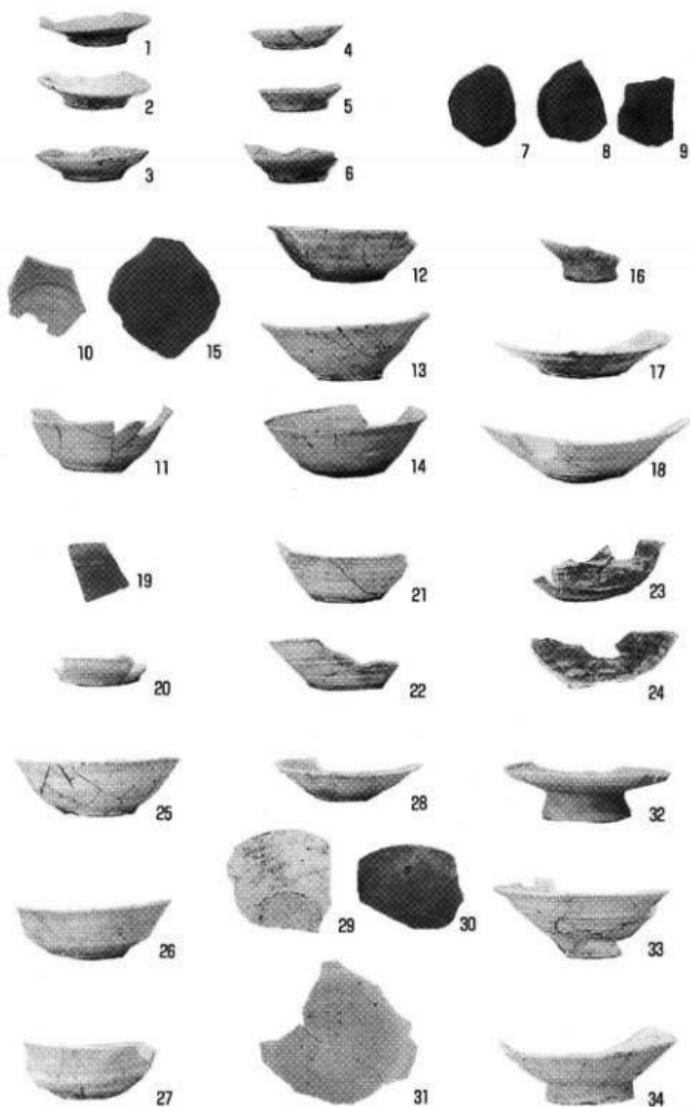


SK2007



SK2008

第27図 SK2001・2002・2007・2008出土土器類実測図



圖版39 SK2001・2002・2007・2008出土土器類

(19)は白磁楕IV類の口縁部である。(20)～(24)は灰白色系の土師器底である。(20)は器高が低く、口縁端部を外反させる。体部にはヨコナデが施される。(21)・(22)は体部がやや直線的に立ち上がるが、(23)・(24)は丸みをもち、内面に黒色顔料が付着する。いずれも口縁端部を外反させる。

#### S K 2 0 0 8 (第27図・25～34)

II区東端付近で南半分を確認した。径約3m・深さ約0.4mの円形を呈すと考えられる。土壤西半分には厚さ最大80cmの黒色土、炭を少量含む白色粘土が帶状に堆積していた。なお、粘土は土壤全体、特に西側に集中していた。粘土層の上下の黒色土を中心に大量の土器類が出土した。陶磁器類は見つからなかった。ほとんどが灰白色系の土師器で比較的丁寧なヨコナデを施し、

底部は回転糸切りである。(25)～(27)は体部に丸みをもち、口縁端部を外反させる。(26)はやや赤みを帯びる。(30)は赤褐色で器壁が厚い。(31)は須恵器の皿と考えられる。ヘラ切り後、不定方向のケズリとナデを施し、体部は回転ナデが施される。(32)～(34)はしっかりと高台をもつ。(32)は黄色味を帯びた赤褐色を呈し、口縁端部を上方につまみ上げている。

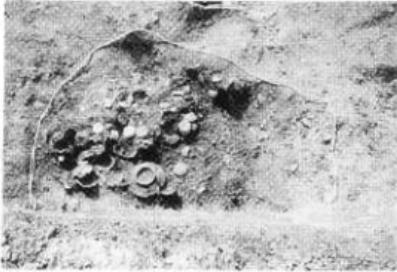


図版40 SK2008

#### S K 2 0 0 9 (第28図・1～4)

II区南側、SE 2 0 0 4 の北側に位置する土師器の廃棄土壤である。明確な堀形は確認できなかったが、復元最大径約1.2mの楕円形と考えられる。

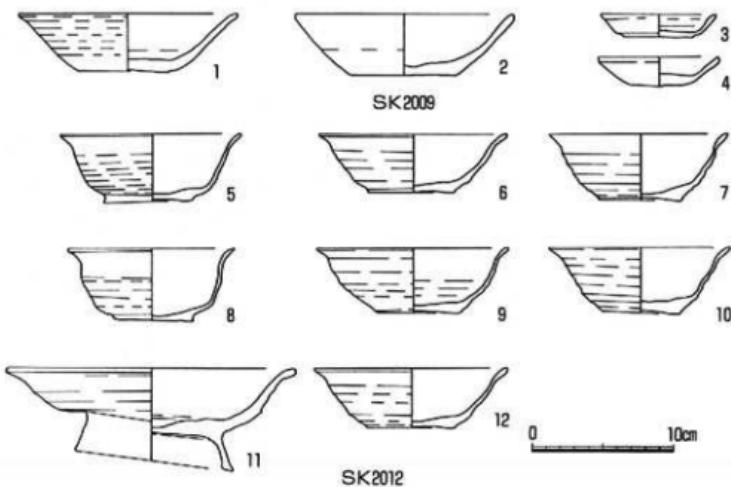
淡黄褐色から赤褐色を呈する土師器の破片が厚さ4cm程にぎっしり詰まっていた。大半が細片で復元できるものはほとんどなかった。(1)、(2)は土師器底である。いずれも淡黄褐色を呈し、底部は回転糸切りである。(1)はゆるやかに口縁端部が外反し、体部外面には荒いヨコナデを施す。(2)はやや体部が内湾し、丁寧なナデで仕上げられている。(3)、(4)は土師器皿である。いずれも底部は回転糸切りである。(3)は淡暗黄褐色を呈する。口縁付近が肥厚し、体部の最下段はナデにより凹線状に段が付く。(4)は淡黄褐色を呈する。底径が小さく、体部はゆるやかに立ち上がる。口縁端部外面にはナデによる面が作られる。



図版41 SK2012

#### S K 2 0 1 2 (第28図・5～12)

V区東端で確認した。径約1.4m・深さ約0.4mのやや不正円形を呈す。



第28図 SK2009・2012出土土器類実測図



図版42 SK2009・2012出土土器

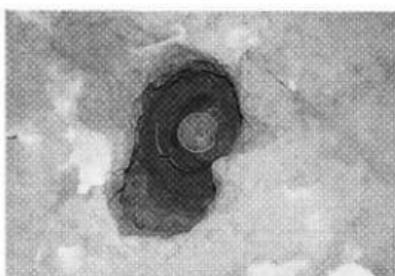
埋土は黒色粘質土一層である。遺物は完形に近い灰白色系の土師器が大多数であった。(5)～(10)、(12)は土師器壺で灰白色を呈す。いずれも体部は丸みをもち、口クロ痕が残る。口縁端部が外反し、底部は回転糸切りである。(5)、(8)は体部の立ち上がりがきつく、器高が高い。似た器形で一部が赤褐色を呈する個体もある。

#### P 2018 (第29図・6)

I区西側に位置する径25cm、深さ17cmの柱穴である。柱穴内より合付き皿（第29図・6）が見つかった。明黄褐色で底部は回転糸切りである。

#### P 2092 (第29図・1～5)

I区で確認した。径約40cm・深さ45cmの不正円形の柱穴内に下から白磁椀II類（第29図・1）、赤褐色の土師器壺2個体（第29図・2、3）、黄褐色の土師器皿（第29図・4、5）が積み重なった状態で検出された。しかし、白磁椀と土師器壺は接していなかった。いずれも底部は回転糸切りで皿は底径に違いが見られる。



図版43 P2092遺物出土状況

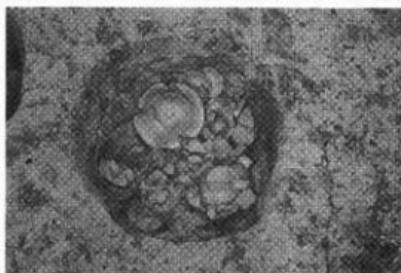
#### P 20294 (第29図・7～11)

I区東側で確認した。径20cm、深さ約26cmの円形の柱穴である。

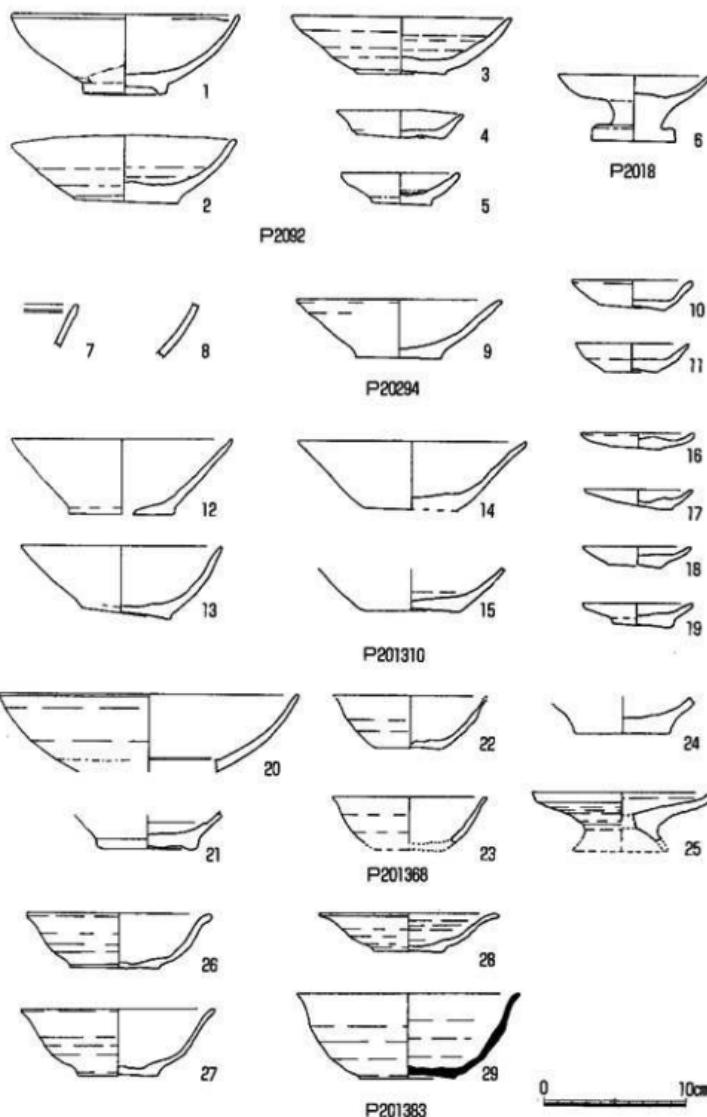
(7)は龍泉窯系青磁碗I2類である。青緑色の釉がかかり、内面に草花文を有する。(8)は白磁碗II類である。暗灰色の釉がかかり、外面に縱方向の片彫文を有する。(9)はやや赤味を帯びた黄褐色で体部はヨコナデで調整される。底部は回転糸切りで板状圧痕が残る。(10)、(11)の皿は体部はヨコナデを施し、底部は回転糸切りである。

#### P 201310 (第29図・12～19)

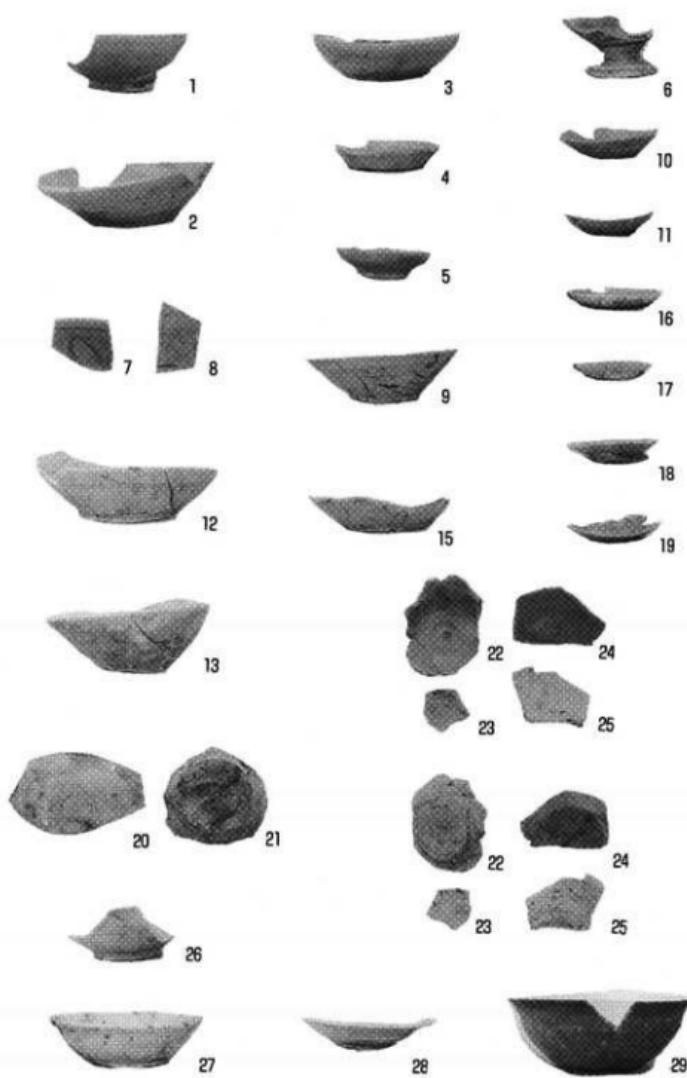
I区東側で確認した。径45cm・深さ23cmの円形を呈す。壁面はほぼ垂直であり、床面はやや丸みを帯びている。土師器壺5個体・土師器皿8個体・不明鉄器1個体がまとまって検出された。遺物の出土状態から単なる柱穴とは考えにくく、祭祀的性格が考えられる。(13)のみが底部は静止糸切りで、後はすべて回転糸切りである。淡黄褐色系の色調で赤味を帯びるものもある。壺（12～14）は体部が直線的で逆ハの字状である。皿（16～19）は器高の低いものが多い。



図版44 P201310遺物出土状況



第29圖 杜穴類出土器物類實測圖



図版45 柱穴類出土土器類

P 2 0 1 3 6 8 (第29図・20~25)

V区南東隅の直径約30cmの柱穴である。(20)は白磁椀V1類である。釉は黄色味を帯びた灰白色で内面見込みに段を有する。(21)は白磁椀IV類の底部である。(22)、(23)は灰白色を呈し体部に丸みをもち口縁部が外反する。(24)は淡赤褐色を呈すやや底部が厚い坏である。底に回転糸切り痕が残る。(25)は高台付坏で口縁端部を上方へつまみ上げる。

P 2 0 1 3 8 3 (第29図・26~29)

V区中央部に位置する。(26)、(27)は灰白色を呈し、体部はやや丸みをもって立ち上がり、口縁端部を外反させる。底部は回転糸切りである。(28)は(26)、(27)と同様の皿である。(29)は須恵器であるが、形、技法ともに(26)、(27)と共通している。

### 3. 遺物包含層・その他の遺物

遺跡全体に堆積している主要な包含層である黒灰色粘質土からは主として8世紀後半から14世紀代の遺物が見つかった。これらと一部遺構内の資料も含めて各主要出土遺物についての概要を記す。

#### 須恵器（第30図・1～19）

須恵器はII区東側からIII、IV区にかけて主に出土した。

(1～8)は蓋である。1～5はいずれも輪状のつまみがつく。(1)は器高が低く、口径が大きい。口唇部は下垂する。天井部はヘラキリ後に回転ナデを施す。(2)はしっかりした輪状つまみをもち、口縁端部は屈曲する。天井部はヘラキリ後に回転ナデを施す。(3)は天井部に回転糸切り痕が残り、全体的に作りが雑である。口縁端部は直線状に終わる。(5)は輪状つまみがやや小さく天井部に「宅代」の墨書を有する。(6)は天井部外面に回転糸切り痕が残る。口唇部は屈曲し、他の蓋とは焼成がやや異なり、色調は灰白色を呈す。(9～14)は坏である。(9)は底部外縁よりやや内側に低いがしっかりした高台がつく。(10)は体部がやや丸味をもち、高台はやや外反する。底部にはヘラキリ痕を有す。(11)は器壁がやや厚く、体部は緩やかに弯曲する。(12)は淡灰色を呈し、体部は直線的に立上り、回転ナデを施す。底部に回転糸切り痕が残る。(13)は底部に回転糸切り痕が残り、低い高台がつく。(14)は体部がやや外反し、底部外縁に低い高台をつける。(15)は体部が直線的に開く。(16～18)は皿である。(16)は体部が大きく開き、口縁端部を外反させる。底部を厚く作り、回転糸切り痕が残る。(17)は器高が低く、底部を厚く作り、端部を低くつまみ出して低い高台状に作る。(18)は体部が内湾し、口縁端部を上につまみあげる。底部は厚く作り出し、回転糸切り痕が残る。(19)は長頸壺である。全体に自然釉がかかる。底部外縁端に低い高台がつく。体部は肩がはらず、なで肩である。頸部はややハの字状に内傾して延び、口縁部はやや厚みをもち、段を作る。全体的に作りが粗雑である。

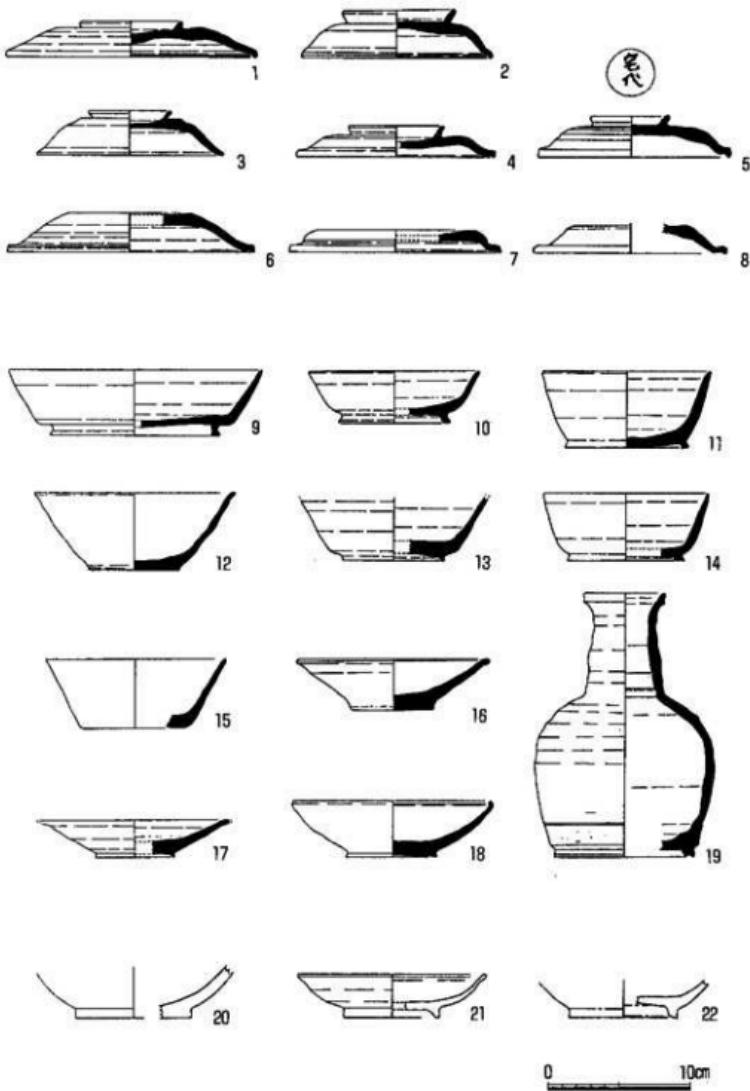
#### 綠釉陶器（第30図・20～22）

II区東側、及びIII、V区から出土した。

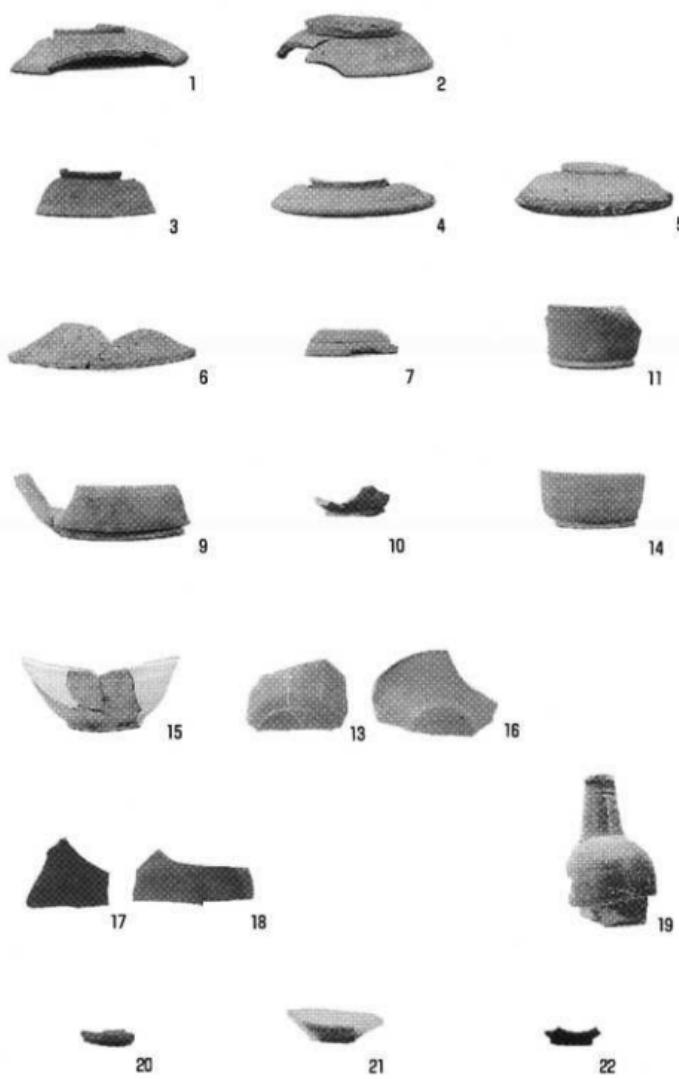
(20)は胎土は灰色で硬質、蛇の目高台で淡緑灰色の釉がかかる。洛北産である。(21)は胎土は土師質で、淡緑色の釉がかかる。防長産と推定される。(22)は胎土は灰色で硬質、濃緑色の釉がかかる。近江産である。その他に細片であるが美濃産、猪投窯産の製品も出土している（註1）。

#### 土師器・須恵器（第31図・1～16）

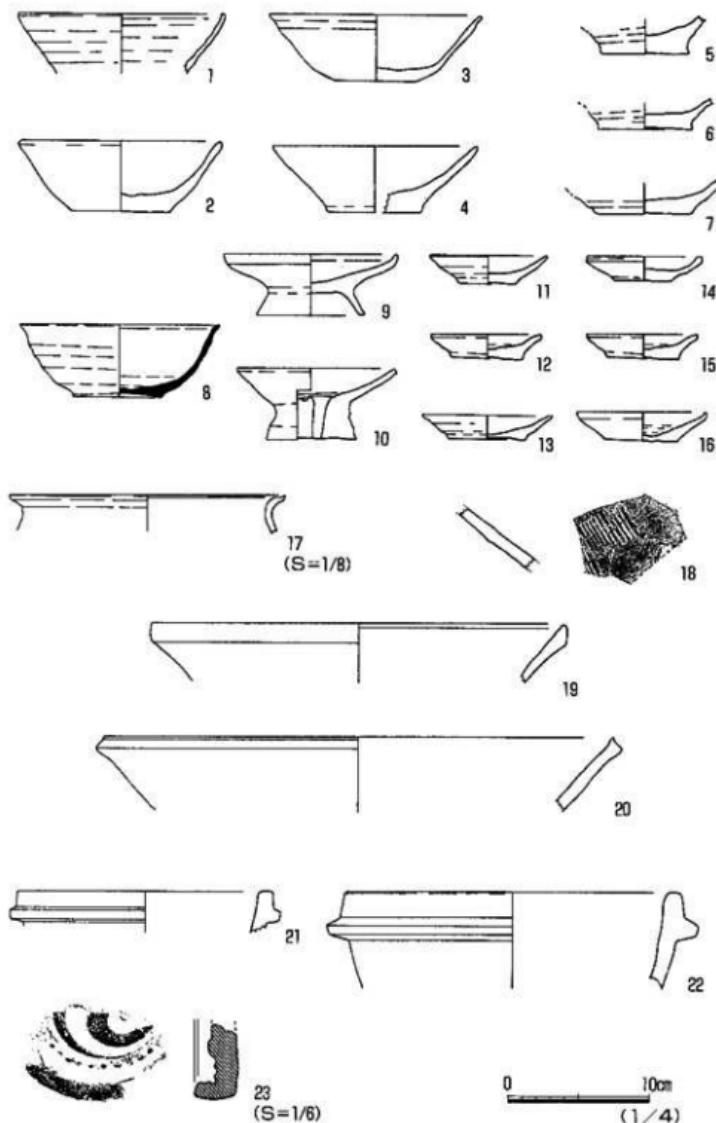
(1～7)は土師器坏である。底部は回転糸切りである。底部を厚く作り、体部は逆ハの字状を呈す。(8)は須恵器である。暗青色を呈し、器壁が薄い。体部はやや丸みをもち、口縁端部は外反する。底部は回転糸切りである。土師器と形態が類似する。(9)は脚付皿である。長い高台部をもち、口縁端部をつまみ上げる。



第30図 遺物包含層出土遺物実測図（1）



图版46  遗物包含层出土遗物（1）



第31圖 遺物包含層出土遺物實測圖（2）



2



3



4



8



9



10



17



18



19



20



21



22



23

图版47 造物包含层出土遗物（2）

(10)は台付き皿である。しっかりした柱状高台をもち、穿孔されている。(11～16)は皿である。すべて底部は回転糸切りである。形態は様々なものがあり、短く外反するもの(12)、口縁端部が肥厚するもの(14・15)、上につまみ上げるもの(16)などがある。

#### 常滑系陶器（第31図・17、18）

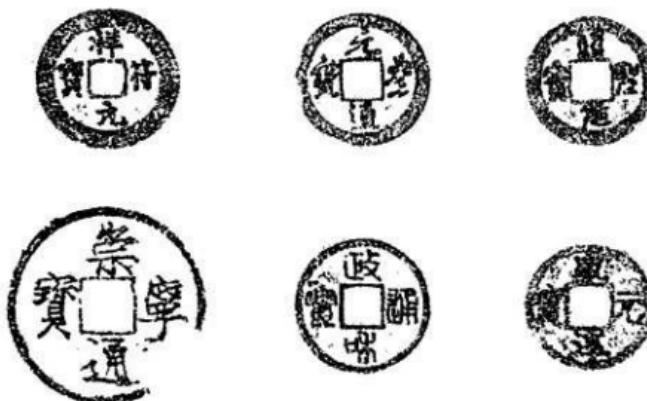
肩から副部にかけての破片が多く、全形を知り得るものはなかった。(17)は口縁部の破片である。復元口径はおよそ39cmである。胎土は暗灰色で白色砂粒を若干含む。外面に濃緑色の釉がかかり、内面は露胎で褐色を呈する。口縁端部を若干上方へつまみ上げる。生産地の編年で2型式に属し、時期は12世紀後半頃である(註2)。(18)は肩部の破片である。胎土は灰白色で釉はかからず、押印が認められる。

#### 東播系須恵器（第31図・19、20）

擂鉢が確認できた。いずれも青灰色を呈し、体部上半から口縁部にかけて若干外反する。(19)は口縁部を肥厚させている。(20)は口径が36cmと大きく、口縁部の上端を上へつまみ上げる。12世紀末葉から13世紀前半と考えられる(註3)。

#### 滑石製鏡（第31図・21、22）

全形を知り得るものはなかった。(21)は小型品、(22)は大型品である。いずれも鏡の断面が台形状である。木戸氏の石鏡編年試案のⅢ類-a-2に属し、12世紀初頭から13世紀に位置付けられる(註4)。



第32図 銀貨拓影図 (S=1/1)

### 瓦（第31図・23）

III、IV区からは離れ砂の付着する平瓦片が主として見つかったが、縄目や布目痕の残る古代瓦がI・II区を中心にかなりの量が出土した。軒丸瓦（下府廃寺I類）、軒平瓦（下府廃寺II類）が出土している（註5）。

三重の巴文の軒丸瓦（第31図・23）はIII区SG2001付近の包含層より見つかった。外面は黒灰色を呈し、瓦質である。復元径は14.4cmを測る。珠文は10個残っており、復元すると31個程と考えられる。同様のものは、V区からも出土している。

### 銭貨（第32図）

全部で10枚出土している。開元通宝、祥符元宝、咸淳元宝、元豐通宝、紹聖元宝、崇寧通宝、政和通宝が各1枚づつ、不明のものが3枚ある。北宋銭が最も多い。崇寧通宝は単独で柱穴内から出土した。

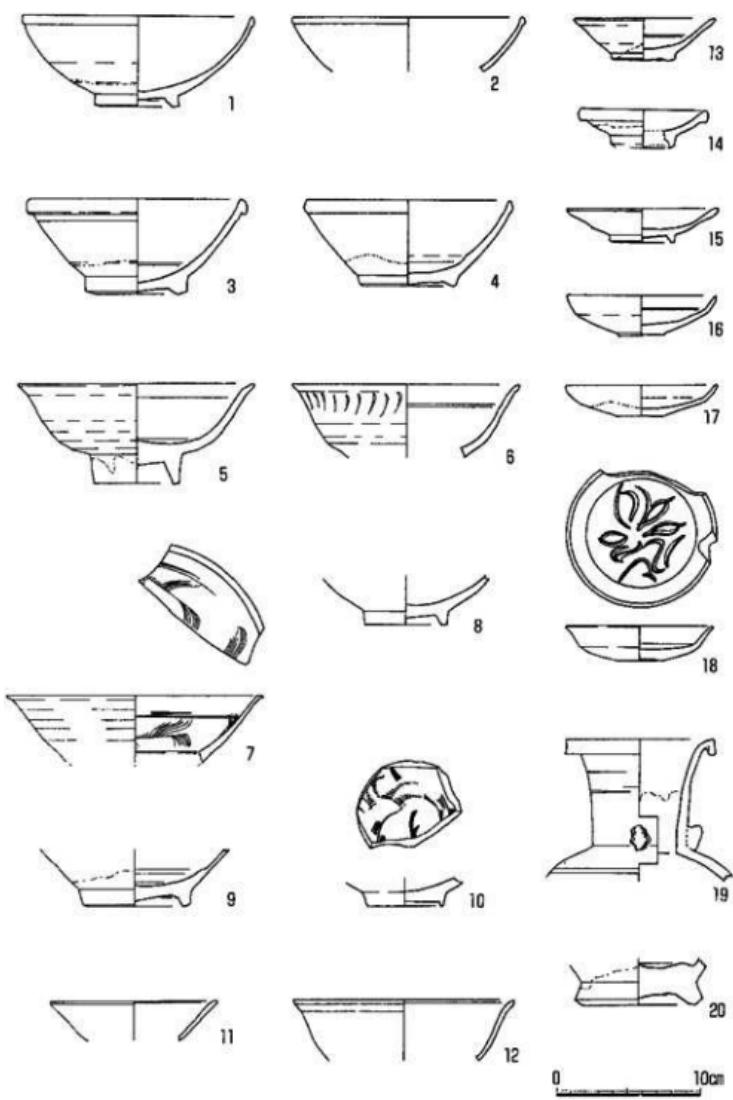
### 貿易陶磁

貿易陶磁は太宰府で行われている分類を使用する（註6）。

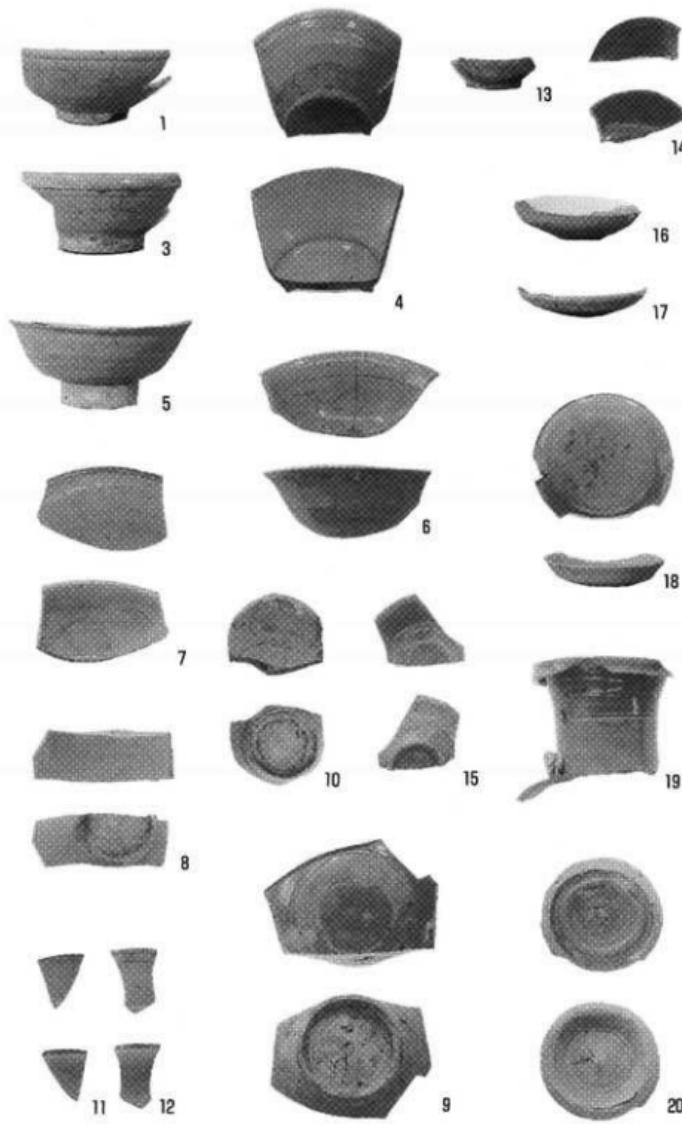
#### 白磁（第33図）

11世紀後半から12世紀代にかけてのものが最も多い。13世紀中頃から14世紀前後の白磁IX類まで出土する。しかし、14世紀頃の乳灰色で失透性の釉が施されるいわゆる「枢府磁」が遺跡北側で少量見つかっている。北側は後世の河川の影響を受けていたため、出土層位は明確ではない。

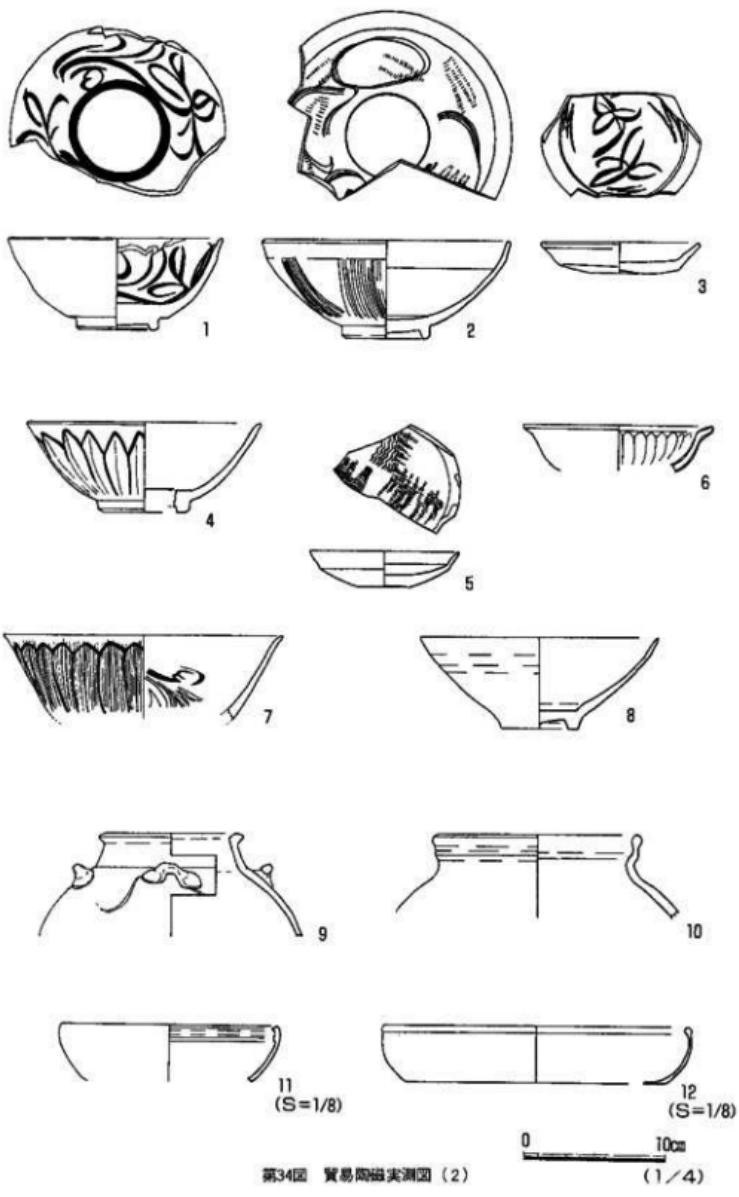
(1~10、12)は楕である。(1)はII類である。釉はやや黄色味を帯び、内面と外面体部中位までかかる。化粧土がある。口縁部に小さな玉縁を作り、体部は上半部に丸みをもって立ち上がる。高台の外面は直、内面は斜めに削る。(2)もII類の口縁部である。(3)はIV類である。釉は黄緑色味を帯び、貫入が見られる。内面と外面体部中位までかかる。大きい玉縁口縁で、高台は浅く削りだされる。内面下位に段がある。(4)もIV類である。釉は灰白色味を帯び、貫入が見られる。内面と外面体部中位にかかる。扁平な玉縁口縁で、内面下位部が一段凹む。(5、6、7)はV類である。(5)はV2a類である。釉は黄灰色味を帯び、貫入が見られる。口縁端部は外反し、高い高台をもつ。内面下位に段をもつ。(6)はV2b類の口縁部で釉はやや灰緑色味を帯び、貫入が見られる。外面に継のヘラ片切彫文がある。(7)はV4b類である。口縁端部は屈折し、水平にする。内面に櫛目文がある。(8)はVI類である。低くて細い高台をもつ。(9)はVII類の底部である。内面見込みの釉を輪状に搔き取っており、内面下位に段がある。(10)は釉が内面と高台外面部までかかる。内面に細い櫛目文が展開している。VII類であろうか。(12)はIX類で口縁端部の釉を搔き取る口堀れの口縁である。(11、13~18)は皿である。(11)はIX類で口堀れの口縁である。(12)はII1a類である。釉はくすんだ灰白色で表面に凹凸、貫入がある。浅い削り出しの高台をもち、端部はやや外反する。内面中位に段をもつ。(14)はII1b類である。玉縁口縁で、灰緑色味を帯びた釉がかかる。(15)はIII1類である。口縁部はやや外反し、内面見込みの釉を輪状に搔きとる。(16、17)はVII1a類である。釉は黄色味を帯び、内面と外面下位まで



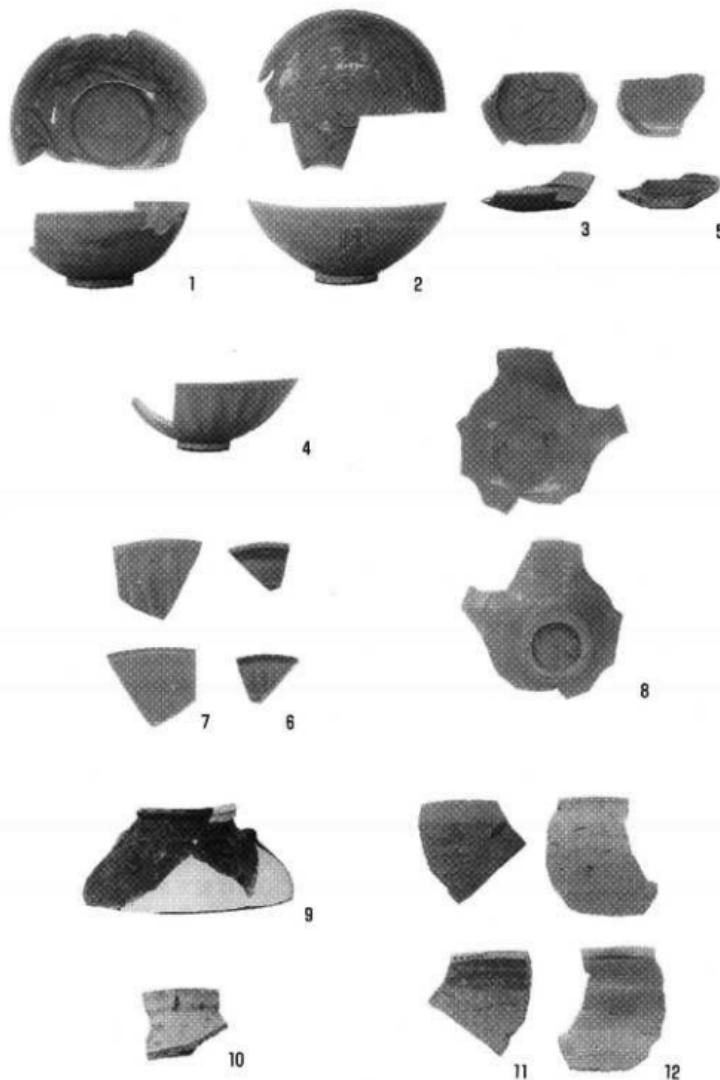
第33図 貿易陶磁実測図（1）



圖版48 貿易陶磁 (1)



第34図 貿易窯磁実測図（2）



圖版49 貿易陶磁（2）

かかる。直口縁で内面上位に段があり、平底である。(18)はV類である。釉は白灰色で、内面と外面下位までかかる。ほぼ直口縁で、内面中位に段があり、平底である。内面に花文がある。(19)は水注の口縁部である。灰緑色の釉がかかる。口縁部は外へ折り曲げている。破片のため全体の形状は不明だが、突起状の飾りが首部の下端に一ヶ所残っている。(20)は水注あるいは四耳壺の底部である。緑灰色の釉が内面と外面体部にかかる。

#### 青磁（第34図・1～7）

ほとんどは12世紀中頃から14世紀のものだが、やや時代が遡る越州窯青磁の破片が一点出土している。

(1、4～7)は龍泉窯系青磁である。(1)は楕I2類である。釉はやや灰色味を帯びた緑色で内面に草花文を有する。(4)はI5b類で釉はやや明るい緑色である。外面体部に錦連弁の文様を有する。(5)は皿である。釉は灰色である。直口縁で内面中位に段をもつ。内面に櫛によるジグザグ文様を有する。(6)は坏皿3b類である。釉は明るい緑色で、厚くかかる。口縁端部を直上に引出し、体部内面に先端の丸い連弁を有する。(7)は外面に錦連弁を削り出し、その上に櫛目を縱に入れる。内面に葉文様を有する。釉は青味を帯びた緑色である。(2、3)は同安窯系青磁である。(2)は楕I類である。釉は黄緑色でガラス質である。外面に縦方向の櫛目を有し、内面見込みに段がある。(3)は皿I2類である。釉は灰緑色でガラス質である。体部中位で屈曲し、内面にヘラによる片彫と櫛によるジグザグ文様を有する。底部の釉を搔き取っている。

#### 高麗青磁（第34図・8）

胎土は淡黄灰色で淡黄褐色の釉を全面施釉した後に高台疊付の釉を削る。体部はやや丸みをもって立ち上がり、内面見込みに段を有す。目あとが内面見込みに三ヶ所、高台疊付付近に四ヶ所残る。図化しなかったが、深緑色の釉がかかり、内面見込みと高台疊付に目あとが残る個体もある。

#### 陶器（第34図・9～12）

ほとんどが破片のため復元できるものは非常に少なかった。(9)は四耳壺V類である。胎土は灰褐色で、一部空洞が見られる。釉は光沢のない灰黄褐色で外面に薄く流す。頸部と胴部の境は明瞭で、頸部はハの字状で口縁端部は水平に屈折する。破片だが肩部に横方向の耳が二ヶ所残る。(10)は壺である。胎土は赤褐色で白色粒子を多く含む。淡黄褐色の光沢のない釉を流す。頸と胴の境は明瞭でなく、口縁部は屈曲し、端部が肥厚する。(11)は鉢I類である。復元口径は30.6cmである。暗紫灰色で白色粒子を多く含む粗い胎土である。外面は暗茶褐色を呈す。口縁部の内面に一条の突起を有し、さらに口縁端部を内側へつまみ出し、二条の突起のように作る。内面は研磨されている。(12)は盤である。復元口径41.3cm、底径36.8cmを測る。胎土は灰色で黒色粒子を若干含む。内面のみ淡黄褐色の釉がかかり、外面は露胎である。口縁部は釉を拭きとどおり、一部赤褐色に発色する。体部は丸みをもち、口縁部を玉縁状に作る。

註

- (1) 京都市埋蔵文化財研究所の平尾政幸氏にご教示いただいた。
- (2) 常滑市民族資料館の中野晴久氏にご教示いただいた。  
『全国シンポジウム「中世常滑焼をとて」資料集』  
日本福祉大学知多半島総合研究所1994
- (3) 森田稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開－神出古窯址群を中心にして－」  
『神戸市立博物館研究紀要 第3号』1986
- (4) 木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究IX』1993
- (5) 浜田市教育委員会『下府廃寺跡』1993
- (6) 貿易陶磁については山本信夫、村上勇両先生にご教示を得たが、筆者の力量不足により十分に活かしきれなかった。なお、主として以下の文献・資料を参照した。  
山本信夫「北部九州の陶磁器編年（10世紀後半～14世紀前半）」  
島根県浜田市古市遺跡調査指導会資料 1994  
森田勉・横田賢次郎「太宰府出土の輸入陶磁器について」  
『九州歴史資料館研究論集4』1978  
太宰府市教育委員会「太宰府条坊跡II」1983  
山本信夫「太宰府の中国陶磁－白磁分類の問題点－」  
『古文化談叢第20集（中）』九州古文化研究会 1989  
山本信夫「北宋期貿易陶磁器の編年－太宰府出土例を中心として－」  
『貿易陶磁研究No.8』1988  
山本信夫「太宰府の発掘と中国陶磁」『北九州の中国陶磁』  
北九州市立考古博物館 1988  
山本信夫「11・12世紀の貿易陶磁器－1980年代の編年研究を中心として－」  
『貿易陶磁研究No.10』1990

## 4.まとめ

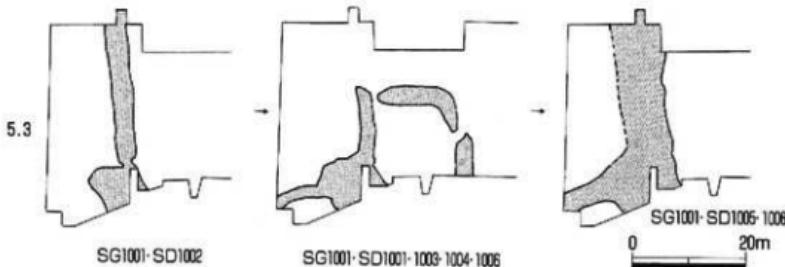
### 1. 第1遺構面について

第1遺構面は水田直下のため削平を受けたと考えられるが、I区は用水の池を中心として区画溝に囲まれた建物が存在する。この区画溝内から見つかった木簡から理趣経などを講じる「佛陀祈誓所」の存在を伺える。他に溝からは刀形木製品という形代、梵字を記した塔婆、曲物・折敷といった道具も見つかっており、祭祀的要素が強い。区画溝に囲まれた空間と建物の性格として御堂が推定できるであろう。

時期についてはSD1004出土の備前焼（第10図・3）は間壁編年のV期にあたり、16世紀に位置付けられる（註1）。線描き蓮弁の青磁、染付も同様な年代観である。国産の染付が出土しなかったことも併せて下限は16世紀代、上限は第2遺構面が衰退後に若干時間差があることからおよそ15世紀頃であろう。

区画外には井戸の他、若干の柱痕が残っており、遺構面が広がっていたと考えられるが水田による削平により判然としない。一連の区画された施設と井戸との関係は不明だが、2つの井戸はそれぞれ区画の北側、東側に位置している。井戸は第2遺構面と比較すると次のような相違点が見られる。木組のものは井戸側の加工、組立て方が全体的に難である。しかし石を用いて井戸を埋めている点は共通する。石組は径が小さく、積み上げ方も難である。

15世紀頃にはSG1001ができ、第35図のような変化を経て16世紀代には池はほとんど管理されない自然流路のような状態になる。しかし、調査前にはSG1001直上にコンクリート水路がはしっており、維持して水路が營まれたのであろう。



第35図 第1遺構面SG・SD変遷模式図

安国寺前では東西方方向の溝、SD1007が確認され、現在の寺域とほぼ一致している。現在の山門から北へ伸びる道の脇で礎石状のSX1002が検出され、門などの存在した可能性がある。また、安国寺には曹溪庵（宗慶庵）や曼華庵（土現庵）等の子院があったとされ、「門前憩ケイ庵」「トケ庵門前」「トケ庵大梅庵」「南岳寺トケ庵」といった小字名がIII・IV・V区の辺りに残っている。SD1007より北側にはSK1001など、若干の遺構が存在したと考えられるが、大部分は削平されたためか、確認できなかった。III・IV・V区では離れ砂の付着する瓦は13世紀中頃以降の層より主に出土しており、現位置での安国寺は鎌倉時代後半頃までは遷れるであろう。

## 2. 第2遺構面について

第2遺構面は古市遺跡の最も繁栄した時期で、出土遺物が最も多い。

遺構の変遷を緑灰色粘質土上面と黒灰色粘質土中で検出したもので二期にわけることができる。ただし、黒灰色粘質土の分層は部分的にしかできていない。さらに遺構内出土の貿易陶磁を山本信夫氏の編年(註2)で細分し、I～III期に区分する。(第36図) 貿易陶磁を伴わない遺構は上記の区分における土師器の特徴から位置付けた。しかし、各期内の前後関係は明らかではない。

I期は白磁のみを伴い、青磁は共伴しない。山本編年のC期にあたり、11世紀後半から12世紀前半である。

灰白色系の土師器の廃棄土壙が顕著に見られる。これらの廃棄土壙からは赤褐色系の土師器の破片が少量出土する。坏は体部に丸味をもち、口縁部を外反させる特徴がある。体部に回転ナデ痕を顕著に残すものが多い。この坏と同様の特徴をもつ須恵器も見られる。井戸からは黄褐色系の土師器の破片が出土し、灰白色系の土師器はあまり見られない。厚い底部の破片が見られるが、全形は不明である。

この時期の遺構はV区に多く見られる。ただし、灰白色系の土師器は主として

I 期	SK2012			P201368
	SK2008	SE2001 SE2009		P201383
	SK2007	SE2010 SE2011 ↓		P2092 ↓
II 期	SK2002	↑ SE2005 SE2012 SE2002		P20294 P201310
		SD2001		
	SK2001	SE2003 SE2004 SE2006 SE2007	SD2002	
III 期	SK2009	SE2008		

(各期内の遺構配列は必ずしも時間差を示さない)

第36図 第2遺構面主要遺構編年図

廃棄土壌の出土であり、やや特殊である。なお、石見国分寺跡第12調査区から同様の灰白色系土師器類が出土している(註3)。貿易陶磁が確認されておらず、若干Ⅰ期に先行する形のものであろう。同様の土師器は下府廃寺跡(註4)でも確認されており、下府平野全体に分布が見られる。

Ⅱ期は主に龍泉窯系青磁、同安窯系青磁を伴う。山本編年のD期にあたり、およそ、12世紀中頃から後半頃である。

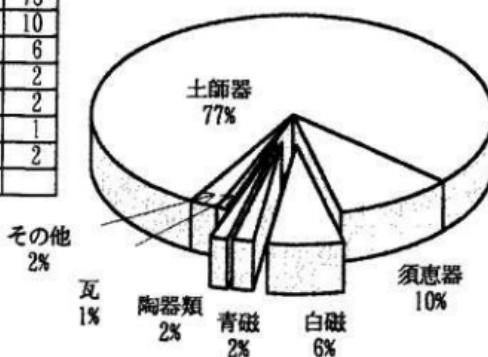
灰白色系の土師器を伴う土壌としてSK 2002がある。白磁碗VII類の底部が共伴しており、Ⅱ期でも古い時期であろう。この時期に灰白色系の土師器から黄褐色系の土師器へ主流が移り、灰白色系土師器は作られなくなるのである。黄褐色系の土師器は全形を知り得るものが遺構からほとんど見つからなかったが、様々なタイプのものがあると考えられる。坏は底径が小さく、体部が直線的に立ち上がるものが多い。

Ⅲ期は黒灰色粘質土中に作られた遺構とSD 2002最下層を指標とする。SD 2002最下層は白磁IX類、龍泉窯系青磁III類が出土しており、Ⅲ期内の一定点を13世紀の中頃を中心とする時期とおける。この時期の遺構は検出面の判然としないものが多い。

SD 2002に代表される黄褐色系の土師器が主流を占める。灰白色系の土師器は確認できない。坏は底径が大きくなり、器高は低くなる。

建物跡と井戸、溝など町並みの変遷については不明な点が多いが、建物は主軸を描えるものとそうでないものが見られる。主軸を真北に合わせたSB 2022とSE 2003、SE 2004は重複している。二つの井戸はⅢ期であり、井戸を埋めた後には建物を立てないと考えれば、主軸を描えるSB 2022のような

	破片数	%
土師器	8,848	78
須恵器	1,110	10
白磁	690	6
青磁	181	2
陶器類	179	2
瓦	84	1
その他	248	2
合計	11,340 点	



古市遺跡出土遺物組成表

建物は古くなるのである。第2遺構面は14世紀代頃にはほとんど衰退し、異なった性格の第1遺構面が展開したと考えられる。

包含層出土の遺物を破片数での組成を示す。中国産陶器と国産陶器、古代瓦と中世瓦、須恵器については充分に分類できなかったため一括して表示した。全体のなかで陶磁器類は10%を示しており、陶磁器の占める割合が高い。これほど中世前半期で貿易陶磁類が大量に出土した遺跡は県内では見られず、古市遺跡の大きな特徴である(註5)。

### 3. 遺跡の性格について

近年、益田氏を中心とした石見國の中世史研究の進展は目覚ましいものがある。これらにより、古市遺跡のある中世の伊賀郷について要約すると以下のようになるであろう(註6)。『貞応二年石見國惣田敷注文』、いわゆる大田文によると伊賀郷は公領で、在庁別名が集中している。中世の伊賀郷は御神本氏→三隅氏→益田氏と領有権が移動し、守護領には組み込まれない。南北朝期に安国寺が建立されるころまでは伊賀郷は中枢機能を担っており、室町・戦国期には邇摩郡に政治・経済的中枢機能が集中する。この背景には大内氏の分都知行体制による石見國の構造転換が想定される。

この政治的背景と古市遺跡の様相を対比すると、第2遺構面の衰退期が若干早いが、第2遺構面が衰退し、別性格の第1遺構面が展開する様相はほぼ伊賀郷の様相と連動している。第2遺構面を伊賀郷に存在した石見府中城内の一拠点として見ることは可能であろう。第1遺構面は祭祀的性格をもった遺構・遺物が検出され、どちらかといえば安国寺との関連が強いと考えられる。

また、地名から市場跡の可能性もある。しかし、多量の木製品の中で荷札の木簡は一点も見つからなかった。他に市場跡の可能性のある遺跡としては広島県三日市遺跡(註7)、山口県市場遺跡(註8)、板木県下古館遺跡(註9)などがあげられる。街道脇に小規模な建物群が並ぶものであり(註10)、時期はいずれも新しく、古市遺跡の第2遺構面とは様相が異なっている。

今回の調査では中世の遺構のみが確認されたが、古代の須恵器を中心として、瓦、縄釉陶器が出土したことを見逃せない。しかし、瓦は見つからなかった。これらの遺物はII区東側、III区、IV区西側に集中している。古代の遺構が山側の現在の市営住宅付近にあり、中世にかけて遺構が北側に拡大したのである。須恵器は石見空港地内遺跡編年によるとIII期頃が最も多く8世紀後半頃であるが若干II期(第30図・9)まで上がるものもある。(註11)。大田市白坪遺跡(註12)で延喜九年(909年)銘木簡と共に伴した須恵器に似た形式(第30図・13)のものもあり、継続的な遺跡であることが伺える。また、縄釉陶器は9世紀を中心に一部10世紀にかかるもので、京都、近江、滋賀、近畿と多様である。また、越州窯青磁も出土しており、単なる古代集落とは考えられない。

全国的な中世遺跡研究、及び石見國府の確認について非常に重要な知見を得ることが出来たといえよう。

註

- (1) 真壁忠彦『備前焼』考古学ライブラー-60 ニューサイエンス社 1991
- (2) 山本信夫「北宋期貿易陶磁の編年－太宰府出土例を中心として－」  
『貿易陶磁研究』No.8 1988
- 山本信夫「北部九州の陶磁器編年」  
島根県浜田市古市遺跡調査指導会資料 1994
- (3) 浜田市教育委員会『石見国分寺跡第Ⅰ期調査概報』 1989  
原 裕司「浜田市・古市遺跡出土の遺物」『松江考古』第8号 1992
- (4) 浜田市教育委員会『下府廃寺跡』 1993
- (5) 広江耕史「島根県内の中世の遺跡について」『中世土器研究』第66号 1992  
松江考古学講話会『松江考古』第8号 1992
- (6) 主として以下の文献を使用した。  
井上寛司「中世温泉津地域における領主支配の歴史的展開過程」  
『温泉津町誌研究』第3号 1992  
井上寛司「貞応二年石見国惣田數注文の基礎的検討」『山陰史談』18号  
温泉津町『温泉津町誌』上巻 1994  
益田市教育委員会『史料集 益田兼見とその時代』 1994
- (7) 広島県埋蔵文化財調査センター『三日市遺跡』 1992
- (8) 山口県教育委員会『市場遺跡II・宮添遺跡』 1992
- (9) 栃木県文化振興事業団『自治医科大学周辺地区 総合62年度埋蔵文化財発掘調査報告書』 1988
- (10) 佐久間貴士「発掘された中世の村と町」  
『岩波講座日本通史』第9巻中世3 1994
- (11) 島根県教育委員会『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』 1992  
須恵器全般については西尾克己、森田直子両氏にご教示いただいた。
- (12) 大田市教育委員会『白坏遺跡発掘調査概報』 1989

## VI. 付 論

# 古市遺跡の地質的環境

島根大学理学部地質学教室 中村唯史

古市遺跡は下府川下流に形成された小規模な沖積平野に立地する。東西に細長い平野で、下府駅付近で両側の山地で狭窄された形になり、これより西側（下流側）で日本海に面し、海岸砂州が発達する。平野地下は標高 -15 m 以深に達する埋没谷を埋めて、貝化石を含んだ細粒砂～シルト層が堆積し、この上位にやや粗粒な堆積物が重なる（第1図）。貝化石を含む細粒砂～シルト層はN値が概ね10以下であり、完新世（過去1万年間）の堆積物と判断できる。

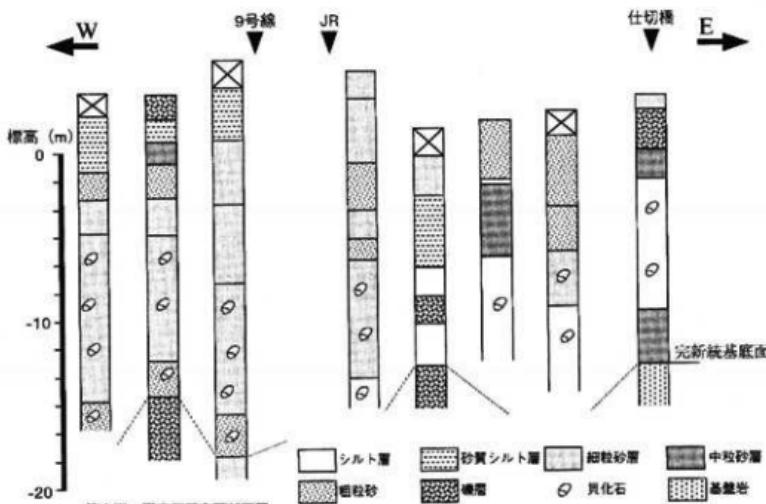
調査区内では最下位に礫と砂を主体とする粗粒堆積物があり、これに比較的細粒なシルト質砂～砂質シルト層が重なる（第2図）。細粒堆積物中に11世紀以降、数世紀にわたる時代の遺構面が認められる。一部で遺構面を削り込んだ古流路が認められた。

最下位の粗粒堆積物は調査区のほぼ全域で認められた。層相の変化が大きく中礫層から細粒砂層まで認められ、一部で薄い粘土層を挟む。礫は亜円～亜角礫で泥質片岩、珪質片岩を主とする。φ10 cm を越えるものも含まれる。走向はN20°E前後を示す。粗粒堆積物には弥生時代の遺物が礫とともに含まれ、時期を異にするものが含まれないことから、礫層の堆積時期は弥生時代と判断できる。

粗粒堆積物の上位に重なるシルト質砂～砂質シルト層は調査区のほぼ全域で認められた。ここには11世紀以降の数時代の遺構面が認められる。また、調査区東部（平成6年度調査区）の一部では砂質シルト層の上位に礫層が重なる。

以上のことから、古市遺跡の環境変遷について考察する。

平野の地下には比較的細粒な堆積物からなる地層があり、完新世の海面上昇期



第1図 下府平野東西断面図

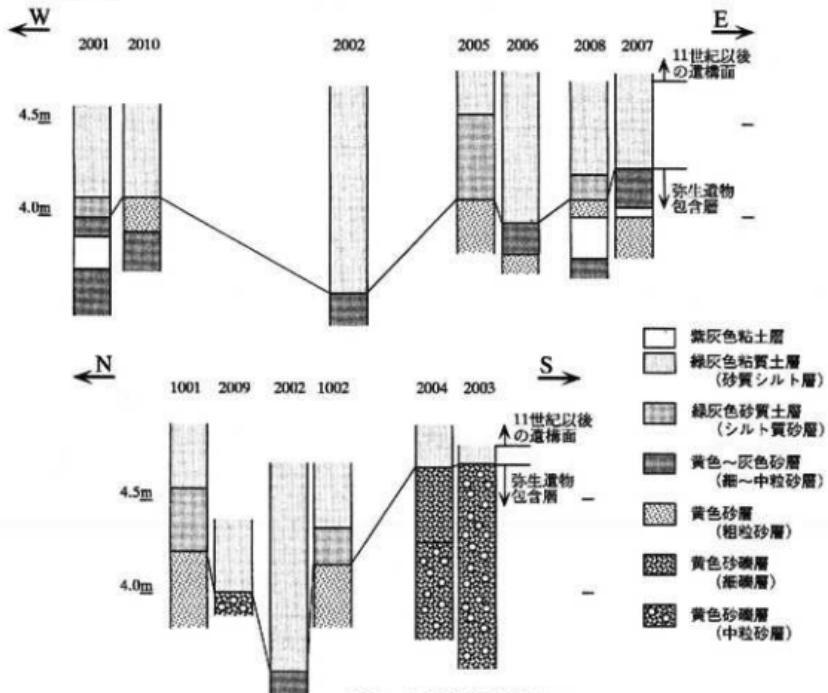
に形成された内湾または潟湖の堆積物と考えられる。規模の小さな潟湖であるので、急速に埋積され、平野になったと思われる。

弥生時代に調査区付近は下府川本流の影響を直接受けて、粗粒堆積物が堆積したと考えられる。 $\varnothing 10\text{ cm}$ を越える礫が含まれ、これを運搬した水流は相当に強かったと推定される。当時の下府川は、洪水の度に流路が変わらるような流れであっただろう。

粗粒堆積物の堆積後は本流の影響を受けない後背低地の環境に変化し、増水時に河道から溢れだした流れによって細粒物が運ばれ、砂質シルト層が堆積したと考えられる。砂質シルト層中には粗粒物はあまり含まれておらず、増水時の強い水流を直接受ける環境ではなく、平野全体が冠水するような状態でもたらされたと考えられる。また、砂質シルト層は有機質をあまり含まないことから、平常時の環境は、葦などが茂る湿地ではなく、生活に適した場所であつただろう。

調査区東部で砂質シルト層の上位に重なる礫層は、確認できた範囲が狭いので詳細は不明であるが、分布範囲からみて調査区の東にある割り切りを開削後の下府川によってもたらされた洪水堆積物と考えるのが妥当であろう。

堆積物の観察から、古市遺跡の環境は弥生時代には下府川の影響を直接受けるが、その後は時折洪水の影響を受けるものの、比較的安定した環境であったとみられる。



第2図 古市遺跡井戸内柱状断面図

## 伊甘郷の歴史的背景

島根県文化財保護指導委員 桑原韶一

古市遺跡は、律令時代石見国那賀郡伊甘郷とよばれた地区にある。『延喜式』に載る山陰道六駅の終着駅である伊甘駅が置かれた地と推定され、現在も伊甘の地名が残っている。

伊甘郷内では、今のところ縄文時代の遺跡は未確認であるが、弥生時代になると上府町城山から扁平紐式袈裟繩文の銅鐸二箇体分が出土しているのをはじめとして、伊甘神社脇遺跡、川向遺跡があり、古墳時代になると七世紀中頃と考えられる終末期の片山古墳（方墳）をはじめ中ノ古墳、半場口一・二号墳が確認されている。浜田市内では西部の周布地区とともに早くから開けた地区である。

### 1. 石見國府の所在について

『和名類聚抄』の後世増補二十巻本の巻五国郡部第七二山陰部第六四によると「石見國府在那賀郡 行程上廿九日、下十五日」とあり、承平年中（九三一～九三七）には国府が那賀郡にあったことが知られる。この石見國府の所在地に関しては、（一）当初邇摩郡仁万町字御門に置かれたが後に那賀郡下府村字御所に移ったとする説（註1）、（二）江津市二宮町に置かれたが後浜田市下府町に移転したとする説（註2）、（三）藤岡謙二郎氏は下府移転説については明確な判断は示さず、下府については伊甘神社を北西隅に置き笛山城跡を含む方六町の国府域を推定（註3）。これらの諸説に対して（四）山本清氏は石見国駅が波波、託農、樟道、江東、江西、伊甘の順に記されていることから、国府は当初から伊甘郷にあり、しかも下府川流域の上府地内を有力視している（註4）。等があるが、そのいずれも伊甘郷内に存在したとする点では一致している。こうした諸説をうけて、昭和五十二年～五十四年度に石見國府跡の所在を確認するための発掘調査が、横路地区、伊甘神社脇、上府地区で実施されたが所在を確認できなかった（註5）。また石見國府に直接かかわる記録としては、『三代実録』に「石見國府事三處自開陥（下略）」（註6）、「為政奉政」をして邇摩大領伊福安道、那賀郡大領久米岑雄らが百姓二百十七人を率いて権守上毛野朝臣氏永を囲み、印匙を奪った事件（註7）のみで、その他の文献・地名からも確認するに至っていない。

### 2. 伊甘郷内にある古代社寺について

『延喜式』神名帳には那賀郡内に十一座が記され、そのうち伊甘郷内には、伊甘神社、櫛色天蘿箇彦神社の二座がある。伊甘神社は貞觀十一年（八六九）に從五位上熟七等が授けられたのを初見として、元慶三年（八七九）には正五位上に昇っている。この二座のほかに府中神が元慶三年に正五位下を授けられている。また石見國の古代寺院としては五ヶ寺が確認されているが、そのうち石見國分僧寺・尼寺・下府庵寺の三寺が伊甘郷内に所在している。国分尼寺を除く二寺は発掘調査がなされ、新知見が加わった。国分寺出土の瓦を比較検討した結果、国分僧寺・尼寺の創建は天平十三年（七四一）の国分寺建立の詔、あるいはそれに極

めて近い時期を示唆している(註8)。とすれば石見国府も当然その頃には伊甘郷に置かれていたとせねばなるまい。また下府庵寺は白鳳期の法起寺様式をもつ古代寺院であることが確認されている(註9)。

### 3. 中世の伊甘郷

石見の中世史は益田氏をおいては語られない。益田氏発祥の地ともいわれる伊甘郷の名が益田家文書の中に登場するのは、多少の問題点をもつ焼失八文書の元暦二年（一一八五）源義経から出された兼高の所領安堵の下文である。永正四年（一五〇七）写の『貞応二年（一二二三）石見国惣田数注文』(註10)によると、石見国全体で莊園六百二十八町余、公領八百三十七町余、合計千四百七十六町余で、伊甘郷を含む那賀郡はすべて公領となっている。このことは国衙権力とのかかわりを示すものと考えられる。伊甘郷五十六町六反余は郷本来の徵税部分である即郷三十五町。つねすゑ、良万、千代松等六ヶ所の在庁別名十四町九反余。ぬのまろ口、御目代正作田、鍛治給田等に分かれている。いうまでもなく御目代正作田は目代の直営田であり、鍛治給田は国衙に付属する鍛冶に与えられた給田であり、国衙に所属する手工業者の中に製鉄、鍛物師も編成されていたと思われる。

永正十年（一五一三）の府中八幡宮社領坪付(註11)にたら屋敷が、また承応二年（一六五三）の上村寺畠方新聞帳(註12)に、かちやひら、いものや、市、市しり等の地名がみているが、これらは国衙に所属する職業集団や関連する市の存在を示唆するものであろうか。

### 4. 伊甘郷と益田氏

石見国総田数のおよそ三分の一を所領とする益田氏は国府所在の那賀郡と本貫地美濃郡を中心として領有しており、国衙における優位を物語っている。このことは益田氏が有力在庁官人として、また在国司（代）とするにふさわしい存在であったといえよう(註13)。

『吾妻鏡』によると建久四年（一一九三）に佐々木定綱が石見国守護に任せられている。守護は他国の事例などから国衙に近いところに守護所を設けていることが多いが、石見国の場合、具体的な所在は明らかでない。下府町の卸売團地内に「近江屋敷」の地名が残っていたので、あるいはここに守護所が設けられていたとも推測される。

この伊甘郷は文永十年（一二七三）、阿忍が亡夫益田兼長からその地頭職の配分をうけ、一旦は道忍（益田兼弘）に譲ったもののこれを悔返し、正和二年（一三一三）に孫女鶴夜叉に譲っている(註14)。同年十二月八日には伊甘郷内福圓寺に田畠十一町歩を寄進してこれを禅寺に改め公家武家の祈禱、先祖の菩提、亡夫兼長及び阿忍の後生を願っている(註15)。さらに同五年の『阿忍置文』(註16)に「ふくおん寺たいりん寺阿忍かことく一大事とすへし」とあり、伊甘郷は益田惣領家に伝領されていたと考えられる。この福圓寺は貞和四年（一三四八）足利幕府から石見国安国寺にあげられている。国府所在地であったことのほかに北朝方として尽力していた益田氏と福圓寺の関係も無視できない。

永徳三年（一三八三）の足利義満袖判御教書(註17)の中に伊甘郷は益田氏所領

に含まれている。同年八月に作成された祥兼（兼見）の『置文条々』(註18)によると、伊甘郷は二男孫次郎兼弘に東山道郷等とともに譲られている。これには伊甘郷は国府とも号すと記している。また安国寺は先祖阿忍建立の寺、泰林寺は阿忍塔頭の所であり両寺とも賞讃すること、白口大明神（御神本大明神）は益田氏の名字の起源であり、往古より一族が伊甘郷で頭役を勤仕し神事を行ってきた。今後とも退転することなくもっとも奔走すべき祭であるとして一族の精神的結合の要として重要視している。

その後永享十二年（一四三九）の足利義教袖判御教書まではいづれも益田氏の所領として安堵をうけている。ところが文明元年（一四六九）の『石見国三隅中務少輔豊信知行分』(註19)によると府中国衛として三隅氏が知行している。また同四年の足利義政袖判御教書では益田貞兼の知行となり、同十三年（一四八一）の三隅貞信起請文(註20)では「（上略）縦雖有御判之物并文証等未代不可致難望候、殊御知行分伊甘郷事雖如何跡之支証所持仕候、可為反古候（下略）」と伊甘郷の領有をめぐって、益田氏と三隅氏の間に対立があり益田氏は三隅氏から没収していく、伊甘郷の領有権は益田氏—三隅氏—益田氏へと移動している。

その背景には惣領家益田氏と庶子家三隅氏の執念ともいうべき確執もさることながら、康暦の内戦前後石見国内に二人の守護が併立即ち守護所が二箇所に存在したこと(註21)もあながち無関係とは考えられない。中世の諸国府中がその国内の政治・経済の中権的機能をしめていたと考えられるなかで、大内氏の濃摩分郡知行により本来の守護所の存在していたと考えられる石見府中即ち伊甘郷の地位が衰微したと推測される。その結果伊甘郷の領有は益田氏、三隅氏にとっても從来程の重要性を有しなくなったのではないか。そのことは明応九年（一五〇〇）の福屋氏重臣四名の府中八幡神主藤井修理亮への打渡坪付(註22)、天文三年（一五三四）の福屋正兼の安国寺寄進状(註23)、さらに永禄五年（一五六二）の周布元兼の府中八幡宮への寄進状(註24)等にみられるように益田氏、三隅氏のほかに福屋氏、周布氏も伊甘郷に進出しており、益田氏による伊甘郷領有は形骸化しているといえよう。天文二十四年（一五五五）福屋氏に属していた神主越前守兼貞（岡本氏）が東方豊後守に出した文書(註25)によると、今まで伊甘郷、府中国衛と記されていたのが単に荷中と記され、その中に上荷・下荷の名がみえている。

## 5. 伊甘郷と吉川氏

永禄五年（一五六二）の福屋氏の滅亡、毛利氏の石見進出という動きのなかで府中の支配関係も変化した。永禄十三年（一五七〇）の益田藤兼が元祥に譲った所領の中には伊甘郷の名はみえない(註26)。そして天正十年（一五八二）には吉川元春は安国寺住職執務状を発し、同二十年には吉川元春家人連名の『石州郡賀郡伊甘郷内安国寺領打渡坪付』が出来ている(註27)。このなかには安国寺の塔頭であった曇華庵（土現庵）、曹溪庵（宗慶庵）などの名もみえている。年代不詳ではあるが『吉川広家領地付立』(註28)に「一五〇貫、伊甘江（勘）」とあり、伊甘郷は完全に益田氏から吉川氏の領有するところとなっている。

そして慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いを契機として、伊甘郷をはじめ石見国は徳川氏の直轄領となり、元和五年（一六一九）になって古田氏の浜田藩が

成立し、伊賀郷はその中に組み込まれた。元和五年の『石見国古田領郷帳』(註29)にはかつての府中村は、本郷と下府村と記され、正保四年（一六四七）の『石見国古田領郷帳』(註30)では、本郷上荷村と下府村及びその枝郷国府（分）村と村名が変わり近世幕藩体制下の一村落としての歩みが始まるのである。

## 註

- (1) 島根縣『島根縣史』第五卷 大正十四年
- (2) 大島幾太郎『那賀郡史』 昭和十五年
- (3) 藤岡謙二郎『國府』 吉川弘文館 昭和四十四年
- (4) 島根縣『新修島根縣史』通史編1 昭和四十三年
- (5) 島根縣教育委員会『石見國府跡推定地調査報告』I～III  
昭和五十三年～昭和五十五年
- (6) 『三代実録』卷二十一 貞觀十四年一月十四日条
- (7) 『三代実録』卷四十六 元慶八年六月二十三日条
- (8) 前島巳基「山陰における初期造寺活動の一側面」、内田律雄「石見國分寺瓦について」『山陰考古学の諸問題』 昭和六十一年
- (9) 浜田市教育委員会『下府廃寺跡』 平成五年
- (10) 『鎌倉遺文』卷五  
井上寛司「貞応二年石見国惣田数注文の基礎的検討」『山陰史談』十八号
- (11) 『尾崎家文書』 上府町尾崎正夫氏蔵
- (12) 浜田市立図書館蔵
- (13) 関幸彦『国衙機構の研究』 吉川弘文館 昭和五十九年
- (14) 『益田家什書』五三ノ一
- (15) 『安国寺誌国苑掌鑑』 安永四年安国寺蔵
- (16) 『益田家什書』五三ノ二
- (17) 『益田家什書』三ノ八
- (18) 『益田家什書』七三ノ一
- (19) 『益田家什書』八三ノ九
- (20) 『益田家什書』五七ノ一七
- (21) 温泉津町『温泉津町誌』上巻 平成六年
- (22) 前掲註11
- (23) 前掲註15
- (24) 前掲註11
- (25) 『岡本家文書』写本 県立図書館蔵
- (26) 『益田家什書』三四ノ二
- (27) 前掲註15
- (28) 『吉川家文書』六九四 大日本古文書家わけ九
- (29) 明治大学刑事博物館編『明治大学刑事博物館資料』第四集 昭和五十四年
- (30) 前掲註29

# 古市遺跡出土土器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻利一

## 1.はじめに

全国各地の窯跡出土須恵器を蛍光X線分析法を使って分析した結果、K、Ca、Rb、Srの長石系因子を中心にしていくつかの元素で地域差があることが見つけられた。これらの元素を中心にして産地推定法を組み立てれば、遺跡出土須恵器の産地を推定することができる。さらに、産地推定のデータが集積されていると、土器の伝播・流通を通して過去を再現することが可能となる。このような考え方方に立って、須恵器の産地推定法の開発研究が進められてきた。いま、各地で各時代の須恵器の伝播・流通の大きな流れを把握するための研究が考古学者と共に進められている。この流れがわかってしまえば、遺跡出土須恵器の産地は胎土分析によって容易にわかるようになる。現在はその前の段階に相当し、各時代の大きな流れを求めているところである。例えば、5世紀代については大阪陶邑から初期須恵器が供給されてくるという一つの大きな流れがある。これに対して、在地窯の供給という小さな流れがある。それほど陶邑窯に対する地方窯の力は小さい。しかし、6世紀代に入ると、島根県下でも陶邑からの流れは小さくなる。この点では九州北部地域でも同様である。7~9世紀代の須恵器の伝播の流れは未だ十分には把握されてはいない。このような段階での須恵器の産地推定では考古学的諸条件が与えられると、胎土分析のデータ解説はずっと楽になる。

一方、土師器はそれを焼成した窯跡がほとんど残っていないので、胎土分析のデータ解説には土器の年代、器形などの考古学的条件の有無が大きな影響を与える。

本報告では浜田市の古市遺跡から出土した須恵器と土師器の蛍光X線分析のデータを考古学的条件を加味して解説した結果について報告する。

## 2. 分析結果

分析法は従来通りであり、土器片試料の表面を研磨してのち粉碎した。粉末試料は錠剤試料に成形し、蛍光X線分析を行った。

分析値は表にまとめられている。全分析値は同時に測定した岩石標準料JG-1の各元素の蛍光X線強度を使って標準化した値で表示されている。この表の生データを使って、いくつかの分布図を作成し、分布図上でデータ解析を行った。

図1には須恵器のRb-Sr分布図を示す。奈良時代のNo1とNo2の須恵器は大きくて別々に分布し、別胎土であることを示している。Rb量の多いNo2は石見の胎土であり、Rb量が中程度で、Sr量が少ないNo1は陶邑の胎土である。

平安時代の須恵器の中ではNo57のみが離れて分布しており、他の8点の須恵器は比較的まとまって分布する。

鎌倉時代の2点、No55とNo56は接近して分布しており、同じ胎土である可能性を示している。

次に、図2にはK-Ca分布図を示してある。この図でもNo1とNo2は大きく離

れて分布しており、図1と同様、別胎土であることを示している。平安時代の須恵器のうち、No57はK-Ca分布図でも他の須恵器から離れて分布しており、別胎土であることを示す。図1では他の須恵器はまとまって分布したが、図2ではこのうち、No3とNo4も離れて分布する。No3、4は平安時代前期の須恵器であり、年代的に他の須恵器と異なる。したがって、K-Ca分布図にみられるこのずれは胎土の違いを示すものと理解される。

No55、56はK-Ca分布図でも接近して分布する。

次に、図3にはNa因子を比較してある。奈良時代のNo1とNo2は離れて分布する。

平安時代の須恵器ではNo3、4、57のグループと他のグループに2分される。

鎌倉時代のNo55とNo56は接近して分布する。

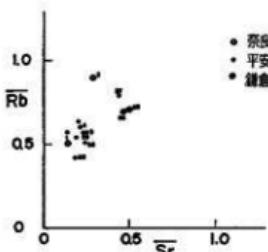
以上の結果、奈良時代のNo1とNo2はどの分布図でも離れて分布しており、別胎土であることは明白である。このうち、K、Rb量が多いNo2は石見的胎土であるのに対し、K、Rb量が中程度で、Ca、Sr、Naが少ないNo1は陶邑的胎土である。

平安時代の須恵器はNo3、4のグループ、No57、それに残りの須恵器グループと3分される。少なくとも3カ所の産地から須恵器が供給されていた訳である。このうち、K、Rb量が比較的多いNo57は石見的胎土である。No3、4については以下のところ、対応する産地はなく不明である。大井窯群や古曾志窯群の製品ではない。他の5点の須恵器は陶邑的胎土をもつ。このうち、No5、6は平安時代前半、No7は平安時代中期、No58、59、60は平安時代後期の須恵器である。これらはいずれも類似した胎土をもつが、とりわけ、No58とNo59はどの分布図でも接近して分布しており、器形から予想されたように、同一個体の別試料である可能性は十分考えられる。

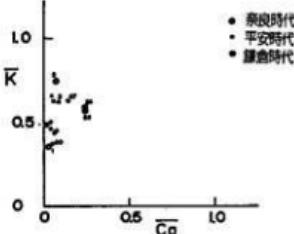
同様に、鎌倉時代のNo55とNo56も全分布図で近接して分布しており、同一個体の別試料であると思われる。このNo55とNo56はRb-Sr分布図やK-Ca分布図での分布位置からみて、石見産の須恵器ではない。大井窯群の胎土の可能性もあるが、ここはむしろ、西脇市や姫路市周辺の兵庫県産の須恵器胎土に類似するという考えをとりたい。したがって、亀山焼の可能性は十分ある訳である。

次に、土師器の分析結果について説明する。表をみると、Sr因子のばらつきが非常に大きいことがわかる。このようなことは近畿地方でも、一部の土師器と瓦器などについてしばしば観測してきた。このようなことは須恵器ではみられなかったことであり、その理由は不明である。ただ、Sr因子が大きくばらつくので、Rb-Sr分布図を作成しても、ほとんど有意な情報を入手することができないので、土師器についてはRb-Sr分布図は作成しなかった。K-Ca分布図とFe、Naの一次元分布図を作成して、各時代の土師器胎土を比較することにした。

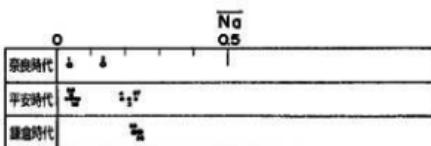
今度は説明のしやすさの都合上、鎌倉時代中期の土師器胎土から示す。図4には鎌倉時代中期の土師器のK-Ca分布図を示す。全体はよくまとまって分布しており、No48を除く他の試料を包含するようにして土師器領域を描いた。鎌倉時代中期のこれらの土師器は同じ胎土をもつものと理解される。



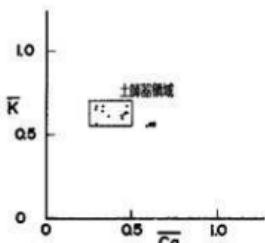
第1図 須恵器のRb-Sr分布図



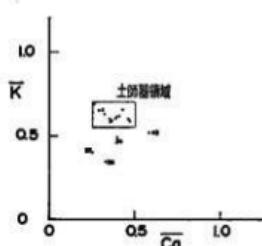
第2図 須恵器のK-Ca分布図



第3図 Na 因子の比較

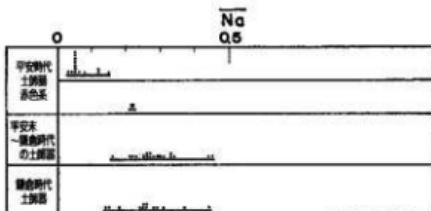


第4図 鎌倉時代の土師器のK-Ca分布図

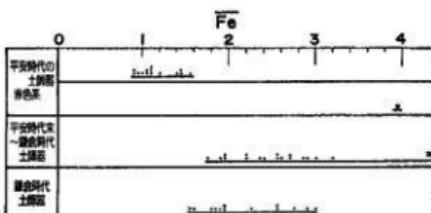


第5図 平安時代後期～鎌倉時代の土師器のK-Ca分布図

データをみる限り、古市遺跡へ供給した土師器の産地は平安時代後期までは何カ所かの複数の産地であったが、平安時代末から鎌倉時代にかけて、次第に1カ所の固定した産地から供給されるようになり、鎌倉時代中期には1カ所の産地からのみ、土師器が供給されるようになった。このような土師器生産地の移り変わりを今回の分析データから読みとることができる。



第7図 土師器のNa因子



第8図 土師器のFe因子の比較

図5には平安時代末期～鎌倉時代の土師器のK-Ca分布図を示す。大部分の土師器は図4で描いた土師器領域に分布し、鎌倉時代中期の土師器と同じ胎土であることを示している。しかし、すべてが土師器領域に分布した訳ではなく、No33, 34, 37, 42の4点はずれて分布し、胎土が異なる土師器も混ざっていることがわかる。

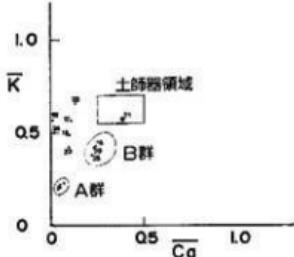
図6には平安時代後期の白い土師器と赤い土師器のK-Ca分布図を示してある。注目されるのはNo21の赤い土師器のみが土師器領域に分布し、他の白い土師器はすべて土師器領域を離れたことである。このことは白い土師器は平安時代末、および、鎌倉時代の土師器とは別胎土であり、別の場所で作られたことを示す。さらに注目すべきもう一つの点はこれら平安時代後期の土師器はかなりばらついて分布しており、いくつもの場所で作られた土師器が混ざっているということである。このうち、No8, 9, 10, 11, 12はまとまって分布しており、これをA群とした。同様に、No19, 20, 25もまとまって分布しており、これをB群とした。これら2群は他の因子についてもよくまとめており、A, B群の2群を形成する。これらはそれぞれ、別の場所で作られた土師器である。他方No15, 17, 18, 22, 23, 24は少しばらついて分布する。これらは同一胎土をもつとみなすのは疑問がある。

以上にみてきたように、平安時代末～鎌倉時代の土師器胎土は鎌倉時代中期の土師器胎土と類似するが、平安時代後期の土師器胎土とは異なることがわかった。

このことはFe, Na因子でも確かめてみた。図7にはこれらの土師器のNa因子を比較してある。平安時代末～鎌倉時代の土師器と鎌倉時代中期の土師器ではNa因子でも差異は認められないが、平安時代後期の白い土師器とは明らかに異なる。ここで注目すべき点は平安時代後期の赤い土師器胎土はK-Ca分布図のみならず、Na因子でも平安時代末～鎌倉時代および鎌倉時代中期の土師器胎土によく対応していることである。赤い土師器は平安時代末から鎌倉時代にかけて古市遺跡へ供給された主要な土師器の胎土と類似していたことである。

最後に、Fe因子を図8に比較してある。平安時代末～鎌倉時代の土師器胎土はFe因子でも、鎌倉時代中期の土師器胎土と類似する。これに対して、平安時代末の白い土師器には明らかにFe量は少ないことがわかる。逆に、赤い土師器にはFe量が多い。外見上、赤く焼けてみえるのは素材粘土中にFeが比較的多く含有されたためである。赤い土師器は1点しかないので、これがFe因子で平安時代末～鎌倉時代の土師器胎土に対応するかどうかは速断できない。ただ、No21の1点の試料をみると、どの土師器胎土よりもFe量が多い。

土師器は日常用具である。一般的には、日常用具である土師器は在地産と考えるのが常識であろう。ただ、その製作場所は1ヵ所ではなく、何ヵ所かで製作され、古市遺跡へ供給されたものであろうと推定される。今回の



第6回 平安時代末の土師器のK-Ca分布図

# 古市遺跡出土土器の分析値

番号	遺物名	時期	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	備考	断面
1	灰陶器	奈良後半	0.353	0.018	2.18	0.496	0.139	0.035	混入	図30-9
2	"	"	0.739	0.066	1.27	0.888	0.286	0.137	遺物包含層中	図30-1
3	"	平安後期	0.622	0.085	2.42	0.568	0.245	0.208	"	
4	"	"	0.632	0.052	2.33	0.596	0.207	0.188	混入 磁器土器	図30-5
5	"	"	0.502	0.038	2.32	0.635	0.202	0.059	遺物包含層中	
6	"	"	0.462	0.040	1.49	0.539	0.188	0.041	"	
7	"	"	0.483	0.013	1.66	0.569	0.142	0.037	混入	
8	土器(白)	"	0.220	0.052	1.07	0.241	0.154	0.045	SK2012-基	
9	"	"	0.201	0.044	0.966	0.260	0.097	0.045	"	
10	"	"	0.207	0.052	1.11	0.246	0.118	0.047	"	
11	"	"	0.209	0.047	0.908	0.245	0.097	0.049	"	図28-8
12	"	"	0.233	0.069	0.890	0.290	0.258	0.055	"	図28-2
13	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
14	"	"	"	"	"	"	"	"	"	図28-6
15	"	"	0.493	0.103	1.18	0.629	0.358	0.047	"	
16	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
17	"	"	0.566	0.108	0.976	0.693	0.460	0.122	"	
18	"	"	0.567	0.018	1.46	0.608	0.195	0.123	SK2002-基	図27-11
19	"	"	0.429	0.238	1.40	0.612	1.03	0.052	"	図27-14
20	"	"	0.423	0.232	1.09	0.526	0.916	0.047	"	
21	土器(赤)	"	0.567	0.381	3.95	0.519	0.612	0.220	"	図27-15
22	土器(白)	"	0.421	0.095	1.08	0.509	0.581	0.044	SK2008-基	
23	"	"	0.656	0.134	1.57	0.639	0.445	0.149	"	
24	"	"	0.504	0.020	1.12	0.621	0.186	0.084	"	図27-25
25	"	"	0.383	0.220	1.46	0.466	0.736	0.027	"	図27-32
26	土器	平安末-鎌倉	0.586	0.355	2.72	0.616	0.790	0.268	遺物包含層中	図31-3
27	"	"	0.598	0.348	2.70	0.649	0.857	0.249	"	
28	"	"	0.656	0.313	3.22	0.558	0.547	0.272	"	図31-2
29	"	"	0.607	0.390	2.39	0.574	1.10	0.221	"	
30	"	"	0.651	0.285	2.20	0.627	0.460	0.329	"	
31	"	"	0.594	0.362	3.02	0.608	0.656	0.228	"	

番号	遺物名	時期	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	備考	図版番号
32	土師器	平安末~鎌倉	0.591	0.472	2.36	0.578	1.01	0.334	遺物包含層中	図31-4
33	フ	フ	0.347	0.333	4.51	0.176	0.468	0.164	フ	
34	フ	フ	0.492	0.392	2.22	0.335	0.959	0.449	フ	
35	フ	フ	0.655	0.427	1.97	0.615	1.08	0.288	フ	
36	フ	フ	0.685	0.255	1.74	0.627	0.458	0.343	フ	
37	フ	フ	0.397	0.246	2.85	0.302	0.710	0.206	フ	
38	フ	フ	0.626	0.317	2.55	0.694	0.466	0.311	フ	
39	フ	フ	0.607	0.394	1.96	0.611	1.11	0.256	Pit2018	図29-6
40	フ	フ	0.616	0.411	2.55	0.688	0.978	0.282	Pit2092	図29-2
41	フ	フ	0.603	0.457	2.88	0.553	0.867	0.260	遺物包含層中	
42	フ	フ	0.518	0.577	1.90	0.321	2.14	0.442	フ	
43	フ	量食器	0.646	0.293	1.93	0.588	1.01	0.137	SD2002層下層	図16-8
44	フ	フ	0.672	0.286	2.23	0.532	0.948	0.145	フ	
45	フ	フ	0.639	0.328	2.75	0.566	0.642	0.261	フ	図16-7
46	フ	フ	0.612	0.437	1.93	0.567	1.09	0.256	フ	
47	フ	フ	0.673	0.468	1.88	0.615	0.830	0.374	フ	図16-6
48	フ	フ	0.551	0.577	1.55	0.588	1.38	0.438	フ	
49	フ	フ	0.634	0.467	1.78	0.505	1.12	0.281	フ	
50	フ	フ	0.633	0.458	1.60	0.599	1.09	0.285	フ	
51	フ	フ	0.630	0.461	2.57	0.551	1.02	0.249	フ	
52	フ	フ	0.671	0.327	1.87	0.588	0.575	0.312	フ	
53	フ	フ	0.559	0.285	2.99	0.517	0.588	0.182	フ	
54	フ	フ	0.599	0.443	2.54	0.573	0.985	0.248	フ	図16-12
55	豪華器	フ	0.572	0.244	2.06	0.701	0.500	0.225	フ	図16-13
56	フ	フ	0.578	0.243	1.88	0.686	0.462	0.234	フ	図16-14
57	フ	平安	0.625	0.143	1.40	0.785	0.436	0.233	SK2002-括	
58	フ	フ	0.428	0.063	2.29	0.513	0.243	0.042	SK2008-括	図27-31
59	フ	フ	0.445	0.074	1.87	0.569	0.235	0.050	フ	
60	フ	フ	0.367	0.049	2.97	0.415	0.179	0.038	遺物包含層中	図31-8
61	土師器	量食器	0.608	0.356	2.89	0.520	0.718	0.235	SD2002層下層	
62	フ	平安末~鎌倉	0.663	0.310	2.58	0.594	0.460	0.302	SE2004	

义

面